
聖竜の姫巫女?

ルシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖竜の姫巫女？

【Nコード】

N4576Z

【作者名】

ルシア

【あらすじ】

今から約七年前、突如飛空艇に攫われたアイリを探すシンクノアだったが、彼女は実はく地の崖で国>(パラドキア)という場所へ連れてこられていた。王に次ぐ地位にあると聞いていい竜騎士のファルークに求められるアイリだったが、彼女は今も幼馴染みであるシンクノアのことを想っていた……。一方、そのような到底自分の手が届かぬ場所にアイリがいると知らないシンクノアは、ルークやセシルといった仲間とともに旅を続けるのだったが、彼はいつか彼女に会うことが出来るのだろうか？

第1章 天空の島の美姫

＜地の崖ての国＞の上空には、アストラ・オータ天空島と呼ばれる城砦都市が聳えていた。

天空島は東西15エリオン、南北15エリオン（1エリオンは約1km）ほどの小さな島で、パロドキアと呼ばれるこの世界の地の崖て。その見渡す限り岩石しかない痩せた茶色い土地だけを移動していた。とりあえず、今のところは。

地の崖てに住む民たちは、自分たちの土地を＜地の崖て＞（パロドキア）と呼ぶのに対し、聖ルシアス王国を中心とした他民族の跋扈する世界を＜中央世界＞（エルシオン）と呼んでいる。またそこに住む人々のことを「人間族」とか「人族」と呼び、自分たちのことは「竜族」、あるいは「竜族の末裔」と呼んだ。

ここでひとつ、今から千年以上も昔の、ある伝説にまつわる物語を語らなければならぬだろうか。

吟遊詩人もよく歌に歌っているとおり、この世界が誕生した時（ということとは、それは千年どころでなく、実際にはさらに大昔ということだが）、最初この世界には神と大いなる闇しか存在してはいなかった。

そして、神が「光よ、あれ！」と言った時、この世界に誕生したのが光の女神ルシアであった。創造主である神は、最初から自分とともにあった闇よりも、この光のほうをより愛した。そのことに反発心を感じたく闇は、自分も神の真似事をして、創造の業をなすようになったという。

すなわち、神が自分の伴侶のような存在ともいえる、光の女神ルシアと海を創り、大地を創り、鑄た鏡のような天空を創り、大地に萌える若草を育み、やがて動物や人間といった生き物を誕生させるのを、＜大いなる闇＞は暫くの間、ただ黙って見ていた。神が光の女神ルシアと創造の御業をひとつ行つたたび、＜闇＞が世界を支配す

る領域は狭まっつていったが、<闇>は最初、そのことを忌々しいと感じながらもただ静観していたのだ。

だが、創造神と光の女神が「人間」という存在を形作り、創造主である自分と光の女神を覚えて讃美させようとした時　　<大いなる闇>はその賞讃すべき対象の中に自分が入れられていないことを知り、初めて怒りに身を震わせたのである。

こうして、<大いなる闇>は己を賞讃する存在を欲し、創造神の真似事をして、自分もまた「人間」に匹敵する存在、いや、人間以上の存在を誕生させようと考え、まずは闇の女神アシエラを光の女神ルシアに匹敵する存在として生みだした。

そしてアシエラが自分の伴侶を欲すると、彼女の胎内から闇の神が生まれた。アシエラは彼を「わたしの血肉からの男」と呼び、自分の伴侶にアルゴルと名づけたのである。

ところで、世界の中心と^{エルシオン}呼ばれる場所に創造神と光の女神が人を住まわせ始めた頃　　世界の崖てにある場所は不毛の土地と考えられており、未だ火山活動が活発な岩山が聳え立っていた。<大いなる闇>はそこにアシエラとアルゴルを住まわせると、彼らが「人間」よりも強大な種族を生みだすようにさせた。

すなわち、それこそが「竜族」と呼ばれる人々である。<大いなる闇>は、その前に世界の崖てにある闇の底から暗黒竜が昇って来られるようにし、「竜族」にその竜を操る技を伝授したという。

闇の女神アシエラは光の女神を憎み、暗黒竜によって何度となく攻撃を試みたが、その度に光の竜ルシアスがこれを撃退した。アシエラが悔し涙を流すのを可哀想に思ったアルゴルは、彼女とともに最初は二つの頭部がある竜を創造し、それがルシアスによって破れると、今度は三つ頭のある竜を、それもまたルシアスによって殺害されると、次は四つ頭の竜、五つ頭の竜、六つ頭の竜……そして最後には九つ頭のある巨大な魔力を持つドラゴンによって、ルシアスがこれと戦うよう仕向けた。

闇の軍勢どもの執拗な攻撃に、流石のルシアスも深手を負った。

九つ頭のヒュドラと呼ばれる竜もまた、ルシアスに頭を八つ噛み干切られた形でほうほうの体により逃げ去った。

この時、ルシアスは自身の名を冠したルシアス島という小さな島まで行き（この島は今も、ロンディーガ王国の南西にある）、そこにある洞で体中に負った怪我を回復させようとした。何故といってヒュドラが地脈の濃い地で羽を休ませ、傷が癒え次第再び襲つてくるといふことが、彼にはよくわかっていたからである。

だが、ルシアスの体は弱りきっていた。その無限とも思われた体力の消耗は激しく、いまや虫の息にも等しかった。そして人間の目には不死と見えていたルシアスがその命の灯火を消そうかという時、竜の洞にルーシュという名の人間が現われたのである。

彼女は十弦の竖琴により、ルシアスの心を慰め、さらにはエリクシアルと呼ばれる樹木の葉から霊能薬を作りだし、それによってヒュドラから受けた傷により、壊死しつつあるルシアスの骨や筋肉を回復させたといふ。

その後、ルシアスは見事ヒュドラを完全に撃退せしめたが、十の頭を持つ竜が再びエルシオンを脅かすということとはなかった。何故なら、創造主である神がそれ以上の両者の戦いを決して許そうとはしなかったからである。

地上に再び平和が戻ると、ルシアスは光の女神ルシアに人間になることを願い求めたといふ。ルシアは、自分や世界そのものを盾となつて守つてくれたルシアスに対し、その褒美として彼に人間になることを許した。

こうしてルシアスはひとりの人間の男になると、ルーシュを妻に迎えて中央世界の最初の王となった。すなわち、これがルシアス王国の建国伝説なのであるが、聖竜ルシアスが竜から人間になろうという時、竜としての力は七つのものに分化したと言われている。つまり、ひとつは剣、ひとつは槍、ひとつは杯、ひとつは指輪、ひとつは盾、ひとつは兜、ひとつは鎧である。

これらはのちに<七つの聖鍵>、あるいは聖竜の秘宝と呼ばれる

ようになり、暗黒の軍勢の目より逃れて世界各地へ隠匿されるようになったのだが、そのようなものが「今も真実、本当にある」と信じている人間というのは、おそらく稀であろう。

ただし、これは<地の崖てに住む民>を除いた、中央世界の人間の中では、という意味であり、<地の崖てに住む民>はみな、現在もそのようなものが間違ひなく世界のどこかに存在しているということ、よく知っていたのである。

嗚呼、我が魂は熱く燃え

そなたの肉体と心とを、この上もなく切に求めて喘ぐ

そなたの清らかな心の一滴

それが得られたならば、我が持つすべてを投げだすものを

だが、我は竜

恋しいそなたは人間の娘

誰がこの境界を越えられようか

また誰がこの熱い血のたぎりを沈めえようか

嗚呼、我が魂は熱く燃え

そなたの肉体と心とを、この上もなく切に求めて喘ぐ

嗚呼、我はそなたの奏でる琴の一弦になりたい

あるいは、そなたが手を浸す清らかな泉の水の一滴にでも

だが、もしそれすらも叶わぬというのなら

この体などあのおぞましい暗黒竜にでもくれてやろう

ただ、そなたの愛

それが得られるというのなら、我は再び力を盛り返し

たとえこの身が滅ぶことになるうとも、ヒュドラを撲滅せんと立ち上がるうものを

このあと、聖竜ルシアスの愛の告白を受けて、人間の娘ルーシユの美しいアリアが歌われることになるのだが、パラドキアの歌姫と呼ばれるアイリは、そこでふと、豎琴を奏でる手を止めた。

<奏楽の間>と呼ばれる城の一室で、彼女は窓から遠く今も古代の竜がその火口に眠ると言い伝えられるネイティーン山を見やった。もつとも、天空の島が空を移動し、火口の上空を通過する際、そこを覗き見たとしても 灼熱の赤いマグマ溜まりが見えるという以外、他には何も無いということアイリは知っている。

自分をここへ連れてきた、アシランズという竜の片眼を持つ男が、そう教えてくれたのである。

「これもまた、言い伝えられるところでは、ということだが……その昔の昔は、本物の竜というのは、我々が今飼っている竜などより遥かに大きかったということだ。だが、人に飼い慣らされるうちに自然、千年もの時をかけて竜は小さくなっていき、また卵をなかなか産まなくなつた。これがどうということだか、寒村の田舎娘にはわかるかね？」

アイリは、自分の声で答えるかわりに、ポロン……とリユートの弦を爪弾き、疑問の音色をその時彼に返した。この<世界の崖>及び、パラドキアという場所へアイリが連れて来られたのは、今より七年前 十六歳の時のことになる。

以来、天空島と呼ばれる城砦都市の高い塔の一室へ閉じこめられ、時折豎琴を爪弾いたり、歌を歌って過ごすという他に、彼女にはなんの役目も責務も負わされはしなかった。

『アイリ、アイリーっ！！どこへ行くんだよおっ！！俺を置いて

いくなよーっ!!』

星月夜の祭りの夜、そう叫びながら、最後まで自分のことを追ってきた少年のことを、アイリは今もまざまざと瞼に思い浮かべることが出来る。だが、飛空艇は無常にも、万年雪を頂く白竜山脈の彼方へと、今しも飛び去ろうという頃だった。

『シンクっ……!!あたし、あんたを置いていくんじゃないわっ!!必ず戻ってくるから、絶対に待っててっ!!』

飛空艇の甲板から地上へ飛びおるには、すでにもう危険すぎるほどの高さがあった。だがもし、魔法の力による見えない壁さえなかつたなら、アイリはおそらく重傷を負うことも顧みず、その時そこから身を投げだしていたかもしれない。

それも自分のため、というよりは……他でもないシンクノアという名の、真紅の瞳をした少年のために。彼はイツファロ王国の言葉、イツファノ語で言うところのマザル＝マゴク＜忌み子＞と呼ばれる子として生まれた。マザルというのは、第13の月の意味で、マゴクというのは呪われた子、あるいは畸形児を意味する言葉である。

アイリは生まれた時から白竜山脈に抱かれた麓の寒村　イツァーク村から外へ出たということがない。もちろん近隣の村々や一番近い場所にある大きな町へなら、出かけたことがあるにしても、他の聖五大陸の人々の暮らしなどについては、噂話や物語として聞く以外、本当のことを何ひとつ知らずに育った。

だから彼女は、第13の月に赤い瞳の子が生まれると、他の国の人々もその子を＜忌み子＞、呪われし子として捨てる風習があるのかどうかかわからない。初めて村外れに住む、「イツァーク村きつての奇天烈ばあさん」と呼ばれるマリサの丸太小屋を訪ねた時、アイリはまだ五つだった。ふたつ年上の姉、ライリが熱をだし、薬草師のマリサの元まで薬を受けとりに行くことになったのだ。

父は町であつた集會に参加する用があり、母は高熱をだすライリにかかりきりで、薬を受け取りにいけるとしたら、たった五つのアイリ以外、他には誰もいなかったのである。

「このユートニップの根を煎じたものは、熱によく効くからね。なに、明日の朝にでもなればきつと、熱も下がって落ち着くだろうよ。それから、シンク。ぼさつとしてないでおまえ、この可愛いお嬢さんを送ってっやおやりよ」

アイリは、近所の子供たちがみなマリサを「魔女」と呼んでいるのを知っていたし、シンクノアのことを魔女の子だと信じて疑っていないのを知っていた。そしてみな「血のように赤い眼をした魔女の子」と呼ぶ子に初めて会い、彼女が感じたことといえば「ただ純粹に驚いたという、それだけだった。」

「あら、あんたの目玉つてば、うさぎの赤いのにそっくりね！」

色々な動物の骨やら、干し魚や干し肉、薬草類が丸太の垂木からぶら下がる部屋で、その時シンクノアは砥石で包丁を砥いでいるところだった。炉辺の敷物に座ったまま、シュツシュツといつまでも永遠にそうしているのではないかとアイリには思えたけれど、アイリのことを振り返った彼の顔は、どこかぼかんとしたような、不思議そうな感じだったのを彼女はよく覚えている。

「マリサ。俺、包丁とんだよ」と、シンクノアは鼻の下をこすりながら言った。

「あいよ。まあ、いい出来映えだね。明日はこいつで、鹿肉の燻製作りでもしようかね」

「俺、煙を燻すの手伝ってやるよ、マリサ」

「そりゃそうだともね。他に一体誰がいるんだい？まさかこの年寄りひとりに冬支度のすべてを賄わせようなんてんじゃないだろ。この家に住むのはあんたとあたしのふたりきり。ふたり分の食い扶持は、ふたりでなんとかしないとね」

この時アイリは、シンクノアとマリサのやりとりを見ていて、思わずくすくす笑いださずにはいらなかった。もし今、窓から村一番のおしゃべりと評判の、エルナばあさんが外から見ていたらどうだろう。おそらく彼女はマリサとシンクノアが包丁をためつすがめつじつと眺め、人を呪い殺す算段をしているとも思いこんだの

ではないだろうか？

「なんだ、おまえ。一体何がそんなにおかしいんだ？」

馬鹿にされた、と思ったのかどうか、シンクノアがムツとした顔をしてアイリのほうを睨んだ。その瞬間、すっかり忘れていた姉のライリのことを思いだし　アイリは少し罰の悪いような気持ちになった。

何故と違って、アイリは一間しかないその居心地のいい部屋にまだいたかったし、この自分と同じくらいの年の子と色々話してみたかった。けれども今は、ユーニップの根を刻んだ熱冷ましの薬を、一刻も早く家まで持って帰らねばならない。

「いいから、ほら、シンク。早く外へ行く支度をおし。そしてこの可愛いお嬢さんを見どり川にかかる丸太橋のあたりまで送ってつてやるんだよ」

「……………」

シンクは返事をしなかったけれど、それでものろとした動作で壁の木釘にかかっている毛皮の外套を手にとって着ていた。その時、アイリには彼にとってマリサの命令というのは絶対なのだろうということが、なんとなくわかった。

自分も、冬に外の厠へ行く時や、その他家の用事を足すのに納屋を出入りする時なんかによく今のシンクのような気持ちになることがある。納屋に獣油をとりいき、ランプにそれを足すのは面倒だけど、かといって親の言いつけに従わないわけにもいかないのだ。

「あんたって面白いわね。あたし、明日もまたここに来て、あんたやマリサが鹿肉の燻製を作ったりするの、見てもいい？」

「おまえんち、そんなに暇なのか？」

アイリが両手に白い息を吐きかけていると、シンクは相変わらずぶっきらぼうな口調でそう聞いた。

「べつに、暇ってわけじゃないけど」と、アイリも少しムツとして言った。「家の用事が済んだら、近くの子たちと遊んでもいいって

ことになってるの。だからあたし、明日もここへ来るわ」

「ふうん。じゃあ、好きにすれば？」

そのあと、随分長い間会話が途切れた。イツアーク村の九月は、すでに冬の足音の聴こえる寒さで、<？（ラゼル）の刻>ともなれば、じんとする冷たさが子供の耳朶を痺れさせた。

それでもシンクはみどり川の丸太橋のところまでと言わず、アイリのことを家の庭が見える近くまで送っていつてくれたのだ。ルエルナと呼ばれる金の月は半月で、ルエルガと呼ばれる鈍色がかつた銀の月もまた同じように半月だった。そしてこの双子のような月が、落ち葉の香る森を不思議な青さで照らしだす中を……ふたりの子供は影を重ね合わせるようにして歩いていったのだった。

この時のことを思いだすたび、アイリは今も少し不思議な気持ちになる。言葉がなくてもお互い特に窮屈でもなく、体は寒いはずなのに、心は何故か温かいという、いわく言葉ではうまく言い表せない気持ちだった。

そしてこのことはおそらく シンクノアも同じだろうとアイリは確信しているのだけれど、アイリにとっても世界は、この時からふたつしか存在しなかった。つまり、シンクノアと共にいる世界と、それ以外の人と一緒にいる世界ということだ。

アイリの両親は当然、村外れの気違いババアと呼ばれることすらある、マリサとその養い子との交際を快く思わなかったし、そのことは同じ村の人々の眉をひそめさせ、子供たちにはアイリをからかう絶好の囃し言葉ともなった。

「赤い瞳のマザル」マゴク、青い瞳の子と結婚し、子供が出来たらお目々は何いろ？」

学校の先生や親たちは、自分の教え子や子供たちがそう囃し立てるのを聞かされたとき、「これっ！」「とか」「こらっ！」「と言って叱りつけはしたものの、それと同時に何故アイリが わざわざ村の外れ者と好んで交際しようというのか、理解できないかと思っっていることが、その眼差しからは見てとれた。

「ねえ、どうしてマリサのお家に行っちゃいけないの？マリサはライリの命の恩人なんだよ？もしあの時熱冷ましのお薬がなかったら、危険だったかもしれないって、お医者さんも言ってたでしょ？それなのに、なんで？」

アイリはよくそう言っっては、母親のことを困らせたものだったけれど、結局最後は姉のライリの協力を得て、アイリはシンクノアと一緒に森の中で遊ぶという道を選ぶ。まだ幼かったせいもあり、マリサがルシア神への信仰を告白していないということが、何故それほど重大なのか、アイリには理解し難かったのかもしれない。

イツファノ民族は、その国土に住む約9割以上の人がルシア正教を信じていると言われている。つまり、光の女神ルシアが創造主であられる全能の神と創造の業を終えて休んだといわれる聖日曜日には、人々は必ず教会へ礼拝をしに訪れるのである。簡単にいうとすれば、小さな農村社会では、同じ宗教・信仰心を持たぬ者は除け者にされる運命であり、マリサがもし光の女神ルシアを信じていないというのであれば、他に一体どんな神を信じているのかという、その部分が田舎の信心深い人々の間では問題となるのであった。「あたしはね、そりや信仰心のほうは持つてるともね」と、マリサはよく香草や薬草をより分けながら、アイリに教えてくれたものだった。「だけど毎週毎週、同じ顔ぶれのいる場所へ、お参りになんか行きたくないのさ。それよりは、神のお創りくだされた森の自然のお堂へ行ってお祈りしたいもんだと思うね。でもまあ、村の連中はあたしがそんなことをしてるのを見れば、やれ邪教と通じてるか、やれ闇の神を信奉しているだのと言うのだからよ。けどまあ…それでもね、シンクノアのお目々がこんなに赤くもなけりゃあ、あたしも子供のことを思って教会へ行つたか知れないね。でも、シンクを穢れた悪魔の子だのという連中がいる以上、あんなところはむしろ、あたしのほうが用なんてないのさ」

この時シンクノアは、確か七つくらいだっただろうか。リキエル

という名前の、筋骨たくましい流れ者の剣士が現われる前だから

おそらくそのくらいだろうと、アイリは漠然と思いだす。自分とシンクが五つから七つくらいになる約二年ほどの間、アイリは自分のどこからどこまでがシンクで、シンクの一体どこからどこまでが自分なのか、まるでわからないような曖昧模糊とした一体感を彼と持っていた気がする。

お互い、言葉などそれほど多く使わずとも、何をしたいか何を言いたいのか、口を使って言う以前にわかるくらいの親密さがあった。だが、ただひとつだけアイリにとってシンクが理解出来ないとするれば、彼が包丁を問わずナイフを問わず、刃物というものに対して、異常なほどの執着心を持っているということだっただろうか。

彼はそれで、命ある動物たちを何匹も殺した。もちろん生活のため、糧食とするため、必要最低限の犠牲として、野うさぎを狩ったり鹿狩りをするのだとしても、シンクノアは本当に生まれながらの狩人であるように、アイリには感じられてならなかった。彼は牛や豚といった家畜を屠殺する時にも、一発で急所を殴って気絶させ、なんの恐怖もためらいもなく、マリサの指示どおりにその腹部を裂いていったものだった。

「あの野童の坊主は、なかなか見どころがあるな」

そう言って、マリサの丸太小屋の脇にある納屋へ、リキエルという男が住みつくようになったのは、アイリやシンクノアが八つになるかならないかという頃だった。アイリの誕生日は第六エゼルの月のことで、シンクノアの誕生日が第13（マザル）の月、ということとは正確にはアイリがすでに八つで、シンクノアはまだ七つだったということになる。

その年の収穫月を迎える前の短い夏に、放浪の剣士を名乗る男は現われ、すべてを滅茶苦茶にしまった。もつとも、「すべてを滅茶苦茶にした」と言っても、それはあくまでアイリひとりの個人的な気持ちとしてそうだった、ということである。

実際にはシンクノアは、リキエルがまるで自分の持ち得ないすべ

てを持つ偉大な人物であるかのように彼を慕い、彼に懐き……リキエルから剣術の手ほどきを受けるようになる頃には、せっかくあった自分との一体感から急速に離れてしまったのだ。とにかく当時のアイリには、そう思われてならなかった。

正直なところをいって、アイリはこのリキエルという名の精悍な顔つきをした男のことが好きになれなかった。もしかしたら少し、憎んでさえいたかもれない。

アイリには学校があったし、そちらの世界での友達というのもなくさんいた。だから、人からとやこう言われないために、この機会にシンクノアから離れる……そういう道も確かにあったには違いない。

だが、アイリはシンクノアがするりと水のように手を離して去っていったことにいつまでも執着し続けた。おかしい例えになるけれど、それはアイリが生まれて初めて持った大切な人形を焼き捨てなければいけないという、そうした選択に似ていたかもれない。人形が焼かれる間、自分には感じていないはずの炎を感じ、涙を流して悲しむだろう、そしてそんなことをした人間のことを激しく憎まずにはいられないだろう……それに似た思いをもって、アイリはリキエルという得体の知れない男のことを眺め、出来る限り彼のない場所でシンクとふたりきりで会うということにした。

もっとも、シンクノアとしてみれば、自分が好きな相手を何故アイリが同じように好きになれないのか、理解できなかったようだけれど、なんにしても最後には、アイリがシンクノアとマリサだけが好きなのであって、リキエルという男と一緒に話にはあまり話をしたくない……そうアイリが思っていることを、シンクノアもようやく理解したのだった。

今にして思うと少し不思議なのは、マリサとリキエルがどうも古い知りあいだったらしいということだろうか。そしてそもそもマリサは、イツアーク村の出身者ではなく、いつの間にか流れ者として白竜山脈の麓に住みついてたという女性だったのである。

銀髪に灰色の瞳をしたマリサと、黒髪に赤い瞳のシンクノア、オレンジブラウンの髪に鳶色の瞳をしたリキエル……この三人が同じ食卓で笑いあっているのを見ると、アイリはいつも奇妙な感じがしたものだ。この三人の間には、どう考えても血縁関係などないはずなのに、何故かまったく同じ匂いのようなものをアイリはよく感じていたからだ。そして自分はそこでは部外者であるように感じられること、そのことがアイリには漠然とつらかったのかもしれない。

なんにしても、それからアイリが十五になるまでの間、リキエルはイツァーク村に居続けた。種蒔きや作付けといった野良仕事はもちろんのこと、穀物の運搬作業といった力仕事に至るまで、彼は「ちよつとした手伝い」のようなことをしては、どんどん村の人々から好かれていった。というのも、その後シンクの性格がどこかお調子者的になつていったのは、間違いなくリキエルの影響だろうとアイリは思っている……彼は冗談を言ったり軽口を叩いたりするのが好きで、そんなふうにしてすぐに誰のことをも魅了してしまうのだ。おそらくリキエルのいた七年の間、イツァーク村で彼に敵意のよくなものをしつこく持ち続けたのは、アイリひとりくらいのものでつたろう。そしてアイリ自身にしても、ただひとつの事柄に関してだけは、彼に感謝しなくてはならないことがある。

リキエルはいつも楽しそうに口笛を吹いたり、歌を歌ったりしているような男で、聖五大陸の色々な流行り歌を実によく知っていた。その上声も伸びやかでとても良く、リキエルが色々と音楽の手ほどきをしてくれたことに対しては、アイリは掛け値なしに彼に感謝しなければならぬかもしれないなかつた。

（でもまさか、そんなことのためにく世界の崖でくなんていう場所へ来ることになるとは、流石のリキエルさんにも、想像つかないことだったでしょうね）

リキエルがイツァーク村を去って間もなく、マリサが亡くなった。そしてその痛手がシンクノアにとって十分癒えないうちに……今度

は自分が、突然得体の知れない何者かにさらわれるということになったのだ。

そのことを思うと今も アイリは時々切なくてたまらない気持ちになることがある。もちろん、あれからすでもう七年という時間が過ぎた。おそらくシンクノアは今ももうイツァーク村にはいないだろうと、アイリはそう確信している。何故といえ、ああした小さな農村社会ではシンクノアは自分の土地を持つことも出来なければ、家庭を持つことも叶わないままだからだ。

それに彼は昔からよくこう言っていたことがある。「世界のどこかを探せば、目の色が何色だろうと、髪の色や肌の色がなんだろうと、差別のない国つてのがあるかもしれない。俺はいつかそういう国を探しに、冒険の旅へ出るんだ」と……そして、そのく冒険の旅にシンクノアが旅立ったであろうことは想像に難くない。

そしてその旅の過程で 彼の目の色が何色だろうと構わず、心から愛してくれる人と出会ってすでに結婚しているかもしれないし、実際シンクノアが言っていたとおり、瞳の色が何色でも髪の色や肌の色がなんだろうと差別のない場所で、彼は幸せに暮らしているのかもしれない。いや、むしろそうであって欲しいと、アイリはそう望んでもいた。

それから最後に……ほんの少しだけ馬鹿な夢を見る。シンクノアが突然いなくなった自分の行方を探し、このく地の崖へと呼ばれる場所まで、自分を迎えに来てくれるという夢だ。実際、アイリはそんな夢をここパラドキアにある自分の寝室で、何度か見たことがある。そして目が覚めたあとには、必ず涙が頬を伝って流れた。

(もしもリキエル、あなたにもう一度会うことがあったとすれば わたしは恨み言を、一ダースほどもあなたに申し上げなくてはならないでしょうね)

アイリが飛空艇などというものに乗せられ、天空の島まで運び去られてきたのは、実に他愛もないような、くだらない理由によってだった。七年ほど前、ここパラドキアの城主ともいえるアシュラン

スと彼の率いる一党は、人気のない夜の白竜山脈の上空を、飛空艇の試運転のために飛んでいたのだそうだ。ところが、飛空艇が動力の不安定さによって不時着することになったのが、イツアーク村からほど近い、イツスーク平原のことだったらしい。

その日、村では篝火が焚かれ、短く過ぎ行く夏を祝うための星祭りが行われていた。村の娘たちはみな着飾り、男たちは一張羅の民族衣装に着替えて、歌や踊りが夜通し催されていた。そこでアイリもまた、リキエルから教わった流行歌のいくつかと、古代の王を讃える昔ながらの勲しを謳ったものを楽の音とともに独唱していたのだ。

これは、大分あとになってからアイリが知ったことなのだが最初、アイリはてつきり、アシュランスがほんの気まぐれから自分のことをさらい、パラドキアの王を讃えるための歌とやらを作らせるために、こんなく世界の崖てゝなどという場所へ、自分を連れてきたのだとばかり思っていた。実際、アシュランスは出会って間もない頃、自分はいかにもそのような悪役であるというように彼女の前で振るまっていたし、アイリが彼のことを心底憎むよう仕向けてもいたのである。

だが、実のところはそうではなく……アイリが今いる自分の状況を落ち着いて受け入れられるようになった頃、アシュランスが何を考えていたのか、その真意が初めてアイリにはわかったのだ。

「ここ、パラドキアはまあそれなりに広いがな。あんたは城砦の一部しか移動が許されてなくてさぞ窮屈だろうよ。そこでひとつ提案なんだが、俺の部下のひとりと結婚してみないかね？そうすれば、パラドキアの町の様子を見て歩くことも出来ようし、行動の範囲もぐっと広がって人生が楽しくなると思うがな」

アシュランスという男がそんなことを言ったのは、アイリが飛空艇にさらわれて三年ほどが過ぎた、十九歳くらいの頃のことだった。彼の言う部下のひとりというのが誰なのか　アイリにはすぐ見当がなかった。銀色の髪を、いつも細長い滝のように胄の後ろへ流して

いる、ファルークという名の若い男だった。

実際、イツアーク村の星祭りで、彼の姿をアイリは見かけていた。人口が二百人にも満たないような小さな村では、余所者というのは目立つものだ。またそれだけでなく、ファルークはこのあたりでは見たことのないアメジストのような紫色の瞳を持っていた。彼はおそらくそのような自分の容貌は人目を引くという自覚があったのだろう、村人たちが浮かれ騒ぐ群れの、篝火の光が届かない暗がりの中から……じっと、アイリの歌う姿を見つめ続けていたに違いない。

ここからはアイリの想像にすぎないことなだけけれど　アシユランスはファルーク、あるいは彼を含めた部下の数名に、飛空艇が不時着した付近の村を念のために探らせていたのではないかと思う。そして、勘の鋭いアシユランスは、ファルークの帰りが遅くなった理由を、是非とも知りたくなったのではないだろうか？アシユランスとファルークというのは、親友同士で、おそらくファルークが多くを語らなかつたとしても、アシユランスにはわかつてしまったのだろう。あの娘の歌声を、是非もう一度聴いてみたいと、彼が望んでいるということが……。

だが、もしアシユランスが突然ファルークのことを紹介したり、ふたりきりでいるよう仕向けたとしたら、おそらくアイリはアシユランスのことではなく、彼のことのほうをこそ憎んだかもしれない。アシユランスにはそのことがわかつていたのだ。だからこそ、自分にその悪役をあてがい、ようやくアイリが故郷を恋うる歌を歌わなくなった頃　狭い行動範囲が格段に広がるといった美味しいエサを吊り下げて、花嫁をひとり釣れば良いなどと考えたに違いない。

「相手は、どなたですか？」

どんな理由があれ、誰とも結婚するつもりなどなかったアイリは、冷やかにそうアシユランスに問うた。

この頃にはすでにアイリにも、アシユランスというく地の崖で、パラドキアの王とどうつきあえばいいのかが、よくわかつていた。

つまり、泣くにしろ喜ぶにしろ怒るにしろその他どんな感情であれ、彼は常に大きな動きや変動のあることを好む。だから、アイリが泣き叫んだり喚いたり、怒りとともに不満を言い表したりしても……諧謔主義者の彼にとって、それは興を引く面白いことでしかありえないのだ。

逆に、アイリが氷のように冷たい顔をして、眉ひとつ動かさないまましていると、アシュランスはいかにも不満そうな顔をするのである。そのことがわかってからアイリは、アシュランスという男に対して文句を並べ立てることなく、とにかくそうした氷の仮面のような態度を貫き通すということに決めていた。

「おまえは、誰がいい？ 竜騎兵たちはいつも胃で顔を隠しているが、あれは俺のように顔に焼け爛れた痕があるのかなんとか、そんな理由からじゃない。まあ、言うなれば主君である俺に気を使ってるんだろうよ……俺は普段、顔から仮面を外すということが滅多にないからな」

そうアシュランスは言ったが、アイリと会う時、彼は必ずその仮面を外して部屋へ入ってきた。もしアイリがその彼の顔を眺めて不愉快そうな顔をしたとすれば、アシュランスはいかにも楽しいものを見たというように、ニヤリと笑うのである。

「わたしは 主君であるあなたが結婚せよというから、わたしと結婚してもいいなどと考える、腰抜け男と結ばれたいとは思いません。あなたは、パレードキアの秘密を知った人間のことは生かして返せぬという理由から、わたしをこの不自由な身分に留め置いています。ですが、主君であるあなたが、もし誰それと結婚せぬのであれば、明日わたしを竜のエサにすると言ったとしても、わたしはやはりあなたの言うなりになろうとはしないでしょ」

「ほほう、なるほど？」

アシュランスは実に楽しげに、歌うようにそう言った。

「まあ、その強がりが一休あと何年続くかな？ もし気が変わったら、いつでも言うてくれたまえよ、歌姫アイリーン。それまでは、ここ

パレードキアの歌姫として、時々祭りや宴の席にて歌ってもらおうという、それだけのこと。それと、<地の崖ての国の王>が世界を征服した暁には　おまえの美声によって、この全世界の王たるこの私を、讃える歌でも歌ってもらおうではないか。何故といって私は、ただそのためだけにこそ……　おまえを田舎の寒村から気まぐれにも連れだしたのだからな」

アツハツハツ！と、さも楽しげに哄笑しながら、真紅のマントを広げ、アシュランスは<奏楽の間>を去っていった。その時、アーチ型の戸口のそばから、彼に続いて廊下を歩いていく人の姿がアイリの目の端を掠めた。蒼い冑の後ろから、長い銀髪をいつも靡かせている男だ。

おそらく彼は主君について歩く近衛のような役も仰せつかっているのだろう。今のような形で自分とアシュランスとの会話を聞いていることが多いと、アイリは当然気づいていた。

正直なところを言って、アイリは時々あのファルークという紫色の瞳の青年を捕まえて、「いいかげんしてもらえませんか!？」と怒鳴り散らしたい衝動に駆られることがある。祭りや宴の席などでアイリが歌を歌う時　その座にいる他の人間も当然、アイリの歌う姿を目に入れてはいるのだが、ファルークという青年は何か少し違った眼差しで自分を見ているように彼女は感じていた。

大勢の人間の前で独唱せねばならぬという緊張感のせいもあるにしても、アイリは自分が歌っている時にそこにどんな人間がいたかというのは、あまりよく覚えていない。いや、パレードキアに来て今ではもう七年になるので……アシュランスの部下の数名については、ファルーク同様、名前と冑をとった時の顔は一致しているにしても、問題はそういうことではないのだ。

独唱が終わり、王アシュランスの許しを得てアイリがその場を辞すと　アイリはいつも、そこには実はファルークひとりしかおらず、彼に対してだけ心をこめて歌を歌ってしまったような、そんな不思議な錯覚に捕われるのだった。

確かに実際、彼が自分のほうをこの機会にとばかりじつと見つめよく耳を澄ますように自分の歌を聴いているという気配を強く感じる……だが、それでいてこの七年の間、アイリはファルークとはほんの数える程度しか会話を交わしたことはないのだ。

それと時々、彼らが飛空艇に乗って<遠征>とやらに出て帰ってきたあと、アイリの部屋の前には必ずなんらかの花が置いてある。もちろん、誰がそんなことをしているのかはわからない。けれど、おそらくこんなことをするのはあの紫色の瞳をした男をおいて他にいないだろうと、アイリは見当をつけていた。

正直なところをいって、ここで少し難しいのは アイリにしても身分の高いファルークに対し、滅多なことを言うことは出来ないということだった。「自分のほうをいかにも意味ありげにじつと見るのはやめてください」とか、「いつも花を置いていくのはあなたなんでしょう!？」などと問い詰めるということは、とてもではないが出来ることではない。

だが、前に一度だけ……彼の自分を見る目の熱心さに耐えかねてそれに近いような言葉を言ってやりたいように感じたことはある。でもその時にも結局、アイリはただ顔を真っ赤にしたまま、ファルークの前を通り過ぎるということしか出来なかった。

(もし、これからまだこの軟禁状態が続いて)と、窓からの微風を受けながら、アイリは考えた。外は見渡す限り青く、遠い場所で竜騎兵たちが竜を操る訓練をしている姿が小さく見える。(もう二年か三年もすれば……わたしも娘の盛りを過ぎてしまっただろう。その前に自分から膝を折って、誰となり結婚させてくださいと頼むべきなのだろうか?確かにわたしはあのファルークという男に恋なぞしていないにしても、彼が邪念のない良い人間だと感じるのは本当だ。ただ、彼が本当には何を考えているのかがさっぱりわからないという、それだけで……)

四年ほど前 アシユランスから結婚云々の申し入れがあったから、ずっとアイリは待ち続けていた。いつも意味ありげにこちらを

見つめる彼の眼差しは、実は自分の勘違いであり、彼は彼にとって相応しい女性と今は結婚した、だからおまえにはもう用はなくなつたぞ……いつか、アシュランスがそう言ってくれはしないかと。

だが、ただ徒に歲月は流れてゆき、アシュランスがたまに思いだしたように自分の元へやって来て言う科白というのは、まったく同じものだった。

「どうだね？そろそろ強情つぱりの田舎娘の気も、変わってきたんじゃないかね？」

姿を見せぬよう、ファルークが戸口の脇に立っているかと思うと、アイリもまたいつもと同じ口調、同じ言葉しかアシュランスに返す気にはなれない。

「気が変わるというのは、なんのことを王はおっしゃっておられるのでしょうか？確かにわたしはあまり物のわからぬ田舎娘。ですが、王もご存知のとおり、寒い地方に生まれた者というのは、強情つぱりというよりも、そも我慢強いのでございます。もしも王に、気高き白竜山脈が、冠のように戴く万年雪を溶かすことが出来たとすれば、このわたしの心をも同様に溶かすことが出来でしょうに」

「ふむ。なるほど」と、アシュランスはいつものように、何か含みを持たせたニヤニヤ笑いをする事なく　突然王の威厳を身にまといつかせると、片手を上げ、真紅のマントを後ろへたなびかせた。「流石におまえは、我が友ファルークが惚れただけの女のことであるようだ。おまえもすでに気づいていようが、パラドキアの男というのは……歌姫アイリ、おまえの口調を真似るとすれば、そもとても性質が良いのだよ。もつともこれは、王である俺を除いてという注釈付きではあるがな。前にも話したとおり、我々<地の崖て>の民というのは、中央世界から隔絶された、岩山ばかりが続く不毛の地だけを相手にして生きてきたのだ。もちろん、竜に乗れば海を越えて軽く数時間でエルシオンへは辿り着ける。だが、我々は古くから言い伝えられる<掟>に長く縛られて生きてきたのだ……俺の顔が何故こんなふうに醜く焼け爛れているのか、その理由をもちろん、

おまえは覚えていような？」

アイリは、はいともいいえ、とも答えず、ただ眼差しによってのみ首肯した。

アシユランスはアイリがパラドキアへ来てまだ間もない頃、「ここから出してっ！わたしを故郷へ帰してっ！！」と鍵のかかった部屋の前でわめき続ける彼女に対して「慰みにひとつ、面白い話をしてやろう」と、自分の身の上話をしてくれたことがある。

アシユランスの父親はパラドキアに点在する小さな村の有力な族長のひとりであったという。それぞれの村々はとても貧しく、かろうじて自給自足の生活を送っていける程度であったのだが、それでも年に数度、竜に乗ってエルシオンへ渡り、く地の崖てくでは決して取れない様々な物資を調達してくる必要があった。

そしてアシユランスは、十三歳の時に初めて西の大海カイスヴィリーフを、父親とともに竜に乗って渡ることが許されたのだった。それまで痩せた土地とゴツゴツとした茶色い不毛の岩山しか知らずに育った少年にとって、中央世界の豊かさは衝撃的だった。

確かにく地の崖て国くは、エルシオンの人間から見た場合、地の崖て、この世の崖てのような場所であろうと、アシユランスはその時思った。だが、それと同時に彼は、その岩山ばかりの不毛な世界を自分もつとも愛しているとも強烈に感じた……何より、く地の崖てくという場所では、中央世界の人間たちの欲しがる鉱石や寶石類などが潤沢に取れるのである。

アシユランスは自分の父親が行商人と交渉し、ほんの少しの翡翠や縞瑪瑙、水晶や緑柱石やヒヤシンス石などを、恐ろしいばかりの値段で取引するところを見た。そして目立たぬ場所に留め置いた竜の背中に、ずっしりと重い食料品や衣類、生活用品の詰まった荷がくくりつけられるのを見て目を輝かせながら、自分の父親を見上げてこう言ったものだった。

「父ちゃん、俺たちって本当は世界一の金持ちだったんだね！！」
だが、エルシオンで見聞きしたことは成人した男たちの間でく語

つてはならぬこと」とされており、村の女や子供の多くは、岩山で取れる鉱石がエルシオンにおいてどれほど莫大な値打ちを持っているのかを知らないのである。

この時から、アシユランスは何かの流行病いのように「なんでそのことを口にしちゃいけないの？」とか「もつと度々エルシオンへ行つて宝石の原石を交換すれば、痩せた土地を耕す必要なんかなくなるよ」と、父親にしつこく聞いて回るようになった。そしてその度に族長である父親は、一族に千年以上も昔から伝わる「掟」の重要性を一番末の息子にとくと語って聞かせたというわけなのである。「エルシオンの人間たちは、竜という存在を滅多に見なくなつてもう千年にもなるだろう。それは我々が注意深く竜を隠しながら向この人間とつきあつてきたからなのだよ。エルヴァルト海、セスアラシア海、デュークセヴァリア海、サンエマルト海、カイスヴィリ―フ海……その他どの海の領域からも、ここ地の崖で国へ中央世界から船が到達することはない。唯一、おまえが知っているとおり、船を自分の国土とし、海を移動するテガシエルパの民だけは我々とつきあいがあるがね。彼らもまたいにしえよりの「掟」を堅く守つて暮らしている信頼のおける民だ。神はそのように、遙かな昔に「境」を定められたのだよ。確かに、我々の生活は貧しく厳しいかもしれない。だが、地熱のお陰で季節を通して温暖だし、土地は痩せていてもそれなりに穀物や果物も実る……神をおそれ、自分の身をわきまえて暮らしていく分には不自由ないのだから、おまえも「掟」に従つて足ることを学ばねばなるまいよ」

アイリはもちろん、アシユランス自身もまたその存在を聞いたことはあつても見たことはないのだが、海には人の知られざる巨獣が住んでいるという伝説がある。ゆえに、エルシオンの人間たちは船を西の果て、あるいは東の果て、あるいは北の果てでも南の果てでもよいのだが、とにかく船を大海のあまり遠くまで漕ぎだしていくと、巨獣の怒りに触れて帰つて来られないという伝説を信じている。

すなわち、その巨獣とは海に住む竜と言い伝えられるリヴァイアサンであり、海獣クラーケンであり、あるいは船乗りを惑わすというローレライ、海の底にある神殿に住むと言われる人魚たちなど、とにかく神の定めたく領海を彼らが守っているがゆえに……人間はそこを超えてさらに遠くへは行けないのだと、エルシオンの人々は根強く信じ続けていたのである。

だがやはり、<地の崖で国>にも成人したばかりのアシユランスが疑問に感じたとおりのことを考え、禁を破る人間が時として生まれる。その禁を破った人間には、厳しい<掟>の鉄槌が下ることになるわけだが、もし仮にそれぞれの村の族長の許可なく竜を駆つて中央世界へ出かけた場合、その者に待っているのはネイディーン山の火口の入口であった。すなわち、パロドキアの人々の言い種によれば、「掟を破った者は火竜の口に飲み込まねばならぬ」ということになるだろう。

そしてアシユランスは、実際十五歳の時にこの禁を破り、己の竜を駆つてエルシオンの地へ行き……あるうことが、ユーディン帝国の北、最北の地にある雪原地帯の民に竜に乗る自分の姿を見られてもいたのである。

アシユランスはなんとか嘘をついて誤魔化そうとしたが、そんなことが数度繰り返されるうちに、彼の父親は鋭くそのことに気づいたのであるう、<本当のこと>を洗いざらい末の息子に吐かせると、一族の間に彼を引き立てていき、裁判の場へと出廷させたのだ。

「それで、どうなったの？」と、その時アイリは、少し前まで自分が泣いていたことも忘れ、アシユランスのことを見返した。もちろん、彼がこうしてアイリの目の前にいるということは、ネイディーン山の火口行きという罰は免れたのだらうと、そう思いながら。

「近隣の村の族長全員が呼び集められて、族長会議っていう奴が開かれることになった。俺は刑が確定するまでは、岩山にある天然の牢屋にぶちこまれることになったわけだが……まあ、普通に考えたら死刑だな。だがまあ、十五つという年齢のこととか、俺が族長の

息子だつていうことなんかが考慮されたのかもしれない。それなりの罰を与えて一度懲らしめれば、二度と禁は犯さぬだろうという決定が下された。というわけで、背中の肉が裂けて暫くうつ伏せでなければ寝られんくらい。俺は鞭打たれることになったわけだ。だが、親父はいくら息子を可愛がっていたとはいえ、それでは族長として一族の者に示しがつかないと思っただらうな。『<掟>を破った者はこのとおりになる！』と叫び、俺の顔をみんなが広場に集まっている目の前で、竜の火につけて焼いたのさ。竜が口から吐く火つてのは、普通の炎とは違う。親父は自分の竜に火炎を吐かせると、そいつを火炎石っていう石に移して、俺の顔に当てたってわけだ……そんなことから、俺も今ではすっかり男っぷりが上がったってわけだな」

少し不思議なことだったかもしれないが、アシユランスからその話を聞いて以来、アイリは彼の醜く焼け爛れた顔の痕が、あまり怖くなくなった。ただし、今でも時々ふと、おかしな物思いに捕われそうになることがあるにしても。

つまり、アシユランスが何かの拍子に右の横顔だけを自分に見せて話をする時、彼が本当は実に優しい瞳をした人間であるということに、アイリは気づくのだ。けれども、左の瞼の際近くまで皮膚が焼け爛れているため、そちらの瞳は狂気を宿した竜のような眼差しに見える。そしてアシユランスが正面を向いて自分に何かを話す時、アイリはいまだにどちらの彼が<本当の彼>なのか、判別しがたいような、引き裂かれた印象を持つのだった。

「もちろん、よく覚えています。一度聞いたら、忘れようにも忘れられないくらい、とても印象深いお話でしたから」

アイリはアシユランスから彼の身の上話を聞いた時、部屋にあった十弦の豎琴を手にとり、それを奏でて王の心を慰めるべく、ひとつの歌を歌った。歌劇『聖竜ルシアスと暗黒竜ヒュドラ』の中で、ヒュドラがルシアスに破れた時、嘆き悲しむアシエラを慰めるべく、アルゴルが妻に歌って聞かせる歌を、である。

「つまり、俺が言いたいののは、だ。聖五大陸のそれぞれの国には、おのおの国民性みたいなものがあるだろう？ イツファノ民族は我慢強く、カーディル民族は思慮深く、ロディーガ民族は陽気、レガント民族は剛毅で慎重……といった具合にな。だが俺が思うには、そのうちのどこの男の気質も、我がく地の崖て国への男の性質には到底敵わんと思うね。まったく、今でこそこんなく天空島へ（アストラ・ナータ）なんていうものを創ったり、飛空艇なんていう途方もないものを創り出したりしているが、俺たちは千年もの間、まったく馬鹿のひとつ覚えみために、二言目にはとにかく掟、掟と言って暮らしてきたのだよ。だが、それを可能にしたのはとにかく、我々竜族の末裔が天の賜として良い気質を保ち続けてきたからなのだろう。正直なところを言つて、親友の俺の目から見てもファルークはいい男だと思うぞ？ まあ、あいつに欠点があるとすれば、少々気分にもら気があるところだが……なんにしても、おまえがもしファルークが気に入らないにしても、竜騎士の男たちのうち、誰と祝言を上げようと、幸せになれるだろうことは請け合おう。何しろ、俺たちはこんな不毛の土地をあてがわれているにも関わらず、そのことに文句も言わず、中央世界の豊かさを僻みもせず、忠実に掟を守って堅実に生きてきた民族の子孫なのだから。その血がおまえの中の我慢強いというイツファノ民族の血と混ざりあった時には、もしかしたら信じられないほどのいい子や孫に恵まれるかもしれない。まあ、そんなことも少し、考えてみることだ」

「……………」

アイリは思わず、暫くの間黙りこんだ。気分にもら気があるといえば、このアシュランスという男こそそうであろうとアイリは思うのだが、彼は珍しく今日に限っていえば、右の瞳の優しい蒼の瞳だけで語っていた。

もちろんそれは、彼が右の端正な横顔だけを見せてアイリに話していた、という意味ではなく……。

「さて、と。そろそろ恋のお邪魔虫は消えるとするか。このことに

ついで、俺は今後一切口は出さん。じゃあな、ファルーク」

そう言って、アシユランスは<奏楽の間>の、広い窓敷居に座っているアイリから見て、後ろにあるアーチ型のドアから外へ出ていった。ちなみに彼がこの部屋に入って来た時には、左側にある開け放たれたほうのドアから入って来たのである。

「……………っ！！」

そこから、銀の細く長い髪を背中になびかせて、紫色の瞳の青年が部屋に入って来た時　アイリは少なからず動揺した。今日もまたいつものとおり、アシユランスが意味ありげな軽口を叩いたあと、ファルークは腰巾着よろしく何も言わずに彼のあとへついていくのだらうと予想してただけに……アイリはなんとかこの場から逃げだすいい口実はないかと思ったくらいだ。

(ずるいわよ、こんな不意打ちみたいな真似するなんて!!)

アイリは手に豎琴を持ち、窓敷居に座ったまま、扇型の窓の外を見ている振りをしようと思った。ここでは相も変わらず竜騎兵たちが訓練しているらしい姿が遠く見える。

「七年もだんまりだったくせに、一体急にどうしたんだと、あなたはそう思っているのだらうな」

ファルークは、自分の主君であり親友でもある男　アシユランスがそれまで座っていた場所へ腰かけ、手を伸ばせば触れるくらいの距離のところから、アイリのことをじっと見つめた。

「たぶん、いつも意味ありげに自分のほうを見ているくせに、その実告白する勇気を持たない腰抜け男……とでも、あなたは思っただらうか？」

(何よ! やっぱりわかってたんじゃないの!!)

ムラムラと腹が立ってくるのを感じると、アイリは最初に感じた恥じらいの気持ちなど、まるでどこかへ吹き飛んでいった。

「いつも、あなたたちが<遠征>とやらへ行ったあと、わたしの部屋の前に花を置いていくのはあなたなんでしょう?」

「そうだ。薔薇に牡丹に芍薬、百合にジャスミン、その他全部俺が

置いたものだ。ここ、アストラ・ナータでも、最近エルシオンの良い土を運んできて、少しずつ造園作業なんていうのをやってるよ。そのうち、そうした土の中から向こうに咲く花がうまく育つようになれば……俺は毎日でもそんなものをあなたにあげられると思うのだが」

竜と目が合うことを怖れるように、アイリはファルークのほうをちらと盗み見るようにした。すると彼は、自分のほうから視線を外し、窓の外の青い空と、遠く黒い点のように見える竜の姿とを眺めている。

白哲の横顔は、しみひとつなく雪のようであり、彼が目許の涼しげな秀麗な顔立ちをした青年であることがわかる。ただ、アイリにとつてずっとわからないのは、そんな彼が何故自分のような寒村育ちの田舎娘に執着するのかという、その理由だった。

「何故、わたしなんですか？ここにも他に、あなたに相應しいような女性は大勢いるでしょうに」

「ファルークでいい」そう言って、ファルークは、何かとても面白いことでも耳にしたように、少しだけ笑った。「俺は、十六の時に一度結婚した。ちょうどあなたが、ここへ連れられて来たのと同じくらいの歳に。ここパラドキアでは、男は十三歳以上で、竜の儀式>を通過していれば成人と見なされる。そして、十五六で結婚するのが普通だ。だが、妻は病弱で……結婚して一年もしないうちに亡くなった。俺は彼女があまり長くないと知っていたからこそ、婚姻の儀を急いだんだが、せめて子供のひとりくらい授かっていたらと、今もそう思う」

ファルークが窓の外から自分のほうに視線を戻すのを見て、アイリは赤面した。これまでも、儀礼的な挨拶程度の会話なら交わしたことはあるが、こんなに個人的なことまで彼が話すのを聞くのは、これが初めてだったからだ。

「わたしの村でも」と、やもすればか細くなりそうな声に、アイリは意識的に力をこめるように言った。「女性は早ければ、その

くらいで結婚していてもおかしくありません。わたしの姉のライリも……十七歳で隣村へ嫁いでいきましたから」

「そうか。歌姫アイリ、あなたももうここへ来て七年にもなるから、ある程度く地の崖で国への事情にも通じていよう。先ほど、我が主君アシユランスも語っていたとおり、今は我々にとって時代の一代変革期とっていい時だと思う。今から三十年も昔のことになるが、ナーラダという名の男が、やはり禁を犯し、ネイデーン山の火口へ放りこまれることになったのだよ。だが彼は、腕の立つような男ではまっただくなかったのだが、刑の執行人の手をうまく逃れることが出来たらしい。その刑の執行人もまた、咎められることを怖れたためかどうか、ナーラダの逃亡については口を閉ざしていた。その時逃亡の途中で彼は、今ではく聖魔の秘跡と呼ばれる洞を発見したのだ。我々にとつてネイデーン山は古代の竜が今も羽を休めていると言ひ伝えられる、聖なる山だ。そこを採掘したりすることなど、パロドキアの民にとつてはもつての他、例のうるさいく掟に触れる重罪なわけだが……ナーラダはまあ、その時すでに死んでいくはずの人間だったわけだ。

とはいえ、ここは見渡す限りの岩山ばかりの土地だから、食糧が欲しいとなれば当然、どこかの村の畑を襲うなりしなければならなйдらう。先ほども言ったとおり、ナーラダという男は腕っぷしにはまるで自信のないような男だったから、なんとか自分の元の村の親友を頼ることにしたらしい。ある意味、その親友にとつては迷惑な話だったのではないかと思うが、なんにしても彼 俺の親父のレイルークは、死んだとばかり思っていた親友が生きていたと知り、族長の跡継ぎであるという自分の身分も忘れ、ひたすらナーラダのことを支援することにしたのだ。俺は当然、親父の息子としてそのく秘密を幼い頃から知っていた。ナーラダというのは実に博識な男で、村では学校の先生として人々から尊敬されているような人物だったらしい。そんな彼が特に熱中していたのが「言語学」という奴でね、く聖魔の秘跡から解読不能な文字の石版がいくつも出て

きた時も……ナーラダはその法則性に鋭く気づき、何が書かれているのかをそう時間をかけずに解き明かしたそうだ。そこに書き記されていたのは、空を飛ぶ箱舟の建造の仕方だった。そして<聖魔石>を使えば、同じように大陸や島を空中に浮かせることが出来るということもわかった……ナーラダが生きていることがわかり、彼が中心となって飛空艇が建造されつつあった頃、すべての部族の族長たちの間で、意見が割れていた。ナーラダはそもそも罪人なのだから再びネイデーイン山の火口へ突き落とすべきだという者もいたし、言語学に精通した彼がこのような発見をなしたということは、これこそ天命だと言う者もいた。なんにしても、簡単にいえば我々パラドキアの民は、この時から大きく真つ二つに割れたんだ。<箱舟計画>に賛成する部族と反対する部族とにね……俺は親父がナーラダの親友で、先頭きつて彼に協力していたから、そのことについて選別の余地はなかった。だが、隣の部族だったアシユランスの父親は反対派だね。また、彼があのようにむごい仕打ちを父から受けなければならなかったのも、そうした事情が背景にはあったということだな。一族に伝わる<掟>を遵守させることの重要性を、再自覚させる必要があるとも思ったんだろう……俺は、そのことを知って以来、前から親しい友人だったアシユランスのことを自分たちの仲間にならないかと誘った。以来、彼はめきめきとカリスマ指導者として頭角を現すようになっていき、今では<箱舟計画>に協力し賛成したすべての部族の長、王になったというわけだ。実際、箱舟なるものが完成し、飛空艇と名づけられて竜のように空を飛ぶようになる。それまで反対していた一族の者たちも、こぞって我々に従うようになった。今でも唯一、アシユランスの父親だけは意地を張り通しているとはいえ……」

ファルークが、吟遊詩人ばりの語りを終えようかと言う時、アイリはポロン……と思わず豎琴を鳴らした。いつもは無口な彼が、こんなにも色々話すのを聞くのは初めてだったし、その時点ですでにもう、アイリにはファルークの言いたいことが大体わかっていたの

である。

何より、いつもファルークにじっと見つめられていると、彼に征服されたような、彼の支配の腕に絡められるような気配をアイリは感じていたが、この時ファルークがそのくむら気によってか、長い話をしてくれたことで、彼女はその脅威が効力を失っていくような感覚を覚えていた。

「だから、つまり……」と、ファルークは、照れたように、少し決まりの悪いような顔になった。「俺には、このことについて、重大な責任がある。一族にとってこれほどの大事に当たる時に、好きな女がどうだとか、結婚して身を落ち着きたいだの、そんなことはあまり考えていられなかった。だが、飛空艇がイツスーク平原に不時着することになったあの日、俺は自分の中でてっきりもうすでに死んだものばかり思っていた心が、甦ってくるのを感じた。それも、歌姫アイリン、あなたの歌を聴いたことによって」

アイリは何度か、無造作に豎琴を奏で続けた。なんて言ったらいいのか、わからなかった。自分の元には水がたくさんあるのに、喉の渴いた旅人にそれを与えるのを惜しむような、うまく表現できない気持ちだった。

ここで、「そんなことのためにわたしに七年という若い歳月を無駄にさせたのですか」とか、そんなことは言ってもすでに意味がなく、通り過ぎてしまったことなのだと、アイリにはわかっていった。彼はおそらく、自分に罰を与えるように、なるべく自分を抑え、アイリに対しても必要最低限接しないよう心がけてきたのだろう。そしてそのことを察したアシュランスが　おそらくは親友の心を思い、これまでうまく立ち回ってきたということなのだ。

彼は……ファルークは、おそらくパラドキアの王に次ぐくらいの、言うなれば権力ある立場にいる者だった。つまり、その気になれば彼は本当は、アイリのことを力づくでも自分のしたいように遇することが出来たに違いない。だが、彼は待った。アシュランスがく地の崖で国への男たちは性質がいいと言った、その忍耐強さによって

……。
アイリは言葉によって答えるよりも、別の方法を選んだ。つまり、イツァーク村の星祭りですべて初めて出会った時、彼が不思議なアメジストの瞳で自分を見つめていることに気づいた瞬間、ファルークが聞き入っていた歌を豎琴の音に合わせて歌うということにしたのである。聖竜ルシアスの訴えに応えて、人間の娘ルーシュが独唱するアリアを……。

おお、竜よ

我が魂よ！

おまえに私のすべてを捧げよう

我が骨と血肉、この心のすべてをも

聖竜ルシアス

おまえは私の夢

私の希望

私の心の喜び

そして私のすべて

おまえは跪いて

私に愛を乞う必要はない

むしろ私がおまえの前に身を投げだし

今こそふたりでひとつのものになろう

おお、竜よ

我が魂よ！

我らの心は今ひとつとなりて
邪悪なるものを打ち滅ぼさんとして立ち上がる

だが、このような歌を歌ったからといって、アイリがファルークの気持ちに応えたというわけではなかった。というより、彼女は彼の気持ちにすぐには応えられないという申し訳なさから……せめてかわりのものとして歌を一曲進呈したという、それだけのことだった。

その証拠にというべきか、アイリが歌を歌い終えた時、ファルークが彼女に触れようとする指を、彼女は拒んだ。勘の鋭い彼は、その時のアイリの顔に浮かんだ表情だけで、すべてのことが十分理解できていた。

「他に、誰か……今も想う男がいるということか？」

アイリは涙の盛り上がる瞳を伏せたまま、肯定も否定もしなかった。ファルークはアイリの長い黒髪を一房握りしめると、そこに口接けて言った。

「では、今はまだもう少し待とう、歌姫アイリーン。近いうち、決戦がある。この戦いはおそらく、我々にとって圧倒的優位と一方的勝利をもたらすに違いないが、それでも万一ということがあるからな。だからその前に一度、あなたの気持ちを確かめておきたかった」

そう言ってファルークは、<奏楽の間>から去っていった。アイリが西の空に目を向けると、そこには軍事訓練を行う竜騎兵たちの姿はすでに見当たらず、徐々に暮れはじめた夕陽の光が　あたりの岩山の茶色い肌を、次第に紅へと染めゆこうとしているところだった。

第2章 旅の仲間

ルークこと、ミュシアが蒼の魔導士セシルと赤い瞳のシンクノアと出会ってから、約半月ほどの時が過ぎた。

三人がルドミラという町のく踊る小鹿亭くという旅籠で出会ったのは、第九の月のことで、今は第十の月である。エルシオンでは一年は十三か月、そして一月は二十八日であり、最後の第十三の月のみ二十九日が存在するのであった。

ミュシアとセシルとシンクノアが湯治町リディマを出立したのは、第十の月の中旬頃だったのだが、宿泊した旅籠く金のおんどり亭くの主人は実に抜け目のない金の亡者であった。一行が旅を続けるのに、馬が是非とも入用であろうと見抜いていた彼は、自分の厩舎にいる馬をナルム村までなら一頭5レーテルで貸与してもいいとセシルに申し出たのである。

「徒歩でいけばまあ、十日はかかりまさあね、旦那。ナルム村にはわたしの双子の弟が住んでおりましてな、よくここリディマと往復してますんでさ。そんなわけで、馬のほうは次に弟夫婦が温泉へ入りに来る時にでも、返してもらえばいいっていう寸法でして。へっ、へっ、へっ！」

大して必要もないような揉み手を繰り返す太った宿の主人を見てセシルは溜息を着きながら、馬を三頭借りることにしようと思つた。何も別に15レーテル程度の出費が痛かったというわけではない。むしろ、人の足許を見る主人にしては、随分安い値を申し出たものだなとすらセシルは思っていた。

ところが、厩舎から使用人の子が馬を引いてくると、「あのう、セシルさん……」と、ルークがどこか言い辛そうにして、彼のことを見上げてきたのである。

「ぼ、ぼく、馬に乗ったことがないんです」

まるで、何かとても恥かしいことを告白するように耳打ちされて、

セシルは思わず笑いそうになった。

「それじゃあ、私の前に乗るといい」

セシルがそう言うのと、「うわっ！まずいだろう、それは！！」とシンクノアがすかさず突っこんだが、王都カーデイルへ辿り着くまでは、ルークが女であると気づいているということは、黙っておくという約束がしてある。

そこでシンクは誤魔化すように口笛を吹いていたのだが、なんとも言えぬぎこちない、白々しいような態度であった。

（やれやれ。嘘をつけない正直な貧乏人のせいで、これではカーデイルまで持つかどうか、まったくわからんな）

セシルは糧食類や旅に必要な道具の詰まった荷袋を括りつけると、先にミュシアを馬の鞍の前へ乗せ、それからその後ろに自分が乗った。

「蒼の魔導士先生、馬を一頭5レーテルでお貸しすると言いましたけど、今さら二頭しか借りないって言われてもねえ。何しろすでにお代もいただいていますし……」

金の亡者の太った親父がブツブツ不平を言い出すと、セシルは宿の主人に対し、まるで汚らしいものを追い払うかのように手を振った。

「いらん。とつておけ」

そう一言いい残し、鎧で軽く馬の腹を蹴ると、セシルは湯治町リデイマを後にすることにした。実際には、馬屋で馬を借りる時には、そのまま乗り逃げされないために、証文にサインした上、結構な保証金を支払わなければならない場合が多い。つまり、借り手の過失によって馬が逃げたりした場合、その保証金は戻って来ないというシステムである。

にも関わらず、一頭たったの5レーテルで<金のおんどり亭>の主人が馬を貸したのにはやはり、理由があるろう。まず第一に、セシルが正式な魔導士会に所属する高位の魔法使いであるということが大きかったに違いない。何故とって、蒼の魔導士を名のるセシル

という男が馬を乗り逃げしたという訴えが魔導士会の本部（カルデイナル王国の王都、カーデイルにある）へ提出された場合、それは実際に調査されるかどうかは別としても、とりあえず記録としては残るのである。

そして、あまりにもそうした訴えが多数の者から出された魔導士というのは、称号を剥奪され、魔導士学院から卒業時に授与された杖を返納しなくてはならないという法律が、五王国すべてに存在するのであった。

もっともセシルの場合、魔力を行使する時に杖やそこに象嵌された魔石に力の発動を補助してもらうことはないので、称号がなくなるのと杖を折られようと、どうということはない。下位の魔法使いは、杖を取り上げられると魔法が使えなくなったりするらしいのだが、それは上位四級の魔導士にはあまり関係のない話だといえる。しかしながらやはり、人の評判や名誉といったものは、金で買えないだけに大切なものであるとセシルは思っていた。

第一、闇の魔導士狩りが嫌になって破門された身分も同然のセシルが、何故いまだに魔力の発動となんの関係もないヒヤシンス石の嵌まった櫛の杖を持ち続けているかといえば、そこには当然理由がある。＜姿変えの術＞により、老若男女、どんな姿にでも化けることが可能だとはいえ……セシルはそもそも、自分の容姿を偽る術が不得手なのではなく嫌いであった。だが、となると、彼の容貌はこの町でも村でも、あまりに目立ちすぎた。それこそ、セシルの容貌を一目見ただけで、その後ずっと忘れずに覚えている人間は多いに違いない。

そこで彼にとって物を言うのが、上衣につけた蒼の魔導士の襟章と、手に持ったオークの杖であったかもしれない。すると、大抵の人間が何故というのはセシルにも説明が難しいが、とにかく「納得する」のである。

簡単にいえば、お偉い魔導士先生だから、俺たち平民とはそもそも醸しだされる雰囲気が高貴で違うんだろうよ……といったような、

そうした「納得」の仕方とでも言えばいいだろうか。もしそれがなかった場合、金目のものを持っていないと踏まれ、妙な連中に後をつけられるといったようなトラブルが増加するということを、セシルはよく知っている。

だが、最初から高位の魔導士であるということがわかってさえいれば、いらぬ問題にかかずにあわないですむ回数というのは、格段に減ってくるのだ。セシルはその違いを試してみたことがあるが、「魔導士だったら、是非あれをやってくれ」とか「これをやってくれ」と正面切って頼まれる面倒のほうで、処理するのが遥かに楽なのである。

まあ、そのような理由によって、何もく蒼の魔導士>という称号に後生大事にしがみついているというわけではなく、セシルは今もヒヤシンス石の象嵌された櫂の杖を大切にしているということだった。

「あの、すみません。ぼくが馬にさえ乗れば、旅程がもつと短く済んで、それだけ早く王都カーデイルにも到着できるのに……」

「なに、べつに構わんさ」と、少し先を速足に進んでいくシンクノアのことは構わず、セシルは微かに笑った。「第一、早いといえばエシユタリオン街道を馬に乗っていくのが一番速かったんだ。その道を選ばずにわざわざ遠回りすることを選んだ時点で、こうなる覚悟はしていた。それはあいつも同じだろうよ」

そう言って、シンクノアの長い黒髪が揺れる後ろ姿を、セシルは手綱を持った手で軽く指差した。

「だが、まさかとは思いが、エシユタリオン街道に行く道を選ばなかったのは、馬に乗れなかったことが理由ではあるまい？」

「まさか！」

ルークはびつくりしたように、一瞬だけ後ろを振り返り、セシルと目が合うと再びまっすぐ前を見た。

「……第一、馬に乗らずに徒歩でいったとしても、エシユタリオン街道を歩いていくのが最短ルートだったんです。たぶん、湯治町リ

ディマに辿り着くのも　ぼくひとりだったら、おふたりと一緒に
行くより、もつと時間がかかっていたと思います。セシルさんが抜
け道とか、どこをどう通ればいいのかとか、道をよく知ってください
ていて、本当に助かりました」

「いいえ、どういたしまして」

セシルは素直にそんな科白を吐いている自分に驚いたが、（まあ、
この娘が特別製の天然記念物っていうことなんだよな）と、彼女に
気づかれないように、心の中で何十度目になるか知れない溜息を着
いた。

例の、ルークがリウマチの癒しを祈ったとかいう女性が　祈っ
てもらった時には何も起こらなかったが、翌日に突然曲がっていた
手が真っ直ぐになったとかで、町の噴水のある広場で大騒ぎしだし
たのである。

そして、ルークの泊まっている宿である<金のおんどり亭>まで
やって来ると、泣きながら感謝を述べ、他の湯治客の間に吹聴して
まわった結果として……その前まで広場にいた似非神官は、商売上
がったりということになってしまったのだ。

おそらく、馬を一頭5レーテルなどという値段で貸してもいいと
<金のおんどり亭>の親父が思ったのには、そこらへんにも理由が
あっただろうとセシルは思う。ルークのお陰で部屋は即座満員御礼
となり、他の宿を経営している主人たちは、どこか恨みがましい目
で金の亡者の親父を眺めやっていたものだ。

似非神官のじじいはいえ、やさぐれたような格好で賭場に出
入りしていたようだが、ルークは彼に森で折ってきたヒソプの枝を
渡していたのである。

「ぼくはこれをあなたにただで差し上げますから、あなたもただで
人の病いのために祈るようになしてくださいと思えます」

セシルは内心、（そんなもので本当に病気が治るのかね）と訝し
んでいたが、十日ほどの滞在ののちに湯治町リディマを後にしてし
まった今　どうなったのかはわからない。

なんにしてもセルルは、あの似非神官のじじいが「これはルシア
ス神殿に仕える神官さまからいただいた、ご利益あるヒソプですぞ
！さあ、みなさん並んだ、並んだ！！」と言っている姿が、脳裏に
ありありと浮かんで仕方ないのだが。

実際、何故あの金権主義的強欲じじいにそんなことをしたのかと、
セルルは興味を引かれてルークに聞いてみたのだが、彼女はただ「
人の持っているものを横から奪うのはよくないことです。それでは、
泥棒と同じことになってしまいますから」と答えただけだった。

（まったく、よくわからん娘だ）

若干呆れつつそう思いはするものの……自分に背中を預けないよ
う背筋を伸ばしている目の前のルークを見ると、セルルは奇妙
なおかしみが胸にこみあげてくるのを感じた。

よくわからないが、自分にしても最近、こんなふうに関心の中で笑
っていることが多いというのは、確かなことだった。

「シンクノアの奴、さっさと先へ走っていきすぎだな。どれ、少し
追い越してやるか！」

そう言うと、セルルはルークの体を自分のほうへ引き寄せ、馬に
速度を上げるよう合図をだした。ルークは一瞬驚いたようだったが、
セルルが他意なく彼女のことを抱きしめるような形になっても、何
も言わなかった。いや、そうではなく何も言えなかったのだという
のは、おそらく、ミュシア自身にしかわからぬことだったに違
いないが。

湯治町リディマから次に向かったナルム村では、<銀のめんどり
亭>という旅籠に一行は宿泊することになった。リディマで<金の
おんどり亭>を経営していた親父と、ナルム村の<銀のめんどり亭
>の親父とは、双子であるというだけあって、顔も性格も瓜二つと
いうくらい、まったくそっくりであった。

「へっ、へっ、へっ！旦那方、馬のほうをご所望で？まあ、この鹿

毛と灰色のは俺の兄貴のものだから、俺の一存では売れないにしても……ラッキーでしたね、旦那方！俺の知り合いに、いいのを何頭も持つてるのがいますよ」

「それは大体、二頭でいくらくらいになる？」

金の交渉事になると、何かと神経質に気遣わしげな顔になるルークの視線を感じながら、セシルは下腹の突きでた、禿げの中年親父と会話を続けた。そう、<金のおんどり亭>と<銀のめんどり亭>を経営する双子の兄弟の違い、それは頭の頭髪のあるなしであった。「そりゃあ旦那、物によりけりって奴ですよ。ここから王都までっていうと、まだまだ結構ありますからねえ。ここでいい馬を仕入れて王都で売れば、なかなかいい釣りが出るかもしれないってことを考えて、駿馬に大枚をはたくつてもアリかもしれませんぜ？都じやあ、いい馬に目のない馬気違いの貴族の方なんてえのがいらつしやって、そうしたやんごとなき方々つてのは、実際には良馬を見抜く目がなくて、くずみたいな馬でも喜んでお買いになったりするっていう噂ですし」

「そんなことはどうでもいい。ついでに、値段についてもそうとやこうつるさいことを言うつもりはない。とにかく、問題なのは私がこの目で見て気に入るかどうかということだ」

セシルはぞんざいにそう言い、その日はそれで話を切り上げて、部屋のほうへ引き上げた。またしても「自分は一番安い部屋でいいです」、などとルークが寝言をいうので、セシルは疲れに任せて彼女を二階の<銀のめんどり亭>の中では一番上等だという個室へ放りこんだ。

そして、自分は一階にとった部屋で、その日はシンクノアとふたりに寝るということにした。もちろん、ベッドはそれぞれ壁際にひとつずつあるのだが、セシルはシンクノアに対し、ある重要な話があったのである。

「貴様、私に何か隠しことをしているだろう？」

湯治町リディマを出た日の夜　一行は、適当な場所を見つけて

野宿するということになった。セシルは湯治町リディマに辿り着く前のこと、野宿して三晩目の夜くらいに、結界の外を邪霊がうろついているのを見てはいた。

その時にその邪霊どもが<鍵>がどうのという話をしていたことも当然覚えている。だがまさか、自分が寝ずの番をしなければならぬほどの脅威を感じるはめになるうとは、想像してもみなかったのである。

そのせいでセシルは寝不足となり、翌日はシンクノアの乗る馬にルークのことを預けるということにもなった。とにかく先を急ぐ必要があり、朝早く出発して速駆けしてゆけば、なんとか日の暮れるぎりぎりにはナルム村に辿り着けそうでもあったのだが……やはり、地形がそれを許さなかった。下馬しなければ通過できない峡谷があり、道はそうならかな平野や丘陵地帯ばかりというわけではなかったのである。

もちろん、セシルはそうしたことも最初から承知した上でそのルートを選んではいた。そう先を急いでいるわけでもないし、ゆっくり行っても誰が損をするということもないだろう、というくらいのは気持ちで。

だが、邪霊憑きのオオカミが結界の外をうろつくとあっては、話が別だった。それがもしたただのオオカミだとしたら……火炎系の魔法を少々使って追い払えばいいくらいの話ではあったろう。第一、<獣除けの結界>であれば張ってあったので、飢えたクマでも毒を持った蛇でも、近づいてくるといことはないはずだった。

だが、邪霊憑きのオオカミというのは厄介なのだ。そちらの生命を奪えば、邪霊は居所を無くすだろうが、そのためにはこちらが結界の外へ出て相手と対峙しなければならない。そして、オオカミが骸となって倒れた瞬間、今度は邪霊のほうと戦わなければならないのである。

もつとも、このような戦いに、セシルは慣れてはいた。辺りを三十頭ほどの邪霊に操られたオオカミどもに囲まれようとも、そう驚

くには当たらない……だが、セシルはとりあえず今のところ<アレ>としか呼びよぶのではない、おぞましいものを見てしまったのだ。

喰人鬼^{ゲール}であれば、セシルも撃退した経験がある。これもまたやはり、闇魔法に身を堕した魔導士が、死人使い（ネクロマンサー）となって操っていたということのだが、セシルが<アレ>としか呼びよぶがないと思ったものは、おそらくヴァリアントと呼ばれる存在ではなかったかという気がしてならない。

ヴァリアントのヴァーリとは、一つ眼という意味であり、アントウスというのは複数形で風とか霊といった意味がある。つまり、正確にはヴァーリ・アントウス、一つ眼の風霊とでもいえばいいのかもしれないが、それが邪霊憑きオオカミどもの首領であり、先日セシルが「自分の足でここまで来い！」と言ったとおりに……彼は実際にやって来たというわけだ。

正直なところを言っ、向こうが本気になれば、自分の作った結界など五秒も持つまいということが、セシルにはよくわかっていた。それと同時に、<彼>（あるいは彼女）が　今回はただ様子を見に来ただけだということも、セシルは漠然と感じていたのである。

お互いに本気でやりあえば無傷ではおられず、そんな手間や面倒をかけずとも、「彼（彼女）」の欲しいものが<鍵>であるとしたら、もつといい他の「隙」を窺ったほうが、得策というものだったろう。

セシルが思うには、「彼」はおそらく<鍵>が本物かどうかを「直接自分の目で」確かめに来たのではないかという気がしてならない。

結局、持久戦に耐えられなくなって逸った邪霊憑きオオカミどもは、結界に体当たりをはじめたのだが、それほどやわなものをもそもセシルは張っていなかった。そのお陰で奴らのうち数匹は、勝手に自滅してくれたわけだが……結局、夜明けになるまでヴァリアントの脅威は去っていかず、セシルは一睡も出来なかったというわけである。

「あのさあ、物事には順序ってものがあるじゃんよ。あの子、今日すごく可哀想だったと思わねえ？朝起きたらきのうとは打って変わってご機嫌ナメな魔導士先生がピリピリ神経を逆立ててて……なんかもー、「きのうきつと自分が気に障ることをしたから、センルさんは怒ってるんだわっ！」とかいう心の声がずっきゅんずっきゅん聞こえちゃって、俺も今日一日、すげえつらかったわ。じゃなかったら、可愛い女の子と相乗り出来て、ちょっとドキドキな展開だったっていうのにさ」

「なーにが、ドキドキの展開だっ！！！」

（この阿呆が！）と思いながら、センルはオークの杖で床をドン！と一突きした。

「貴様、私に以前、自分の剣を見せたことがあったな？思うにおまえは、あの剣が本当は何かを知っている……その上でおそらく、私ほどの程度の魔導士なのか、見極めようとしたんだろう？表面上はいかにもお調子者ぶってるが、その実、貴様はなかなかちゃっかりしているな。その分だときのう、本当は寝たふりをしながら何が起こっていたのかにおまえは当然気づいていた……違うか？」

「ははっ。俺、実はいびきかいた振りすんの、結構得意だったりするんだよな。でも俺、なんかまずいことになってるってわかってるから寝た振りしてたんじゃないぜ？もしあのままオオカミどもが襲ってきたら、剣をとってあんたに加勢してたさ。けど、旅慣れたあんたになら、説明するまでもないことだけど 体を横にして休んでおくだけでも、大分違うからな。この剣の名前は「不殺ころさずの剣、アスタリオン」とか言うらしいが、剣の鞘が持ち主の俺にも抜けないっていうのは本当の話さ。でも、前に邪霊どもが言ってた<鍵>がなんとかっていう話は俺、初耳だなあ」

「貴様……っ！！！」

（まさか、あの時も起きていて、邪霊どもと私のやりとりを聞いていたとはな）、そう思い、センルはどっと肩に疲れが押し寄せてくるのを感じた。

なんにしても、自分はきのう寝ていないのだ。その上、強行軍で馬を飛ばしすぎた。ルークが時々、何か物言いたげな眼差しで自分のほうを見ていることにも気づいていたが、彼女のことを気にかけてやる心の余裕など、セシルには残っていなかったのである。

「いや、ほんとマジな話、あんたには悪いと思ってるよ」

脱力したように、セシルがどさりとベッドに横になると、シンクノアはいつものおちゃらけた調子ではなく、若干真面目な口調になつて言った。

「俺さあ、たぶん疫病神なんだと思う。瞳が赤いっていうのもそうなんだけど、何か呼ぶものがあるんだろうなあ……それで、もしあんたが「じゃあもうついてこんなっ!!」って言うんなら、実際そうしても全然いいんだ。あんたもたぶん同じこと考えてんだろっけど、あの子、すごくいい子じゃん？最初はさあ、ルシアス神殿の神官さまと一緒にいれば、この俺の運のなさも少しは持ち直すかもって思ったんだけど……きのうの<アレ>をちらっと見てから、俺もちょっと考え変わったっていうかさ。俺みたいな人間のために、あんないい子に迷惑かけられないもんな。うん」

「その同じ科白、明日ルークの前で言ってみる」

セシルはもう一度、櫛の杖を支えとするようにして、ベッドサイドへ起き上がった。

「私も、単に貴様が遠くへ行けば脅威が去るというのなら、そうもしよう。だがおまえ、その剣をさすらいの放浪剣士とやらから、一体いつ受けとつたんだ？第一、もしそれが奴らの探し求める<鍵>なら……おまえが今現在こうして生きていることのほうが不思議だろう。それとも貴様は、あのヴァリアントを撃退できるくらいの、実は物凄い剣の使い手だったりするわけか？」

「まさか。流石に俺もそこまでのビッグマウスじゃないさ」と、シンクノアは笑った。「あいつらがもし、こんなものを本当に欲しいんだとしたら　まあ、とくに俺なんか長い旅の間におつ死んで、誰かがこの魔剣の所有者になつてるだろうよ。なんにしても俺

は、ものをしゃべるオオカミにつけねらわれたりしたことはない。

大体、オオカミってのはそもそも根が臆病だからな。家畜を貪り食べるおぞましい様子なんかを見て、人間は自分たちも襲われるって感じるんだろうが…… 実際には奴らが人間を襲うってのは滅多にない話さ。俺は小さい頃からあいつらとつきあってきたが、仲良くなるとキンタマまで揉ましてくるようになるからな。ま、そんな話はどうでもいいにしても 勘の鋭いあんたが、実は見落としてることがあるんじゃないか？あの子が、実は女だってことの他にさ」

「そうだな」と、セシルは寝不足のせいでうまく回転しない思考回路で、それでもなんとか考えようとした。「どうやら、明日にでもそのことを直接ルークに聴いてみる必要があるようだ。人家にいようが野宿しようが、果たさなければならぬ使命がある時には、奴らは再び襲ってくるだろう…… そもそもあの子は我々と出会う前までは、ひとりで旅をしてきたんだろうからな。仮に、聖都ルシアスが陥落した時に、神殿に眠る大事な宝のようなものを携えて逃げることになったと仮定してみよう。そしてそれが邪霊どもの欲しがる<鍵>と呼ばれるものであったとして それは一体、なんのための<鍵>なんだ？」

「今日のアんたはどうもいまいち、冴えないみたいだな」

シンクノアがそう言って笑うと、セシルは「うるさいっ！！」と一喝し、まるで目の前を蠅が飛んでもいるかのように、手を振ってはたき落とした。

「あ、あのう……」

コンコン、とノックしたあとで、どこか怯えたような声が続ぎ、セシルとシンクノアは思わず顔を見合わせた。

「お食事の用意が出来たそうなので、ご一緒にと想着て」

その声を聞いた時、セシルは眠い目を手指でこすり、シンクノアは思わず声にださずに笑ってしまった。何故と行って、一度相手が女だということがわかってしまうと、それまで何故男だと思いきんでいたのが、シンクノアにはまったく理解し難かったからである。

（あんなに可愛い声してんのにさ。匂いがどうとか変態くさいことじゃなくて、なんで気づかなかったんかな、俺）

「あーい。今、セルおじいちゃんと一緒にいきますよ」

「だから、その呼び方はやめろって言ってるだろーがっ!!」

切れかかっているセルを見て、シンクノアはやはりまた笑わずにはいられない。こいつもからかい甲斐のある、つくづく面白い奴だとシンクノアは感じる……だが、早くもそろそろ離れるべき潮時というのが来ているのかもしれない。シンクノアとしてはもう少し持つかと思っていたが、邪霊憑きオオカミに狙われたり、気味の悪い妖力を全開にした巨大な一つ眼の魔物までがお出ましになったとあっては、彼らにこれ以上迷惑をかけられないと思ったのだ。

といつても、そんなものに狙われなければならぬ何かを自分が所有しているという可能性については　シンクノアは本当に心当たりがなかったのだが。

「シンクノア、悪いが私の分の食事はここまで持ってきてくれないか？そして食事が済み次第、私はすぐに眠る」

「あーいよ。今はまあ、一年で一番うまいもんが食える季節だからなあ。金の亡者の弟がそれなりに気を利かせてくれてれば、ちよつとしたうまいご馳走にありつけるだろうよ」

今は第十^{ルセル}の月の半ばである。別名狩獵月とも呼ばれるこの月は、人々が一年に収穫したものを屋根裏や地下室に蓄える時期で、ゆえに樽の中などに貯蔵しきれなかった余りものに多くありつける季節でもあるのだ。

といつても、＜銀のめんどり亭＞の亭主は、＜金のおんどり亭＞を経営する兄ほど羽振りがよくなかった上、大変な締まり屋でもあったので　シンクノアとセルとルークは、とうもろこし粉のパン各ひとつずつと、味の薄い豆のスープ、それに鳥の胸肉を細く切ったのを一切れずつ与えられたというだけであった。

「あんだ、一体これにいくら支払ったんだ？」

シンクノアが笑いながらセルに盆を渡すと、「あのドケチ兄弟

め！」という呪いの言葉がセールの口から洩れた。

「明日の朝食代まで込みで、全部で十七レール支払ったんだぞ。まったく、人の足許を見ることにかけては、顔だけでなく性格までそっくりな兄弟だな」

ナルム村は、全人口が百人にも満たない小さな村だ。ゆえに、旅籠などというものを経営しているのは、ここく銀のめんどり亭以外にはない。「それがお嫌なら、どうぞ野宿してくださいまし」といった涼しい顔つきをしたおかみに、セールは金を渡したのだったが、やがてその理由が何故だったのか、三人にもよく飲みこめた。セールとルークとシンクノアは、店のカウンターではなく、一階のセールとシンクの部屋で盆を寄せあつて食事をすることにしたが、やがて銅のなべか錫のおたまでも床に叩きつけるような、けたたましい音が響いてきたのである。

「あたしの作るものに、いちいちガタガタお言いでないよ！この甲斐性なしのつるっパゲが！」

「そういうなよ、おまえ」と、心底奥さんを怖れているらしい、恐妻家の亭主が囁くような小声で言った。「だって、十七レールももらってるんだぞ？スペアリブのひとつくらいつけてやらにゃあ、値段に見合わんだろうよ。それにおまえはもともと大して料理が上手いってわけでもないし……」

「なんだってえ！？そのうまくもない料理を二十年以上もたらふく食つて、こんなに太つちよになつたのはどこのどいつなのさ！？まったく笑わせてくれるよ、このだんだん腹のへなちよこ男めが！」
「しっ！おまえ、そんな大きな声を出したらお客さんに聞こえるだろうが」

ここで奥さんの、意地の悪い感じのする笑い声がアツハツハツ！と響いてくる。

「聞きたい奴には聞かせときゃいいんだよ。それとも何かい？あんな、客の前ではあたしの尻に敷かれてるつてとこ、見られたくないつても言うのかい？そんなこた、村中の人間が知ってることさね。」

<銀のめんどり亭>の亭主は、めんどりに怯えてトキをつくるのも忘れちまつてるんだと！いやはや、子供ってのは、なかなかうまいこと言うもんじゃないか」

今度はけらけらと愉快そうに笑う、朗らかなおかみさんの声が聞こえてくる。ふたりはなおもぼそぼそと何か話している様子だったが、セシルは輪をかけてさらに疲れた気がして、溜息を着きたくなかった。

「あのおかみさん、ピクルスを漬けるのはうまいみたいです」

そう言っつて、何かをフォローするように、ルークが鳥の胸肉の横にちよつぴりのつた、胡瓜のピクルスをフォークで刺した。

「確かに。鳥の胸肉のほうもうまいことにはうまいが、たったこれだけの量ときては、腹が膨れた振りしかできません。まずい豆のスープも、あつたかいだけ感謝しろといったところだな」

「ま、屋根があつてとりあえず口に入れるものがあるっただけでも、俺にとつちやあ御の字だぜ。あゝ、食つた食つた!!」

そう言っつてシンクノアは、ベッドの脇にあるテーブルにお盆をのせ、暖炉に薪をひとつ足した。そして暫くの間火かき棒で暖炉の中の灰をかき混ぜたりして、火の番をして遊んでいる。

「本当に、火のある場所で暖かくしてられるっついでだけでも、ぼくは神さまに感謝しないと……」

いつもなら、おそらくは呆れつつも、セシルはルークのこの物言いにイラツと来たりはしなかっただろう。だがこの時、旅の疲れと寝不足のせい、セシルは腹にたまりかねるものを感じたのだ。

「おまえ、何か私たちに隠していることがあるだろう?」

突然なんの前置きもなくズバリとそうセシルが聞くのを、シンクノアが驚いたように振り返る。まだ半分も食事を終えていないルークは、ベッドサイドに近づけたテーブルの前で、隣の魔導士をまともに見ることさえ出来なかった。

「王都カーディルへ辿り着くまでは、何も聞くまいと思つてたんだがな。毎度野宿の度に命の危険に晒されていたんでは、こつちの身

が持たん。ルークっていうのもおそらく偽名なんだろう？四か月ほど前の第六の月に、おまえは聖都ルシアスにいて……そこで何かがあつて逃げだして来たんだ。違うか？」

ガシャーン、とお盆を引っくり返しそうになりながら、ルークは立ち上がって、何かを言おうとした。

「ぼ、ぼくは……」

そう言いかけて、喉に言葉が引っかかる。とうとう、怖れていた瞬間がやって来たと、彼 いや、彼女は思った。本当のことを話すにしても、さらに嘘を塗り重ねるにしても、この場合、とにかく何かを言わなければならない。

だが、真実を鋭く見抜くような蒼い瞳の魔導士と、どこか気遣わしげなシンクノアの赤い瞳に出会うと、ミュシアはそれ以上何も言うことが出来なくなり、気づいた時には結局、その場から逃げだしていた。

「おい、待てっ……！」

これ以上余計な面倒をかけさせるな、というようにセンルが舌打ちするのを見て、シンクは立ち上がるうとする彼のことを押し留めた。

「今のおんたじゃ、あの子には逆効果だ。かわりに、俺がいく」

シンクノアは火かき棒のかわりに細身の剣を手にとると、外へ駆けだしていった。ルークは階段を上がって自分の部屋へ戻ったのではなく、そのままの格好でドアを突き破るようにして出ていったのだ。剣は、邪霊憑きの獣にでも襲われた場合の、用心のためのものだった。

「ええ、わたしも初めて見ましたよ。マゴクと呼ばれる忌々しい赤い瞳の男をね。そんな男を泊めてやってるってだけでも、慈悲深いと思ってもらわなきゃ……」

カウンターの前には、いつの間にか宿のおかみの友人がふたりほど腰かけていて、村の噂話に花を咲かせていたらしい。店の主人は台所の隅のほうに小さくなって、ビールをちびちびやっている。

シンクノアは、宿のおかみが気まずそうな顔をするのを無視すると、玄関から走って出ていった。これと似たような言葉なら、生まれた時から何千回となく聞いているので、心が傷つくとかなんとかそんなことはまるでない。というより、彼にとってはすでに「それが当たり前のこと」「にすらなっていた。

「おい、ルークっ！！待ってっ！！」

今夜は双子月がともに、どこか暗く輝いていて、あたりも闇の気配が濃かった。これもまた、一種の迷信のようなものであるうとシンクノアは思うのだが、第十の月の半頃から第十三の月が終わるまで ふたつの月は満月であつても、どこか色に翳りを帯びており、夜が普段以上に暗くなる。それはその期間、闇に蠢く魔のものどもが活動を活発にするそのせいだと、人々は一般に信じているのだった。

追いつかれまいと思つたのかどうか、ルークは道を左右にきよるきよる見やると、どここの家のものかもわからない納屋のほうへ飛びこんでいった。

「やれやれ……」

(このクソ寒い中を、まったく頼むぜ)と思いつつ、寒村育ちのシンクノアにとっては、この程度の寒さなど、実際にはまだ寒いとすら言えないようなものだった。

「こ、来ないでくださいっ！！」

シンクが納屋と思つたものは、実は馬屋で、そこには綺麗な栗毛の馬が二頭、囲いの中で身を寄せあうようにして並んでいた。

「セシルなら、部屋にいるから安心していいよ」

薄い月明かりの中で、ルークが必死に頬の涙をぬぐうのを見て、シンクノアは胸を突かれるような思いがした。ぐすつとか、ひつくとかいう、しゃくり上げるような声が聞こえると、気のせいかな馬たちも、彼女のことを気の毒がっているような気がしてならない。

「あんさあ、別に俺たち……っていうか、俺もセシルに言われなかつたら気づかなかつただろうけど、ルークが嘘をついてるとか思っ

てるわけじゃないんだぜ？世の中には嘘も方便っていうかさ、そうしなきゃ生きていけないっていうことがたくさんあるわけ。ルークはたぶん、神殿にずっといて知らなかったかもしれないけど……ま、世の中ってのはとかく真冬に吹きすさぶ風のように冷たいもんだからな。俺はそのこと、身に沁みてよく知ってるよ。何せ、マザル「マゴクって呼ばれる忌み子なんだからさ」

「マザル……って、それは何ですか？」

マゴク、という言葉を発音するのが嫌だったのだろう。神官服の袖で目の涙を拭くと、震えるように小さな声でルークは聞き返した。「マゴクっていうのは、イツファロの言葉で呪われた子っていう意味だ。でも、その言葉に関してのみ、他の国でも同じように通用するとは、俺も実は思ってたなくてさ。こここのく銀のめんどり亭のおかみもついさつき言ってたぜ。『あんなマゴクを泊めてやるだけでも、自分は慈悲深い』ってな」

「……………」

シンクノアは馬屋の片隅に干草が積み上げられているのを見ると、その上にゆっくりと腰かけた。自然、ルークもまたそんな彼の隣に並んで座ることになる。

「なんだか今日は、窓から差しこむ月の光が暗い感じがするな。三日月ってほど細くもないのに、星もなんだかその光を落としてる感じがする……人間っていうのはとにかく、このく感じ>って奴に弱いんだよな。実際には嘘をついてなくても、嘘をついてるく感じ>がするってだけで、そっちのほうが真実になっちまったりするもんなんだ。一年の中でも第十三の月は不吉な感じがする、赤い瞳をした子は不気味な感じがする……俺さ、近いうちにルークとセルからは離れるべきかなって、実は少し思ってたんだ。じゃないと、何かと迷惑をかけることになると思っただからさ」

「どうして、ですか？わたしが……いえ、ぼくが……………」

ルークが慌てたように言葉を直すのをみて、シンクは優しく微笑った。

「<ぼく>でも<わたし>でも、どっちでもいいんだよ。これは俺だけじゃなくて、セシルの奴もそう思ってることなだけどさ。ルークが男でも女でも、名前が仮にルークじゃなくても、俺にはどっちだっていいし、セシルだってそうなんだ」

このことは流石に、ルークにとつて衝撃的だったのだろう。

彼女は暫く言葉を失くしたまま、ただ薄青い影の中で、凍りついたように微動だにしなかった。

「俺もさ、悪かったって思ってる。<踊る小鹿亭>で、ほとんど強引に一緒に連れていけって言ったようなもんだからな。ルークにとつては迷惑なことだっただろう。でも俺、自分の目玉が赤いつてことに関しちゃ、すっかり被害妄想患者みたいになっちまってるから……ルシアス神殿の神官さまでも流石に、マゴクなんかと一緒にいるのはキツイのかなって思った。それでついて来ないでほしいって遠回しに断ろうとしてるのかなって思ったりもしてさ」

「そんな、そんなことは関係ありません。わたしはただ……」

ミュシアは、自分なりに「こうしたほうが男らしい」と感じられる話し方を意識的にしているつもりだったが、今はもうそんな演技をする気力さえ、彼女からは失われてしまっていた。

「本当のことがわかると困るって、ただそう思っただけです。でも、せめて王都カーディルへ行くまでだったらって、みんなにだけじゃなく、自分の心にも嘘をついて騙そうとしたのかもしれない。ずっとひとりで旅を続けるよりも、誰かが一緒にいてくれたほうが、絶対に心強いし……でももし本当のことがわかったら、ふたりとも自分のことを軽蔑するだろうってわかっていているつもりでした。だけど、セシルさんやシンクノアが優しいのをいいことに、つい甘えてしまつて……」

「べつに、軽蔑なんかしないさ」

不意に、月の光が外で強まり（あるいは、雲の陰から月が顔を出したのかもしれないが）、厩舎の中を金色の灰明るさで満たした。シンクノアはその時、自分の隣にいる神官の横顔が、端整で実に美

しいのを見てとった。

男と思えば男にも見えるし、女と言われれば到底男であるとは思えないような、どこか中性的な顔立ちだった。だが、彼 いや、彼女にはどこか人を寄せつけない強さがあると前から思っていた。汚れた手で触れれば文字通り本当に火傷をしそうな、それは一種の神々しさに近いものだったが、そのような神聖なものを一体誰が軽蔑しうるだろうと、シンクノアにはそんなふうに思えてならない。

「俺はさ、あんたのことが好きだよ、ルーク。あんたの迷惑にさえならなければ、これからも一緒に旅を続けたいと思ってる。センプルが今日機嫌悪かったのは、きのうの夜に蒼の魔導士さまでもおしっこちびりそうな魔物が現われたっていう、そのせいだからな。さっき、センプルはルークに『何か隠していることがあるだろう』って詰問したけど、その前にあいつ、俺にもまったく同じ口調で同じ質問してたよ」

ここでシンクノアは、明るい声で笑った。

「センプルの奴は、ルークが最初から女だってわかってたんだってさ。それで、女の一人旅っていうのは何かと危険だろうと思って……それで、一緒について来ることにしたんだと。あいつも何かっちゃあ、おっもしろい奴だよなあ。三百年生きてるとか言ってる割に、ちょっとしたことですぐ切れそうになったりさ。俺がもし百まででも生きたら、あいつよりはまだしも気が長くなってると思うんだがな」

「えっ！？最初からわかってたって、どうして……」

雪白の肌が、月光の下にも朱に染まるのがシンクにはわかった。

それを見て（あーらら）と、シンクノアは内心思う。こんなにもわかりやすい子ときのう一日馬に乗っていて、センプルがもし何も感じないのだとしたら あの魔導士はその部分だけが年相応にジジイなのではないかとしたか、シンクノアには思えない。

「まさかとは思いつけど、きのう一緒に馬に乗っててそれで気づかれたとか、そんなふうに思ったわけじゃないだろ？」

「ち、違いますっ！！でも、最初からわかってたなら、どうしても

「っと早く……」

ルークは真っ赤になった顔を、両方の手で包むようにして隠している。シンクノアとしては、もしセルとルークが恋愛的な意味でうまくいきそうなら……その場合にも姿を消そうとは思っていたが、あの頑固な石頭の魔導士が相手では、今のところ、自分が間にいたほうがいいのかもしれないと初めて思った。なんというのだろう、ある種の緩衝材のような存在として。

「ルークはさ、シンクノアのことが好きなんだろう？ 巫女って、外の世界で他の男と結婚したりしちゃ絶対駄目なのか？」

「わ、わたしはルシア神殿の巫女として、終生誓願を立ててるんです。ですから、それを人間のわたしの意志で取り消すということとは絶対に出来ません。わたしはセルさんのこともシンクノアのこととも人間として好きだと思っています……ただ、その、セルさんに対してはわたし、たぶん 小さい頃からの癖が出るのかもしれない。でも本当にただ、それだけなんですっ!!」

「小さい頃からの癖って？」

（本当に可愛い子だな、まったく）と思いつつ、火照った顔を両方の手で挟んだままでいるルークのことを、微笑しながらシンクノアは横から見つめた。

「つまり、その……神殿には姫巫女さまを初めとした、美しい巫女たちがいらっしやあって、わたしは小さい頃から彼女たちに強い憧れを持っていました。時々、神殿の敷地内のどこかでお姿を見かけることがあると、暫くの間ぼうつとしてしまったり、巫女さまたちはとても美しく……わたしが巫女見習いとしてお仕えた巫女さまも、本当にお綺麗な方でした。あの、なんていうかわたし、いつも横にそうした自分が憧れとする方がいたものですから、セルさんのこともつい、そんなふうに思っただけだと思いません。でも本当に、恋とかなんとか、そんな恐れ多いことではないんですっ」

（恐れ多いねえ）

シンクノアは心の中で肩を竦めつつ、それ以上のことをルークに追求するのはやめることにした。彼女はたぶん　その憧れの対象が同性ではなく異性だったら、それが<恋>と呼ばれるものになるということ、まだ知らないのだろう。

そんな純粋な娘に、下品な詮索をしようなどとはシンクノアも思わないし、何より、そろそろ体が半分くらい冷えてきた。寒村育ちのシンクノアにとって半分ということは、ルークにとってはそれ以上だろう考え、彼は立ち上がるとルークに向かって手を差し伸べた。「さてと、そろそろ寒くなってきたし、宿のほうへ戻るとするべか」
「で、でも、わたし、センルさんの前で、これから一体どんな顔をすれば……………」

シンクノアの手をとって立ち上がりながら、ルークはまた半分泣きそう、不安定な感情の揺れる顔つきをした。

「うーん、そうだな。とりあえず今日はまあ、とにかく二階に上がって寝たほうがいいかもな。センルには俺から、「ルークにわかってたってことを話した」ってことを話しておくから。あいつはルークが女だったから用心棒よろしくついてきたんであって、もしあれでルークが男だったら、今一緒にいなかったかもしれないんだぜ？だから、そういう意味でもあいつにとってはルークが女が男かっていうのは、もともと重要じゃないわけ。これでおわかりになったかな、お嬢さん？」

「でもわたし……………ずっとふたりに嘘をつきながら、いかにも正道をとく神官のように振るまっついていて、そのことがわたし、なんだかとても恥かしくて……………」

馬小屋をでる前に、シンクノアは囲いの中にある栗毛の馬二頭の鼻づらを撫でてやることにした。二頭とも、とてもいい馬だ。もしセンルが明日馬を買うつもりなら、こいつらがいいんじゃないかとシンクノアは思いもしたが、何分金をだすのは彼なので、センル自身が言っていたとおり、彼が自分の目で見て納得したものを買うほうがいいのだろう。

「ま、そう深く考えなさんな」と、馬小屋の木戸を開けながらシンクノアは言った。「明日の朝はまた、なーんもなかった顔をして、「わたしは男です」っていう振りして、いつもどおりにしてたらしいのさ。実際、ルークが平民の女の格好して旅を続けるとしたら、それはそれで大変なことになりそうだからな。セナルは蠅叩きを持ってしょっちゅうピシャピシャやってなきゃならないだろうし、どつかの宿屋に泊まるたびにイライラメーターが上がりっぱなしになるだろうよ。でもまあ、さっきみたいに三人きりで一間の部屋にいるような時は　ルークはルークらしくしてたらしいのさ。そういえばあいつ、前に言ってたぜ。ルークが男の振りをしてるってことは、相当気を遣って疲れることなんじゃないかって。その部分を俺と自分が減らせてやれば……みたいにさ。石頭で頑固でイラチだけど、そう考えるとやっぱ、結構いい奴だよな、セナルって」

「セナルさんが、そんなふう……」

ルークが不意に黙りこんだので、シンクノアもまた両方の手を頭の後ろで組んで、月を見上げるようにしながら村の通りを歩いていた。<銀のめんどり亭>の屋根のてっぺんには風見鶏が踊っていたが、それほど大きな強い風はなく　旅馴れたシンクノアは風向きや雲の流れ、月や星のかげんなどから、明日はどうやらない天気になりそうだと、そんなふうに感じていた。

ルークとシンクノアが<銀のめんどり亭>へ戻ってみると、出てきた時にカウンターにいた客の姿は消えていた。

おかみの姿もまたなかったが、かわりに禿げ頭の亭主がジョッキを掲げて、ふたりに「どうも、どうも」とよくわからない挨拶をして寄こす。

「じゃあな、ルーク。おやすみ」

「おやすみなさい」

ペこり、とどこか礼儀正しくお辞儀をしてから、ルークは階段をゆっくり上っていった。その姿を少しの間見守ってから、シンクノ

アはセシルの待っている部屋のドアを開けたのだが　まさかここまで険悪な顔をして天才魔導士さまが自分のことを出迎えようとはシルクは思いもしなかった。

「……それで、どうなったんだ？」

「どつつてのは？」

暖炉の脇、自分のベッドから手を伸ばして取れる距離のところにシルクノアは剣を立てかけた。それからベッドサイドに腰かけ、本当は今すぐにも眠りたいであろう、魔導士殿の相手をするにすることにする。

「まあ、あの娘が一緒に戻ってきたということは、うまくいったと考えていいんだろうがな」

「そうっすね。そのとおりっすよ」と、シルクノアはいつものようにお調子者を装って言った。「ほーんとにあの子、あんなに純粹で大丈夫なんスかね、旦那。俺とあんたが軽蔑したらどうしようっつて、そんなことが心配だったんですとき。もう顔なんか真っ赤にしちゃって、ぐすぐす泣いたあとで、「セシルさんにこれからどんな顔すれば……」とか言われちましたよ、俺。ま、いつもどーり普通にしたりやあいんじゃないかって言っとききましたがね。蒼の魔導士さまにその気がないんですしたら、俺が間違っつて馬屋で押し倒してるところでさ、旦那」

「こういう時に、面白くもない冗談を言うのはよせ」セシルはシルクノアをギロリと睨んで言った。寝不足のせい、青い瞳が血走って見える。「それで、どこまで聞き出した？邪霊どもが騒いでも不思議のない、<鍵>とか何かそういうものを持っていると言っていたか？」

「あ、それは聞きませんでしたわ、旦那」と、シルクノアはてへつと言っつように、自分の頭を平手で叩いた。「だつてさー、そこまで急に突っこんだこと聞けます？向こうは自分が女だつてバレたと思つて、すんげえ動揺してるんスよ？とりあえず、ルシア神殿にいたつてことは確かなんじゃないスかね。それで、巫女見習いをしてて、

自分の仕えてた巫女さまってというのがすんごく綺麗な人で……」
「巫女見習いだと？」

ある程度そうしたことを推測してはいたものの、あらためてそのことがはつきりわかった途端、セシルは驚いた。いや、驚いている自分に驚いた、というべきか。巫女見習いといえば、次期に巫女になる可能性の高い、そうなるまでもに相当な倍率をくぐり抜けてようやく<神意>によってなれるものだと聞いているだけに……やはりこのことの裏には何かがあると、セシルはそうはつきり確信した。
「そんでですね、自分がセシルさんのことを好きなのは、そういう美しい巫女さまたちを横で見えたから、つい同じようにロールモデルを求めて……」って、聞いてますかね、旦那？人の話」

だが、セシルはもうシンクノアの話など聞いていなかった。彼はベッドに横になると、無駄に睡魔と戦いながらこう考えていた。別にわざわざ盗み見ようと思っただけではないが、セシルはルークの荷物の中に<鍵>と思われるような、それらしきものなど何もないと知っていた。となると、一番可能性として高いのは、彼女の体の中になんらかの形で<鍵>が移植されているということだろう。つまりは、ルーク自身が生きた鍵そのものなのだ。

（くそっ！こんなに眠くもなければ、今すぐ二階へ行って、洗いざらいすべて話させてやるものを……）

そう思いながらセシルは、泥のような睡魔との戦いに破れ、やがて静かに寝息を立てはじめた。シンクノアが振りではない本物の大いびきをかいていたことには、幸いなことにまったく気づかないくらい、彼は翌朝までぐっすり休むことが出来たのである。

翌日　きのこのまずい夕食に続き、それ以上にパツとしない朝食を終えると、三人は<第？（イゼル）の刻>になる少し前に、<銀のめんどり亭>を出ることにした。

朝食のほうは、店のカウンターではなく、昨夜と同じくシンク

ノアとセンルの部屋でとることにしたのだが、その場でセンルは、ルークに特別何も聞いたりしはしなかった。何より、事が自分で考えていたよりも重大らしいと気づいた彼は、相手がど田舎村の住民であれ、このことに関してこそりとも物を聞かれるのは危険だと考えたのである。

だが、<銀のめんどり亭>の亭主が紹介してくれた馬屋の親父とというのが実に頑固で、仮に一頭につき三十シエケルもらったとしても、馬を売る気はないと言い張った。馬上ですぐにも、自分の知りたいことをすべて聞くつもりであったセンルとしては、これは大きな計算違いとなることである。

「そうか。ではここにクラウン金貨が五十枚ある。シエケルに直せば百シエケルだ。これであの栗毛の馬を二頭、譲ってもらえないかね？」

イラチの魔導士センルとしても、ここは我慢のしどころだった。何分、きのうぐっすり眠れた上、夢の中でさえ邪霊に悩まされなかったお陰で、彼は今、普段よりは若干気分が良かったのだ。

「へっ！クラウン金貨なんぞクソ食らえだっ！！こつただ金、ここいらじゃ使わねえって、あんた方は知りなさらんのかね？わしらは土地でも家でも、大きなもんを買う時には、シエケルで交換するって慣わしよ。馬だつてそうさね。クラウン金貨なんぞもらつたつて、温泉町のリディマか王都カーディルに近い町くらいまで行かねえと、ここいらじゃ実用性なんかねえのよ」

クラウン金貨というのは、カルディナル王国では一般に貴族階級の人間しか使わない貨幣である。シエケルというのはクラウンよりもひとつ下に当たる通貨で、1シエケルには50レーテルの価値があるとされる。平民や農民などは大抵家屋などを買う時でも、シエケルで決済するのが普通であった。

センルとしては、これだけの金に心を動かさない人間がいて嬉しい反面、シンクノアが言うところのイライラメーターが徐々に上がってきてもいた。結局のところ、金の問題ではなく馬主は馬を手離

したくないのだろうと思い、セシルは諦めることにしたわけだが、
他を当たってみても、まったく同じように馬を売ってくれそうな
村人には出会えなかったのである。

その理由が何故なのか、五軒目の家で、セシルにもようやくわか
った。その厩舎の持ち主が、セシルたちが馬房を出ていきしな
ばそりとこんなことを呟いていたからだ。

「誰が好き好んで、マゴクなんぞに物を売るもんかね。そんなこと
をしたら、末代まで祟られちまうわ」

当然、この一見純朴そうに見える中年農夫の言葉は、ルークの耳
にもシンクノアの耳にも届いていた。シンクノア自身は、大して気
に留めてもいなかったのだが（というのも、これが彼にとつての「
普通」であったので）、もうこのままナムル村の出口まで道を歩い
ていくしかないように思われた時　突然、ルークがぴたりと立ち
止まり、大声で宣言するようにこう言い放ったのである。

「馬なんてなくっても、このまま歩いていきましよう！次町へ
辿り着くには、10エリオンもないんですから。とっとと歩いて
いけば、正午前には着いてしまいます、きっとそうです！！」

そう言うなり、ルークは怒ったような顔をして、ひとりずんずん
歩いていった。

そんな様子の彼女を見て、セシルとシンクノアは、思わず顔を見
合わせて笑ってしまう。

「自分で言っていたとおり、本当に貴様はいい疫病神だな」

「ははっ。この程度で済むくらいなら、まだいいほうだぜ。あんだ、
あのく銀のめんどり亭のおかみが泊まらせてくれなかったら……
二晩続けて野宿で、今ごろ寝不足のあまり、眉間の血管から血が飛
び出してるだろうよ」

「それをおまえが言うな！」

セシルはそう言って、手に持ったオークの杖で一瞬地面を穿った。
シンクノアはといえば、頭の後ろで両手を組んだまま、隣にいる
三百歳の魔導士の、イライラした顔の表情を面白そうに眺めやるば

かりである。

(なんにしても、旅の仲間ってのはいいもんだな)

呑気にそんなことを思いながら、天高く馬肥ゆる秋の空を、シンクノアはじつと見上げていた。

第3章 白蛇女王の館

ナルム村を出て以降、一行の旅のペースはゆるやかなものになった。大体次の町や村へ辿り着くのに 30エリオン以上離れているということはなかったもので、馬がなくなるとも徒歩でも、日が暮れるまでに辿り着けないような場所はなかったたのである。

そこでセンルとルークとシンクノアの一行は、王都カーディルまで行き着くのに、約三か月ほどもかかってしまった。というのは、道程の町や村で色々な事件に引っかけたせいで、場所によっては半月ほど逗留したこともあったからである。

第一の事件としては、山間にある洞窟に魔物が住んでおり、そのせいで隣村同士の行き来が閉ざされ困っている……というのが、<ルアーガの鬼蜘蛛退治>という事件であり、この時初めてセンルは、シンクノアの剣の腕前がどの程度のものであるのかを知った。

ルアーガというのは、カーディルの言葉で「熊の巣」を意味している。つまり、村人たちが熊が冬眠するのに使っていると思いでいた洞窟に 一つの間にやらく鬼蜘蛛>という名の魔物が住みついていたのである。鬼蜘蛛は巨大な蜘蛛のような姿をしており、口から粘液を吐いて動物や人間を絡めとると、生きたまま貪り食べるといふ、肉食の魔物だった。

センルとしては最初から特にシンクノアの剣の腕前のほうには期待していなかったのだが(というより、彼がどの程度の剣の使い手なのかということすら、考えてみたこともなかった)、自分ともし直接対決した場合、おそらく無傷ではいられまい、というくらいの脅威を感じた。

つまり、センルが呪文を唱えて発動させる前に、すべての事の決着は着いていたのである。センルにはその太刀筋を見分けることさえ出来なかったが、シンクノアが細身の剣を抜くか抜かぬかの間に……鬼蜘蛛の巨体はまず胴と頭が離れていた。それから一瞬間を置

いて、足がすべてバラバラになっていたのである。

「こいつは、頭を潰しても胴体だけで動くし、足に生えてる毛に毒があつてな、捕まえられると痺れて暫く動けなくなるんだ。暫くなんて言つても、その動けない間に喰われちまつてる公算が高いわけだけだな」

「……おまえ、この種の仕事をよく請け負うのか」

火炎魔法によつてまずは口を塞ごうと考えていたセシルは、あまりに呆気なく片が着いたのを見て、シンクノアに対して感心しないわけにはいかなかった。ルークは光の精霊魔法を使つて洞窟内を明るく照らしていたが、あまりにグロテスクな魔物の屍骸を前にして、驚いたのだろう……暫く口すら聞けないまま、ただ呆然としていた。「まあ、話としては、セシルの闇の魔導士退治つていうのと、少し似てるのかもしれないな。こういう汚れ仕事はマゴクが御専門つてな感じで、話があれば当然割高で請け負うよ。じゃないと、こつちも暮らしていけないからさ」

「なるほど。そういうことか」

ナルム村を出たあと、当然セシルは、ルークの本名や彼女自身が生きた<鍵>そのものではないかということまで、色々と質問攻めにしたのだが、シンクノアはそれを途中で止めさせていた。「そういうのは、やめにしようぜ、兄弟」と、彼は道の途中でそう言い、セシルの肩をぽんと叩いたのである。

「……私とおまえが、一体いつから兄弟になつた。気色の悪いことを言つなっ！」

「だつてさ、ミュシアちゃんもおまえに一気に色々聞かれて困つてるじゃん。あんたさあ、もう三百年も生きてるんだろ？それで、生まれはどこですかとか、三百年生きてもその若さで、どんなことでも一番お困りですかとか、聞かれて嬉しいか？むしろ途中で、いいかげんぶつ飛ばすぞ、このトウヘンボクがっ！！てなるのが普通なんじゃねえ？だからそう、こんな可愛い子を一気に追い詰めるような真似すんなつて、俺は言いたいわけ。おわかり？」

確かに、シンクノアにそう言われて、ルーク……いや、ミュシアが困り果てたような顔をしていることに、セシルは初めて気づいた。どことなく、怯えきったうさぎのような顔の表情すらしているように見える。

以来、ミュシアが第四の緑柱石の巫女だったこと以上に、セシルは詮索するのをやめているわけだが、知識欲が旺盛なセシルとしては、最後の姫巫女リリアが託したものの意味について、早く知りたくてならないのだった。

「あの、本当にわたし、わざと隠してるってわけじゃなくて……その<鍵>ってというのがなんなのか、よく知らないんです。だから、世界最大の図書館っていわゆるカーディル図書館へ行けば、何かわかるんじゃないかって、そう思ってた……」

ミュシアのその答えを聞くと、今度はセシルが黙りこまねばならなかった。何故と行って、おそらく王都カーディルへ行けば、本を調べる以前に<生きた知恵>を持った魔導士たちがいるので、もしセシル自身がうまく渡りをつけれれば、ミュシアがこれからどうすればいいのかを、教えることが出来るかもしれないのである。

また、それと同時に、自分とシンクノアが実にその身分の危うい人間を守っているのだということに、セシルは初めて思い至っていた。つまり、姫巫女の間で代々継承されてきた<鍵>が今現在彼女の体内にあるということは、ミュシア自身が本当の意味での生きた最後の姫巫女ということになるだろう。

もし、政治的野心を抱いている人間が彼女に近づき、姫巫女リリアが次の姫巫女を指名して逃がしたからこそ、リリアは自ら命を絶ったのだと世間に公表された場合……おそらくミュシアは、多くの人間から命を狙われることになるに違いない。ミュシア自身はその可能性にまるで気づいていないようだが、ルシアス王家は現在、どうやら<遷都>を考えているらしい。暗黒竜に踏み穢されて焦土と化した大地を復興させるよりも、ルシアス王国の第二の都といわれるルベリオンか第三の都として栄えるルクシンドラへ王家をお迎え

してはどうかということが、現在審議検討中であるらしかった。

もしそこへ、姫巫女がその証拠となるものとともに御存命であられる……などということが世間に知れ渡ったら、一体どうなるだろう？そもそも、王族を初めとした諸侯はみな城の中へ逃れていて無事だったということ自体、少しおかしな話ではないかと、センルは前から思っていた。ルシアス王家というのは、聖竜の末裔の血を継ぐ者として姫巫女ほどではないにしても、世間ではそれなりに人気のある存在である。だが、噂によると（といっても、ミュシアの口から直接それが本当のことであると知った今、センルにとってそれは真実となつたのだが）、ルシア神殿の姫巫女は、女王や王である者とすら、俗世にある者として顔と顔を合わせて話をするとはしないらしい。つまり、執政のことに關して何か神の託宣が欲しい場合は、御簾ごしに会話をし、姫巫女自身は女王の前にも王の前にも決して姿を現したりはしないのだという。

よくそれで、千年以上も治世が持つたなとセンルはつくづく感心するが、ルシアス王家が長い間ルシア神殿のある方角を、王城から疎ましく眺めていたとしても、まったく驚くには当たらないだろうという気が、センルはする。これもまた噂によればということなのだが、王家に収められる税金よりも神殿税のほうが遥かに大きく上回るということだし、その税を自分がうまく操れる巫女をその地位に就けることで自由に出来るとしたらどうだろう？センルには、そのような計画がルシアス王国の現女王を中心に押し進められているのではないかという気がしてならなかった。

つまり　カルディナル王国の王都カーデルで、最初センルがしようと思っていたのは次のようなことだった。国の最高魔導士であるプリンク以下、高位の信頼できる魔導士たちに自分がヴァリアントと出会ったこと、また彼が<鍵>と呼ばれるものを探し回っているらしいこと、それからそれが何を意味しているのか、自分の手には余る問題について彼らに訊ねてみるとつもりであった。

だが、そのためにはミュシアがルシア神殿の姫巫女としての継承

権を保有する者であることを、彼らに明かさなければならなくなるだろう。セシルは闇の魔導士退治が嫌になり、破門されたも同然の身分であったので、カルディナル王国の政治事情については今もいまいち疎いという実情がある。

ゆえに、話をする相手はつくづく慎重に選ばなければならぬと考えていた。もし、カルディナル王国に姫巫女が逃れて御存命中であるということが世間に知れ渡れば、おそらくその後は戦争になるということも、十分考えられるのだから。

「シンクノア、おまえ……あの子のために、命を捨てられるか？」

ひとり、頭の中で同じことを繰り返し考えるのに嫌気が差し、シロンという名の町にいる時、セシルは眠る前にそうシンクノアに聞いていた。

「命、か。そういうあんたはどうなんだ？」

その時に宿っていた瞳の色によって、シンクノアにはそれが出来るだろうということが、セシルにははっきりとわかった。

「前に、ハーフェルフの百年は、人間にとっての十年みたいなものだって、言っていたことがあったろう？それでいくと、セシルは命さえあれば、これからもずっと長生きができる……つまり、せいぜい百年くらいしか生きない俺たち人間の命が、セシルには十個以上詰まってるってことだ。それなのに、その命をつまらないことで落としたくないと思うのは当然のことのような気がする。でも俺は

昔はさ、もう一度アイリに会えるまでは絶対に死ぬものかと思っただっていうこさえわかれば、別に明日死んでもいいんだよな。あの子は……ミュシアは、俺が自分のクズみたいな命を捨てて守る以上に、充分価値のある子だと思う。そしてミュシアのほうでも、俺かあるいは俺じゃなくても、だ。クズかカス程度にしか感じられない人間のためにも、あの子は命を投げだすだろう。それがわかるから、俺はあの子のためになら命を捨てられる気がするんだ」

「そうか。だがな、私自身のことに関して言えば、逆の考え方もで

きるんだぞ？すでにもう三百年も生きたということは　普通の人間の生命、三個分以上の人生を送ったことにもなるわけだ。それで魔導士センルもそろそろ年貢の納め時っていう時が来たら、残りの寿命のことなど考えてもいられまいよ。おまえが身に沁みて知っているとおり、長生きするばかりが幸福とはいえない。私は生まれ変わりと聞いたものを特に信じているわけではないが、もし来世というものがあつたとして、シンクノア　次はどんな瞳の色でも選べるとなつたらおまえ、どうする？」

「ははは」と、シンクノアはどこか愉快そうに笑つた。「俺は次の人生なんて、考えてみたこともないな。だけど赤い瞳だけはごめんだ、ということも出来ない。人間つてのはまったく深い生き物で、俺のことをマゴクと呼んで忌み嫌う人間がいる反面……アイリやミュシアやセンルみたいに、そんなことをまるで問題にもしない人間つていうのが存在するからな。俺はミュシアみたいに特に信仰深いわけではないにしても、時々神さまつていうのが天から見ていて、本当に価値のある人間とそれほどでもない人間を選別してるんじゃないかと思うことがあるよ。あの子は差別意識のない本当にいい子だ、魂の財産としてプラス五点とか、何かそんなふうになさ」

「だが、それでいつたら、赤い瞳で苦労しているおまえ当人は一体どうなるんだ？」

「俺か？センル先生、俺にはそれがまったくわからないんだよな。シンクノアくんは、たまたま第13の月に赤い瞳で生まれちゃつて可哀想でちた。だから百点満点……なんていうのが神とかいう奴だつたら、俺はそんな野郎のことは速攻ぶつ飛ばしてるだろうからな」

そこで、センルとシンクノアが互いに声を合わせて笑つていると不意に、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。ふたりは、てつきり相手がミュシアに違いないと思つていたのだが、「どーぞー」というおちゃらけたシンクの声に答えたのは、ミュシアではない、まったく別の女性の声だった。

「わたくしは、シロンの領主の城館に勤める、エノラと申す者です。

こちらに、ルシアス神殿にお仕えである神官さまがおられると聞いて参りました。我がシロンの娘と呼ばれるヤスミンカさまが、奇病にかかっておいでで……是非、治療をしていただきたく、こちらをお訪ねしたのでございます」

この種のことというのは、湯治町リディマを出て以来、幾度となくあつた依頼であつた。ルシアス神殿の神官としての印である青の僧服と、手に持った錫杖を目にするなり、信心深い老人などは、額を地にこすりつけんばかりにしてルークのことを拝むことさえあるのだ。

「えーと、ミュ……じゃねえ。ルークなら、別の部屋にいるけど、俺たちは彼とともに旅をしている用心棒つてところだ。用があるなら、上からあいつを呼んでこようか？」

「ええ。是非お願いします」

エノラという名の中年の女中は、切羽詰まつたような顔の表情をしており、シンクノアの赤い瞳を見ても、まったく動じずに、彼が脇を通りすぎていった時にさえ、敬意を払うように会釈していた。

これまで、大抵の人間がルシアス神殿に仕える神官さまともあろう方が、何故マゴクなどと一緒にいるのか……という視線に慣れていたセシルにとって、これはむしろ何かの良くないサインであるように思えて仕方なかった。

つまり、シロンの城主の娘のヤスミンカとやらは相当な重傷らしいと察せられるが、権力を持つ者の親族の病いを癒せなかつたらどうなるのか、セシルにとってはその点が何より気がかりだったのである。何しろ、リディマの町のリウマチ女性がそうであつたようにルークの癒しの祈りといったものは、即座にその場で効力が現われる場合と、そうでない時とがあるのだから。

シンクノアが二階の部屋で休んでいたルークのことを連れてくると、エノラはとにかくお嬢さまのことは見てほしい、その症状についてはここではお話できないというその一点張りだった。そこでルークが、「今日はもう遅いので明日の朝お伺いするというのではど

うでしようか？」と提案すると、エノラという侍女は「是非とも今宵のうち、一刻も早く見ていただきたくのでございます」と、今にも泣きださんばかりにしてルークに懇願した。

そこで彼女としても、これは相当病いが重いのだろうと考え、エノラの言い分を聞き入れたのだったが、この時、時刻は<第十一の刻>であった。双子月とともに三日月よりもさらに細くなっていたこの夜、シロンの城館へ向かうまでの間、道は暗いというよりもまるで黒く塗り潰されでもしたように先が見えなかった。

エノラとしては、ルシアス神殿の神官ひとりのみを屋敷まで連れていくつもりであったのだろう。まるで当然のように後ろから蒼の魔導士と赤い瞳を持つマゴクがついて来ようとするのを見て、彼女はとても当惑した様子だった。

「もしそれが伝染病か何かであるとしたら、ぼくひとりで……」とルークが言いかけると、いつものように「駄目だ！」とセシルが即座に反対した。

「何度言ったらわかる？おまえの体はもう、おまえひとりだけのものじゃ……」

そこまで言いかけて、ハツとしたようにセシルは口を噤み、それからこう言い直した。

「つまり、ルシアス神殿の神官さまの御身は、あなたおひとりのものではないということ、ルークさま」

この丁寧な物言いに、エノラは気を良くしたのかどうか、「さようでございますよ」と言つて、初めて微かに笑顔を見せた。

「ヤスミンカさまの御病気は、人にお移りするようなものではありません。そちらはこのわたくしが十分に請けあいますわ。何故とって、わたしはヤスミンカさま付きの侍女で、いつもヤスミンカさまのお世話をしているのですから……しかしながら、お嬢さまの寝室では神官さまだけがお嬢さまにお会いして欲しいのです。その点については、ご了承いただけますでしょうか？」

「まあ、俺は当然ヤスミンカさんに会わないほうがいいにしても」

と、シンクノアは隣のセナルのことを見返した。

「私はとても嫌な予感がしてならないんですがね、エノラさんとやら」

セナルは、先頭に立って角燈で先を照らす侍女に対し、仏頂面で続けた。

「もしそこに闇魔法が関わっていた場合、それはどちらかというところ魔導士である私の専門だと思つので。そしてその場合は、もしかしたらルシアス神殿の神官さまのお力を持ってしても癒されぬかもしれないのですよ。そう考えた場合、ヤスミンカお嬢さんはルークと私のふたりに会つたほうがいいと、そうお考えにはなられませんか？」

町の大通りを抜けてからは、坂道が続いた。シロンの町は、小高い丘に建てられていて、領主の城館はそのままも高い場所に位置している。そして砂石造りの古い城館の門をくぐつた時、セナルの中の嫌な予感は確信に変わった。

闇の魔導士や闇魔法に関わる何かが身近にある場合、セナルは仮に寒くない時でも一瞬肌が怖気立つのだ。侍女のエノラは、セナルが言つた言葉に対し、黙つて足早に坂道を上り続け、返答を保留にしていたのだが、屋敷の玄関口へ辿り着くなり、突然その話の続きをしはじめた。

「ああ、ヤスミンカお嬢さまの寝室は二階でございますわ。そのう……名のある魔導士さまにでしたら、すでにお嬢さまのことをお見せしたのです。ここから王都カーディルまでは、そう遠くはございませんからね。お嬢さまのために、なるべくお力のある魔導士さまをと、ヤスミンカさまのお父さま……つまり、ここシロン地方一帯の領主であるラディール卿は使いの者を走らせたのですよ。ところが、あの口の軽いへボ魔導士めが……」

ここでエノラは、今思いだしても腹が立つとも言うように、何度か玄関マットの上で足を踏み鳴らした。

「あら、わたしとしたことが……おほほ。なんにしても、そのへボ

魔導士めはお嬢さまの御病気をお癒しになれなかつただけでなく、シロンの領主の娘には白蛇の呪いがかかっているなどと、言い触らしてまわったのでございますよ。そのせいで、せつかく進んでいたエレアノール卿との縁談もすっかりぶち壊しになって、以来お嬢さまは生きる気力を失っておいでなんですの。ああ、以前はあんなにお美しかったお嬢さまがどうしてこんな目に……本当に、おいたわしい限りのことでございますわ」

エノラは玄関口に出てきた使用人の娘に角燈を渡すと、毛足の長い白い絨毯の敷かれた階段を、二階へ上がっていった。廊下は広く、このままどこまでも続きそうなくらい長くもあつたが、壁にかけられた燭台に明かりが灯っているだけでなく、あちこちの暖炉に火が入っているそのせいだろう、全体に暖かな空気が行き渡っているようだった。

セシルは廊下の壁に飾られた絵画や、大理石の彫刻品などを見て、これだけの贅沢のできる金持ち領主の娘が病気となり、不名誉な噂話を流されたとあつては、これ以上の屈辱はおそろくなかつたらうと想像した。エレアノール卿との縁談だけでなく、果たして他の身分ある貴族ともこれから結婚できるかどうか……もしその白蛇の呪いとやらが闇魔法に関わるもので、領主の娘ヤスミンカ自身が何かのく取引>に関わっていた場合、今も正気で命があるだけでも儲けものだという可能性もあることを、セシルはよく承知していた。

「あの、少々こちらでお待ちになってくださいませ。ヤスミンカお嬢さまに心の準備をしていたただかなくてはなりませんから」

ヤスミンカが休んでいるという部屋の向かいに応接室があり、そこでも暖炉に炎が燃えていた。シンクノアはここからは自分は邪魔になると判断したのだろう、片方の扉が廊下に向かって開け放たれている応接室の中へ姿を消した。

「まあ、ルシアス神殿の神官さまが本当に来てくださるだなんて！」
胡桃材の茶色いドアの向こうからは、病気とはとても思えないような、若々しくて明るい声が聞こえてきた。

れてきたへボ魔導士が白蛇の呪いと呼んだのも、案外外れていなくはない。この鱗を砕いて粉末状にしたものを飲み続けると、今のあなたのように取り返しのつかないことに……」

「見ないでえっ！わたしを見ないでえっ！！」

両方の手で顔を覆い、まるで蛇のようにヤスミンカが体をくねらせていると、ベッドの前に腰掛けていたルークが立ち上がり、怖い顔をしてセナルのことを睨みつけてきた。

「セナルさん、出てってくださいっ！！ここは若い女性の寝室なんですよ！」

そう言っつて、セナルを突き飛ばして外へ出ていかせると、ルークはバタンとドアを閉めていた。暫くの間ヤスミンカの囁り泣く声が廊下の隅々まで聞こえていたが、こういうことがよくあるのかどうか、使用人が二階に上ってくるような気配はまるでない。

「やれやれ。セナル大先生の博識も、若い女性の前ではけんもほろろだな」

「うるさいっ！！」と言いつつ、セナルはシンクノアが空中に放った白い鱗を受けとった。

「大方、これを飲めば肌が美しくなるとかなんとか、怪しい商人にでも売りつけられたんだろうよ。まったく、よくある手なんだがな……これに引つかかる女性というのは、数に限りがない。あいつらはもう自分たちに明るい未来がないので、それを持つ人間の未来を台無しにする以外楽しみがないんだろうよ。シンクノア、おまえ『欲望のなる樹』っていう話を知っているか？」

「ああ。まあ、有名な民話だよな。子供でもみんな知ってるような……」

腕を組んだまま、シンクノアは廊下の壁にもたれて言った。

「ええと、確か　ある村に<願いごとの叶う樹>が生えていて、みんながそこをお願いごとをしにいった。心の清い人間がお腹をすかせてそこに食べ物を取りにいくと、西瓜とか蜜柑とか、とにかく食べたいものが生っている。他には新しい鍬が欲しければ、古いの

を地面に埋めておくと、次の日には新品の鍬が樹に生つていとう寸法なわけだ……ある日、貧乏で結婚できない若者が、いい嫁さんが欲しいと願うと、我慢強いべっぴんの嫁が樹になっていた。それを見ていた腹の黒い男が、自分の女房を殺して土に埋め、新しい美人の嫁が欲しいと願う。次の日に「願いの叶う木」には確かに美人の嫁が生つていたのだが、そのべっぴんの嫁は次第に腹の黒い男を苦しめるようになった。その他、その男が金のヤカンが欲しいと願えば、そのヤカンには穴が開いてるし、とにかくそんな調子でその願いの叶いごとはちゃんと叶えられた試しがなかった。だが、他の人間たちが相も変わらぬいい物を引き当てるのを見て嫉妬した男は、最後に、その樹に斧を当てて倒してしまふんだな。村の人々は願いの叶う樹がなくなったことを悲しみ、腹の黒い男と強欲な女房を殺すと、もと樹のあった場所へ埋めたくて話だ。終わりの言葉は、「このふたりが埋まった地面からは、その後なんにも生えて来ませんでしたとさ」っていう、なんとも救いようのない、暗い話だよな」

「そうだ。闇魔法に関わった連中っていうのは、それと同じ運命を辿るってわけさ。自分だけでなく、他人をも不幸にするっていう負の連鎖が延々と続いていき……一度闇の側へ落ちた人間っていうのは、他人を不幸にしたり呪うこと以外に興味がなくなっていくらしい。正確には、自分と同じ不幸を持つ人間を増やすことしか、なすべきことがなくなるってわけだ。私が魔法の手ほどきを受けたカーデル王立魔術院では、教師のひとりがかんなことを言っていたよ。闇魔法に傾倒する人間が増えると、やがて世界を癒す樹が枯れて、一本も生えない状態になるってな。だからそうなる前に向こうの勢力をある一定のところまで食い止めなければならんわけだが……おまえ、ここに来るまでに感じなかったか？」

「ああ、感じた」と、シンクノアは重い溜息とともに答えた。「囲まれてるな。城館に勤める使用人のうち、何人かは間違いなく魔の物だと思う。もともと人間なのか、それとも魔物が人間の振りをしているのかは判然としないが……問題なのは」

シンクノアはそう言って、扉の向こうに再び耳を澄ませた。話声が急に止んだのである。セシルはすかさず、重いドアを開けようとしたが、鍵がかかっていた。

「くそっ！」

セシルが口の中で<開錠>（ラ・シエント）の呪文を唱えると、鍵の回る音が聞こえるのと同様、シンクノアがそこに肩から体当たりした。

そこでは、二匹の白い蛇が暖炉の炎を受けて、壁に影を不気味に伸ばしているところだった。気を失ったミュシアが、一匹の白蛇おそつくエノラに抱えられ、もう一匹の白蛇が二又に分かれた赤い舌をだし、彼女の体を味見するようになめている。

『残念ダワ……アトモウ少シダツタノニ』

『やすみんかサマ。セツカクノ上等ナ御馳走ヲ諦メナイデ。ワタシタチデ半分コニシマシヨウ。ワタシタチデ半分コ……』

『ソウネ！ソウスレピアノノ方モキツトオ喜ビニナルモノネ！！』

本体よりも影のほうがぐっと大きくなり、威圧するようにシンクノアに牙を剥いてきた。鬼蜘蛛を倒した時同様、一瞬で蹴りがついたのは良かったが、首を斬り落とされたあと、大蛇の首が黒い何かに変わり、次にそれが無数の虫になつてあたりを這いずりまわった。

「うわっ！！なんだ、これ……っ！！！」

「しっかりしろ！ただの幻術だ！！」

セシルが火炎魔法を唱えると、暖炉の炎が白蛇エノラの体に燃え移った。その炎の力にヤスミンカも驚いたのだらう、シンクノアの幻術がとけた。

「うあ〜っ。気っ持ちわりい〜！！危うくもう少しで、口の中にゴキブリが入ってくるところだったぜ！！」

『やすみんかサマ、助ケテ。やすみんかサマ……』

体をくねらせながらエノラは、まるで捧げものでもするように、ヤスミンカに向かってミュシアの体を持ち上げたが、白蛇のヤスミン

ンカがクワツと口の顎を外して獲物に襲いかかろうとした瞬間

今度こそ本当に、シンクノアの剣がヤスミンカの舌を引き裂き、そのまま喉から内蔵に至るまでを真つ二つにした。

これで勝負はついた、とシンクノアはそう思い、ミュシアを抱き上げたセンルとともに部屋を出ようとしたのだが、二匹の白蛇はそれで死んだというわけではなかった。ふたりは脱皮するように新しい体を作り上げると、ふたつの頭を持つ大蛇となり、三人に向かつて再び牙を剥いてきた。

「おい！あいつら不死身かよ！？」

泣きごとを呟くシンクノアと一緒に廊下を走りつつ、センルは左右の部屋に鋭く目を走らせていた。ミュシアの体であれば、重力魔法をかけて軽くしてあるので、何も問題はない。だが、センルにとってこの時一番問題だったのは、どこにあの二匹の蛇の〈本体〉の元があるのか、ということだった。

それを潰さない限りは、無限に増殖する化け物と空を切るような拳闘を続けなければならないことが、センルにはよくわかっていたのだ。

「シンクノア、屋敷の火をすべて消すぞ！！」

「ええっ！？そんなことしたら……まあ、天才魔導士先生の仰せとあっちゃ仕方ねえな！あんたの好きにしろよ」

センルが炎を消す消火呪文を唱えると、まずは廊下の燭台にあった火がすべて消えた。それから暖炉の火も、すべて水を浴びせられたように突然消し炭になる。

「アアアッ。助ケテ、えのら。ワタシ、目ガ見エナイ。暗イノ、怖イ。怖イノ、イヤ。えのら、えのら……」

「やすみんかサマ、シツカリシテクダサイ。えのらハココニオリマス。イツデモ、やすみんかサマノオソバニ……」

二階の部屋の炎が消えた間に、センルは一階でミュシアの顔をはたいて、彼女のことを起こそうとした。彼女に光の精霊魔法を唱えてもらってからでなくては、一階の部屋の炎を消せないからだ。

「ミュシア！光の精のラミカを呼んでくれ！！それも今すぐに！」
ミュシアは目を覚ますと、セシルの言うとおりに呪文を唱えた。
悪しき者は決してこの光の力に打ち勝つことが出来ない。そこで、
双頭の大蛇をこの光の力によって二階に足止めすると、一階にある
部屋のひとつから、先ほどエノラが角燈を渡した使用人の娘がでて
きた。

「あなた方がお探しのものは、これでございますよ」
そうして美しい硝子細工の角燈を、ミュシアに向かって彼女は差
しだした。

「わたしたちはずっと本当の光が訪れるのを待っていたんです。ヤ
スミンカさまはこの屋敷で火事のあった日に、顔に大火傷を負っ
て縁談が破談になったのでございますよ。とても美しい方でした
が、弱視でしたので、自分が本当はどのくらいお美しいのかはご存
知ないまま……首を吊って自殺されたのです。侍女のエノラはこの
角燈を持ってお嬢さまの寝室を覗いた時に、そのご遺体を発見して
しまい、その後ほとんど廃人のような人生を送って死にました。あ
の時に火事で死んだ使用人たちはみな、わたしを含め、何故かみな
ここへ呪いの杭に刺されるみたいに留め置かれることになったんで
す。でも今、これでようやく、どこかはわかりませんが、別の場所
へ行くことが出来そうです。唯一の本当の光、これさえ道標になっ
てくれたなら……」

「れおのら〜ッ。使用人ノ分際デ、主人ノコトヲぺちやくちや喋ル
ナンテ許サナイ〜ッ。オマエナンカ、クズダツ、ゴミダツ。天国ニ
ナンカイケツコナインダツ！！死ネ死ネ死ネ死ネ、ミンナ死ネッ！
！モウ嫌ダア〜ッ！！コンナノ嫌ナノオ〜ッ！！コンナハズジャナ
カッタツ！！ミンナ間違ッテル！！ワタシ以外ハミンナ間違ッテル
ンダア〜ッ！！！」

「早く、この角燈を持ってお逃げください。あのままでは、ヤスミ
ンカお嬢さまも侍女のエノラも結局不幸なままなのです。そして、
その角燈を持って安全な場所へ出るまでの間、かわりにあの光をわ

たしたちに与えてほしいのです。そのあとで、その角燈を粉々に砕いてください。いいですね？」

「センルとミュシアとシンクノアは、言われたとおりにした。時刻はまだ<十二アザルの刻>と<？（ハゼル）の刻>の間で、まだまだ闇が色濃く、もしその角燈の光がなければ、とても旅籠の<月と牝牛亭>までは戻れなかつたろう。」

屋敷を出て、坂道を下っていく間、ミュシアとシンクノアとセンルは、城館の使用人と思しき何人もの人々にお辞儀をされた。麦わら帽子をちよつと外して礼をする若者や、はにかみながら手を振る若い娘や、鍬を肩にかついだ中年の男や……たくさんの人々が光の精霊ラミカの見える方角へ、擦れ違いざまに登っていった。

「なあ、センル。あれって……」

「今はまだ何も言うな」と、センルは疲れた声音でシンクノアに言った。

「言いたいことがあれば、夜明けまで待て。下手なことを言うとその言霊に引かれて邪霊どもがやって来るとも限らんから」

<月と牝牛亭>では、まだ一階の酒場に客が数人残っており、店の主人も起きていた。三人は、一体この人たちが幽霊でないなどという保証はどこにあるのだろう……といった思いで、部屋に戻ると、夜が完全に明けきるのを待ってから、角燈を粉々にした。

「センルってさ、闇の魔導士とか相手にする時って、あんなのとはつかり戦ってきたわけ？」

「ああ、まあな」と、センルは眉間のあたりを手指でもみながら答えた。どうにも眠くて仕方がない。「ああいう、恨みやつらみがひねくれ曲がって増大したタイプの霊っていうのは、どうにも厄介だな。大抵はそこにつけこまれて闇の魔導士連中に利用されるっていうパターンが多い……が、まあ、片付けても片付けても似たようなケースってのは次から次に現われるから、流石に九年もやればもう十分だろうって話だな」

「うげっ！！九年か」。俺、あんな連中、次にもう一度会うのもこ

めんだぜ」

「でももし、あそこに捕われていた人々の魂が救われたのなら……
わたしはそれだけでも、良かったような気がするんです」

そう言っつて、ミュシアは角燈が朝日にきらめく先の、丘の上にある石造りの城館が元あった場所を眺めやった。今はそこには、土台を残した以外、その上の建物は何もなくなってている。三人は、ほとんど夕暮れか宵の口かという逢魔ヶ時にシロンの町へやって来たので、丘の上にある城館のことなど、きちんと見てはいなかったのだ。

なんにしても、こうした形で三人は次から次へ事件に巻き込まれることとなり、何もシンクノアだけが疫病神として災いと呼ばれるばかりではないらしいということが、だんだんにはつきりしてきた。

むしろミュシアが善意として良いことをしようとした結果として、何かのトラブルを招くといったケースも多く、結局王都カーデイルへは、ルドミラの町を出発して三か月が過ぎた第12（アザル）の月にようやく到着したと、そうだった次第だったわけである。

第4章 城下町カーディル

城下町カーディルの目抜き通りには、鍛冶屋や武器防具屋、食糧雑貨店や金物屋、仕立屋といったスレート葺きの店々が並び、これまでミュシアたちが通ってきたどこの町や村よりも、清潔で整った品物が手に入った。

城下町に到着すると、セシルは<ヤースヤナ・ホテル>というそれまで三人が宿泊したことのないような立派な旅籠に、一泊30レールもはたいて宿泊することにしていた。というより、これまでも時々王都カーディルへやって来た際には、ここか<アールスナヤ・ホテル>のいずれかにしか、セシルは泊まったことがない。

どちらのホテルにも、町の大通りを見下ろせるバルコニーがついており、室内の装飾のほうも貴族の別邸かと思われるほど、家具や調度品が一流のものでしつらえられている。こうした城下町の一流ホテルでは、金さえ支払えばプライベートが守られるだけでなく、町の警備隊の連中が正式な書面でも手にして乗りこんで来ない限りは、経営主は簡単に客を売り渡すようなことさえしないのである。

「あのさあ、セシル……」

磨き上げられた大理石の床に、透かし彫りの円柱が並ぶホテルの玄関ホールで、シンクノアは流石に面食らったような顔をしていた。「俺、ここに来るまで、あんたに1ピムも支払った記憶がねーのは確かだけど、これは流石にやりすぎっていう気がしてきた。なんつか、俺にはもっと場末の宿のほうがお似合って気がする……セシルがここに泊まる必要があるってんなら、ルークとあんたのふたりだけで泊まれよ。俺はもっと他のところを探すから」

「そんなっ！そんなの絶対にいけません、シンクノア。だったらばくもシンクと一緒に同じ宿屋に泊まりますからっ」

「ほほう」と、セシルは腕組みしたまま、いかにも機嫌悪そうに言った。「これまでルークとシンクノアが財布を痛めてないという

ことは、それは言い換えれば私に借金があると言ってもいいわけだよな？ だったら、『金を借りた者は金を貸した者の奴隷になる』という言葉どおり、ここもまた私の言うとおりに従ってもらおうか」

シンクノアとルークは、セシルがイライラしている気配を察し、それきり黙りこんだ。セシルは磨き上げられた櫛の一枚板のカウンター越しに、制服を着た従業員と話をし、前金として結構な額の金を手渡すと　金と引き換えに部屋の鍵を受けとっていた。

「三階の、<ロダールの間>の鍵でございます。それでは、ごゆっくりお寛ぎくださいませ」

セシルとしては、本当は四階にある<ブリリンクの間>に宿泊したかったのだが、そちらにはどうやら先客がいて埋まっているらしい。王城と城下町から僅か3エリオンも離れていない場所に、聖五大陸最高峰と言われる王立魔術院があるせいかどうか、城下町では最上級のをブリリンク、二番目のものはロダール、三番目のものはマキルといったように呼び習わす風習があるのだ。

「それにしても、なんか悪い感じがするなあ。フーかき、俺が聞くのもなんだけど、実際セシルおじいちゃんってお金いくら持ってるの？」

「人に物を聞く時に、その相手をじじい呼ばわりするな」

セシルは、部屋まで荷物を運んでくれたポーターの少年に、5レールほど金を手渡した。こうしておけば、自分にとって何か欲しい情報があった場合　時として彼が役に立つことを話してくれるかもしれないからだ。また逆に、彼が口も軽く「今ヤースヤナ・ホテルの三階には、蒼の魔導士と赤い瞳のマゴクとルシアス神殿の神官がいる」などと、誰かにしゃべることはないだろう。

「私の正式な職業は一応、ロンディーガ王国の永久顧問宮廷魔導士ということになっている。つまり、金なぞ腐るほど持っているというわけだな。とはいえ、あとで城下町にある銀行で、今後のことも考えて少し金を下ろしておく必要はあるかもしれない」

「ひよっえ〜!!」と、シンクノアがどこか白々く驚いた振りをす

る。「まあ、ただもんじゃあないだろうとは思ってたけど……でもさあ、永久顧問魔導士先生がこんな長らくお国を留守にしちまっていいのか？」

室内には大理石の暖炉やテーブルがあり、それに寄木細工で作られた家具調度品があちこちに配されていた。部屋の隅には、水瓶を掲げ持つ女性の彫像が置かれ、暖炉の上やテーブルの上には高価な花瓶や、繊細な飾りのある陶器の置物などがある。また、部屋の壁にはすべてロイヤル・ブルーの石が使われていた。

「まあ、これも仕事の一貫だな」と、セシルは絹張りのソファに腰かけながら、今回に限って<ロダールの間>へ泊まらなければならなくなつた皮肉を思つた。「金のほうなら、外交機密費のような形で、請求すればロンディーガの王室がいくらでも出してくれるだろうよ。見方を変えるとすれば、おまえとルークはもしかしたら「金を使って私に利用されている」とでも思ったほうがいいのかもしれない。そんなにただ泊まりやらただ食いやらをするのに、良心が痛むのであればな」

「確かになあ」

銀の鉢に盛られた林檎をひとつ手にとると、それを齧りながらシンクノアは笑つた。

「俺が今まで一緒にいて思うに、あんたのやり方ってのはすべてがすんばらしく合理的だったからな。そういうことでもなければここまで協力したりはすまい……みたいには、ちらつと思わなくもなかったよ。ま、もちろんセシルはそれだけじゃないってのがいいところなんだけど。ルーク、この林檎、お目々が飛び出るほどすんばらしくデリシヤスだぜ。他にもぶどうとかオレンジもあるから、食わねえか？」

「あ、はい……」

ルークは、バルコニーに続く窓から見える景色に、少しの間ぼんやりとしていた。空は薄曇りで、この分だと夕方か夜にでも雨になりそうな気配だったが、城下町カーデイルは七十万人都市といわ

れるだけあって、家屋の密集している姿がルシア神殿の丘から見下ろす聖都の様子に少し似ていたのだ。

「なんにしても私は、明日からその仕事に専心する予定だ。王立図書館は言うまでもなく王立魔術院のほうに付属してるんでな。そちらと話を通したら、ルークとおまえも図書館で好きなだけ調べものをするといい……とりあえず明日、私はここを留守にする。その間はこの金で」と、セシルはテーブルの上にクラウン金貨を数枚置いた。「城下町で適当に遊んでくれ。言うまでもないことだがシンクノア、ミュシアから絶対目を離すなよ。もし仮に私が話を通したにも関わらず 当のルシア神殿の巫女さまが行方不明となったら、私がこれからしようとすることは無駄に終わるかもしれないでな」

「あのう……王立図書館で調べ物をするのは、そんなに大変なことなんでしょうか？わたし、他の一般市民の方も普通に本を閲覧できるって聞いていたのですけど」

シンクノアから黄緑色の葡萄の房を渡され、ミュシアはそれを一粒食べてみた。彼女にもそれは、お目々が飛び出しそうなほどデリシヤスに感じられた。これまでの三か月間、これほど美味しいものは食べたことがないというくらい、とても甘い。

「まあ、おまえやシンクノアが欲しいと思っっている情報は、そんなところには眠っていないだろうよ。平民たちが閲覧できるのは、聖書や信仰について書かれた本とか、神話や伝記、昔話といった類のものが多いし、魔導書については魔術院の生徒か国に認定された魔導士以外読めない仕組みになっている。私にしてもカルディナル王国の最高魔導士 ブリンクのエリメレクが、話のわからんような男だった場合、すぐに引き上げて来ざるをえないだろう」

「あ、そーいや、セシルのことを自分が死んでからも魔術院に入れんかっていう遺言を残した奴がいるんだっけ？」

「そいつが他でもない、私を九年も闇魔導士狩りにこき使っていた男だよ」

今思いだしても腹が立つ、というように、セシルは干しいちじくに齧りついた。

「たぶん、私に次のプリンクになりたいという野心があるとでも思っていたのだろう……カルディナル王国の第五十四代プリンクのアビメレクっていうのが、そいつの名前だ。その遺言が現在も有効であるかどうかは知らんが、まあお国の大事とあつては、そうも言うてはおられまい」

「お国の大事って？」

シンクノアがどこか能天気な、蜜入り林檎に齧りつきながら聞いた。

「……おまえ、つい半年ほど前に聖都ルシアスがどうなったのか、もう忘れたのか？大体おまえ自身も幼馴染みが飛空艇とやらにさらわれたから、その情報が欲しいのだろう？つまり、この半年の間、奴らはなりを潜めているみたいに、あれからなんの動きも見せていない。だが、その気になれば他の国を攻め落とすつてことは連中にとつて実に容易いことだ。そこで、奴らが攻めて来た際にどうやって国を守るのか　これはおそらく、聖五王国すべてにとつて共通した軍事問題といえるだろう。そして私には次に奴らがやって来た時にどうすべきかについて、秘策とも呼ぶべき手がある。そのことを思えば、能無しのアビメレクがどんな遺言を残していようと、現カルディナル王国のプリンクは、私の前に扉を閉ざすような愚かな真似はすまいという、これはそういう話だ」

へいへい、そうでしたね、すみませんねといった態度のシンクノアとは逆に、ミュシアの顔は蒼白だった。あれから半年……そんなに経つのかという思いとともに、おめおめと生き延びた以外、いまだ自分が何も為していないような気がして　彼女は胸が苦しくなるものを感じていた。

「セシルさん、その秘策つて……もし聖都ルシアスにあの竜に乗った蛮族たちがやって来た時、それを使えば聖都を守れたというような方法なんでしょうか？」

「いや、それは無理だったろう」セシルは、ミュシアが手を震わせ
てさえいるのを見て、彼女の心中を慮った。「前もってそうした連
中が、どのくらいの規模で襲ってくるかがわかっていない限りはな
それに、かなりのところ危険な術でもあるから、プリンクのエリメ
レクに話したところで、彼でさえも呆れるかもしれん。なんにして
も私は、百万デナリオンの報奨金欲しさでなく、そのことは彼に相
談してみるつもりだ。もし仮にわたしが宮廷魔導士を勤めるロンデ
イーガに奴らが攻めこんで来た場合　カルディナル王国にも手を
貸してもらおうということになるだろうからな。そして、その逆もま
たあるというわけだ」

「じゃあ、ミッテルレガントと俺っちの故郷イツファロはどうすん
の？」

相も変わらず、まるで人事のようにシンクノアが聞いた。

「……向こうは向こうで、それなりに動いているだろうよ。イツフ
アロ王国があればこそ、ルシラス王国はこれまで北の守りに関して
は何も思い煩うことはなかった。イツファロの北には白竜山脈とい
う天然の要塞があつて、ユーティン帝国もそこを越えてはイツファ
ロに攻めてこれられない。そのかわり、雪に覆われた北の貧しい国に、
ルシラス王国は何百年にも渡つて必要なだけの援助を送つてきたと
いうわけだ。ロンディーガとミッテルレガントは仲が悪いが、これ
は両者の国境の問題だな。お互いに歴史の長きに渡つてそこを広げ
ようとしてきた経緯があるから……なんにしても、私がロンディー
ガ王国の宮廷魔導士になつてから、奴らに１キュートス（１キュ
ートスは約１インチ）たりとも、国境をずらさせてやったことはない
なんにしても、栄光ある聖都ルシラスが陥落したということとは
聖五王国中もつとも大きな軍事力を誇るミッテルレガントが、ルシ
アス王国に攻め込む言質を得たとも、言えないことはないわけだ。
あるいは、このミッテルレガントにもし、ルシア神殿の姫巫女さま
がおられたとしたらどうなる？ 奴らは我々こそが聖五王国すべてを
治めるに相応しいと主張しないと限らんだろう。シンクノア、お

まえには、自分がそういうお方を守っているのだという自覚を、私のいない間は特に持つてもらわないとな」

「へいへい。わかつとりやすとも！」

そう言つてシンクノアは、ソファに寝転んだまま、ぼりぼりと尻をかいている。だが、セシルにはよくわかつていた。彼も自分と同じく……ある意味ではこの事態を楽しんでいるのだ、ということが。「で、でも、危険な方法つて……まさか、セシルさんの命が危なくなつたりすることはないんでしょう？」

彼女がセシルに対してよく見せる、気遣わしげな顔の表情を見てセシルはまた、心の中で笑いたくなつた。ミュシアの頭にあるのは結局、自分のことより他人のことなのだ。自分がカルディナル王国へ売られたり、あるいはうまく口車に乗せられ、ロンディーガで姫巫女として立てられるかもしれないなどは、彼女の頭には思ひ浮かびもしないのだろう。

つまり、そのくらい自分は信頼されているのだと思つ反面……：：：ミュシアのその純粹さが仇になりはしないかと、セシルはかなりのところ心配になる。彼女に出会つて最初に用心棒を名乗りでたのが、自分やシンクノアのような人間だったから良かったようなものも、これが誰か他の人間だったらと、セシルはそのことを思うと、今もなんとも言えない複雑な気持ちになる。

だから、その日の夜は、続き部屋にある豪華な寝室にミュシアが眠ろうという時、内側からでなければ開かないドアの鍵を、あえてセシルは彼女の手に渡していた。

「あの、べつにわたし、こんなものがなくても……おふたりのことを信頼していますし、それにわたしだけがあんな、天蓋付きのベッドで寝るっていうのも、なんだか心苦しい気がして。せめて、交替でベッドに横になるとか、なんだつたらわたしがこちらのソファが炉辺で寝て、シンクノアとセシルさんが向こうのベッドをお使いになるとか……」

「じょーだんっ！あんなお姫さまベッドでセシルと俺が寝てどー

なるんだよ。あつたく、気色悪イな!!」

蕁麻疹がでたというようにシンクノアがぼりぼりと背中をかく。セシルとしても同じ思いだったが、ここで大切なのはミュシアがあくまで真剣だという、そのことだったかもしれない。

「とにかく、あんたは少し人が好すぎるからな。普段からこのくらいの用心をしておくに越したことはない。いいか？聖五王国の中の平民も、娘が十五、六になった時には、父親が「男を見たらオカミと思え」と教えるんだ。シンクノアは変わり者のマゴクだし、私は容姿はともかく年齢のほうは三百歳にもなるから、それなりに分別もある……が、他の人間のことはそう簡単に信用するな。もつと言うなら、本当は私のこともシンクノアのことも、もしかしたら裏切るかもしれないくらいに思っておけ。私の言っている意味、わかるか？」

「えつと……」

手渡された鍵を見つめ、ミュシアはよくわからないというように、少しの間首を傾げていた。

結局、見かねたシンクノアが「俺はともかく、どっかの誰かさんは開錠呪文を使えば、鍵なんかかかっても意味ねーよな！」と茶々を入れることになる。

「まったく、おまえは……」と言いかけ、セシルは頭をかいた。たぶん、こうしたことは、男の自分が噛んで含めるように言い聞かせるより、誰か適当な女性に助言してもらったほうがいいことなのかもしれない。

「私はおまえに、自分の力の及ぶ範囲で出来る限りのことをしてやるし、シンクノアもまた同程度のことをおまえにしてやるだろう。だが、場合によっては何かの事情でミュシア、おまえはひとりになるっていうこともありうるんだ。そういう時に見知らぬ他人が、滅多にいない三百歳のハーフェルフや、変人マゴクのように親切にしてくれるとは限らないってことを、私は言いたってということさ。むしろ、表面的には親切そうな振りをして、あとでその取り分

を要求するというパターンのほうが圧倒的に多いと見ていい。そのことを忘れるなよ。いいか？」

「……はい」

ミュシアが素直にそう頷き、それではおやすみなさい、と言って寝室のほうへ行くと、最後にとても静かな音で、かちやり、と鍵の回る音が聞こえた。まるで、わざわざこんなことをするなんて、むしろ失礼じゃないかしら、と氣遣うように。

「セシル先生、今日もごっそーさんでした!!」

ソファの腕木のところに枕を置き、上等な肌触りの毛布を上にかけると、シンクノアはあらためてセシルにそう礼を言った。

「うまかったよな。あの料亭の豚の丸焼きといい、ジャガイモの団子といい……牡蠣のスープなんて俺、生まれて初めて食ったぜ。デザートのパイもうんまかったしさ。ほんと、蒼の魔導士さまさまってどうか。俺が疫病神なら、あんたはあの子にとってその反対のなんかなんだらうな、うん」

「別に、今さら白々しく私をおだてる必要はない」

セシルもまた、シンクノアと同じように、向かい合わせになったソファの一方でごろりと横になった。

「それよりも明日は……そうだな。出来ればあの子を年相応の普通の子に戻してやって欲しい。このくらいの規模の町になると、ルシア神殿の神官も青い絹の服を着た娘も、それがどっちであれ、大して気に留める人間はいないだろうからな。大体ミュシアが今着ている服も相当すりきれているし、明日は仕立屋にでもいって、適当な服を見繕ってもらってくるといい。シンクノア、貴様も靴くらい新調してこい。じゃないと公衆衛生上、こっちがおおいに迷惑なんだな」

「はい。セシル先生、わかりました〜!!」

ビシッとおどけたように敬礼する振りをしつつ、シンクノアはテーブルを隔てた向こう側にいる、蒼の魔導士のほうを振り向いた。

「ところでさ、セシルって何かっちゃんあすぐ、自分は三百歳自分は

三百歳とか言ってるけど……あんたのあの子に対する気持ちって、結局なんなんだ？娘のことを思ってるよーでもあるし、あるいは孫娘のことを慮ってるよーでもあり……ま、少なくともミュシアはあんなのことをセシルおじさんとも思ってたなければ、セシルおじいちゃんとも思ってたないわけさ。これは仮にっていう仮定の話ではあるんだけど　たとえば、ロンディーガの今の王様があなたに、『姫巫女殿がご存命しているだど！？今すぐ私の元へ連れてこい』なんつつて鼻息荒くしたとしたら、セシルは永久顧問宮廷なんかとして、どうするんだ？」

「くだらん」と、一言呟き、セシルはソファから起き上がった。そして、ティーポットに残るすっきり冷めた紅茶をカップに注いで飲んだ。「私はもともと聖五大陸のどこの国にも肩入れするつもりはない。ロンディーガ王国はたまたま、私がカーディル王立魔術院を破門になった時、宮廷魔導士として受け入れてくれた国だったという、それだけだ。その頃は確かに、王国に対する忠誠心のようなものはかなりあったろう。だがもう、それから約二百年にもなる……その間、王となる者には賢王がたまにいるかと思えば、寵臣しかそばに近づけぬ愚王もいた。そういう意味で私は、ロンディーガという国には貸しもなければ借りもないだろうと考えている。幸いなことに、今のシグムント王は文武両道タイプのそう欲の深くないお方なんでな。彼は間違っても、これを好機と聖五王国のすべての覇権を握ろうなどは考えまい。なんにせよ、今の私にとって大切なのは　少なくともくロンディーガは潔白である>ということがわかっていてという点だ。カルディナル王国にしてもほぼ間違いなくそうだろう。いや、むしろそうでなければ、例の飛空艇を追い落とす算段を考えついた者には百万デナリオンだすなどという触れを、王が出すはずがないのだからな」

「でももしそれが、裏の裏をかいた行為で……たとえば、王はそういう考えであったとしても、国の最高魔導士であるブリंकが違う考えを持ってたらどうするんだ？セシルのことを破門にならざるを

得ないようにしたアビメレクっていう奴が、それでもプリンクの座に着いたって聞いて、俺思ったぜ。腹の黒い男でもうまく立ち回れば、そういう白い地位に着けるものなんだなって」

「おまえは時々、本当に面白いことを言うな」

セシルは紅茶を最後の一滴まで飲み干すと、もう一度ソファへ横になり、それから毛布と自分のローブを上からかけた。

「まあ、言ってみれば私は、そのあたりのことを明日、探りにいつてくるというわけなのさ」

そう言っ て目を閉じた魔導士の顔に、微かな愉悦の笑みが光るのを見て、シンクノアもまた安心して眠りに落ちることが出来た。自分が裏切ることもありうる、という一言を聞いて、ミュシアとは違い微かな疑いの心がシンクノアには残っていたのだが、これですっかりそれが解消された。

「俺さ、あんたのこと、単なる金蔓っていう以上に大好きだっていうの、知ってたか？」

シンクノアが最後にそう言っ ても、セシルは寝た振りをして聞き流していた。

やがて、雨が外の窓を叩くようになっていたが シンクノアもセシルもミュシアも、まるでそれが子守唄か何かのように、耳に心地良いものとして聞きながら眠りに落ちていったのだった。

夜半に降った雨は、翌日には上がり、朝には気持ち良いくらいの快晴となった。

とはいえ、そろそろ雨が雪に変わってもおかしくない季節でもあり、冷えこみのほうは大分厳しくなりつつあったのだが とりあえずセシルとしては、今年の冬はここ王都カーディルで過ごすつもりであった。

もっとも、カルディナル王国の現プリンクであるエリメレクがアビメレクに並ぶ阿呆であったとすれば、ミュシアを連れて南のロン

デীগヘ下ることになるかもわからなかった。だが、可能性としてそれは低いだらうとセシルは見ていた。

噂に聞く限りにおいて、エリメレクの評判は高く優れたものだったし、それは王が例の飛空艇を追い落とす算段を考えついたものには、百万デナリオン与えるという触れを出したということにも、よく現われている……おそらくこれがアビメレクであれば、自分のプリンクとしての面子を丸潰しにしたとして、烈火の如く怒り狂ったに違いない。

つまり、エリメレクはこのことについて 自分にも手立てがな
いということをおそらくはつきり王に申し上げたのだらう。カー
デイルの王都と城下町、それに王立魔術院とは、常時強い魔法を帯
びた結界によって守られているとはいえ……ここを飛空艇に囲まれ
た場合、飛空艇はともかくとしても、結界は竜の翼を阻むというこ
とは出来ないのである。

飛空艇というのが何か魔法の力を動力源にして動いているとしたら、結界を破るまでは進入して来れないにしても……そこから数頭の竜が放たれてしまえば、聖都ルシアスの二の舞になるのに、時間は一日もかかるまいと、セシルにはそう思われてならない。

第十二の月も終わりに近いその日、セシルは貸し馬車屋で白い馬を一頭借りると、石畳の町の大通りを抜け、海岸沿いにある森を抜けた先の王城を見上げながら そちらへ続く道をではなく、途中にある分かれ道を左にとった。

今から二百年以上も昔、この付近へは一体何度足を運んだか知れないくらいだったが、魔術院から破門に近い扱いを受けてからは、カーデイル王立魔術院へはほとんど数えるくらいしかやって来たことがない。

つまり、魔術院自体に用はないのだが、そこに付属している王立図書館 セシルはそちらへ用のあることが、時としてあったということである。ミュシアも言っていたとおり、図書館へは平民たちにも来館が許されているし、一度一階の図書室内へ入りこむことさ

え出来れば、セシルには後のことはどうにでもなった。

とはいえ、セシルがそのような形で王立図書館へ来るようになったのは、アビメレクの死後、十数年が過ぎてさらにのちのことではある。

そもそも何故、アビメレクという国の最高魔導士にまで上りつめたほどの男がセシルのことを毛嫌いしていたかという点、そのことには当然、理由がある。彼は王立魔導士学院における、セシルより四学年上の先輩格にあたる学生であった。

セシルは学院内における初等部や中等部を経ることなく、高等部から入学を許されたという、非常に稀な生徒であったといえる。しかもその後、すぐに高等部を飛び級して大学へ進学することになり、アビメレクと同窓生になってしまったのだ。

アビメレクは幼い頃より魔術の才を認められた、華々しい秀才であり、その鼻先でいつも自分が到底叶わぬ天才魔導士が嫌でも活躍するのが目に入る。とても言えば、わかりやすかつただらうか。

大学院を卒業後、ふたりは闇の魔導士を狩る部隊に配属が決定されたのだが、これはブリंकになるのもっとも早い一種のエリートコースであると、周囲の人々には思われていたし、実際今もそうであつたらう。また、仮に自分自身がブリंकの座に就くことはなかったとしても……その時、同期であつた親しい誰かがその座に就いてくれさえすれば、カーディル王国における出世と将来の地位は約束されたも同然であつたといつてよい。

ところで、魔導士としての腕前のほうは叶わなかつたとしても、アビメレクにはセシルにないまったく別の種類の才能があつた。すなわち、鉢の中でうまくゴマをするという行為である。彼はこれによつてうまく立ち回り、闇の狩人と呼ばれる魔導士隊の部隊長の次の地位。すなわち、副隊長の地位を手に入れたのだ。

以来、セシルの元には特に厄介なエグい案件ばかりが回ってくるだけでなく、後続の者を育てるといった名目において、足手まといにしかならないような魔法使いばかり、押しつけられるということに

もなった。

当時より、セシルにはブリックになりたいと望むような野心はなかったが、おそらくそのことを仮にいくら力説したとしても、アビメレクには理解できなかつたに違いない。彼が死んだのちも、権力にものを言わせて、王立魔術院への自分の出入りを禁じたということとを、セシルはとても残念に思う……うまく言えないが、そこまでしたということはむしろ、彼の自分に対する一種のコンプレックスというのは、死ぬまで癒されなかつたのではないかという気がするからだ。

セシルが妖精界　エルフの住まう世界から、人間界へ来ることになったのは、彼が人間の年齢にして八十歳になった頃だった。いや、妖精界、またの名をティルナ・ノーグと呼ばれる国では、時間の流れ方が曖昧なので、それすらも本当はあやふやなのだ。とにかく、セシルは人間である自分の父親の没した年月日から推定して、そのように考え、自分を約三百歳であると計算しているのだが、なににしても、カーディル王立魔術院へセシルが入学したのは、十六〜十八歳くらいの頃だったといえただろうか。

セシルにとつては、魔法は使えて当たり前なものだった。何故とって、それまで日常的に使っていたエルフ語を使えば、火に「燃えよ！」と命じればそのとおりになり、水に「凍れ！」と命じれば真夏にも湖を凍らせることが出来たのだから。

ただ、セシルはどちらかというとむしろ、何故人間が普通に魔術というものが使えないのかということに、強い興味があつた。彼らは天の理と地の理に通じるたくさんの本を知識として詰めこみ、その上長つたらしい呪文を詠唱してからでなくては、魔法を使うという事が出来ないのである。

そこでセシルは、それらのことをすべて覚えこみ、エルフとしてだけでなく、人間が魔法を使うための道も修め　そうしてカーディル王立魔術院を最高の成績により卒業した。カーディル王立魔術院における成績はすべて得点制であつたため、その総合得点を破つ

た生徒が現われたという話を、今もセンルは耳にしていない……とはいえ、アビメレクにはわからなかったろう。センルもまた「ハーフェルフなのだから、出来て当たり前」というコンプレックスに、彼自身がいくら悩み苦しまねばならなかったか、などということとは、そもそも、センルにとってはそれまでいた人間界などより素晴らしく居心地のいい国である妖精界より、半分人間の血が混ざっているから、などという理不尽な理由によって追い出されねばならなかったこと、それが一番の不幸のはじまりであった。

センルの母親は樹の精霊ドライアドのひとりであり、ある時人間の若者と恋に落ちたのだという。これらの種族を超えた恋愛というのは禁忌とされているが、ハーフェルフという存在が何故そんなにも稀なのかについては、当然理由がある。ティルナ・ノーグに住む精霊たちはエルシオンと呼ばれる世界の天地が滅ぶまで、決して死ぬことはないのだ……だが、人間と恋をして子を宿らせた場合には、子を儲けた精霊は死を味わうことが運命づけられている。

ゆえに、センルは母の顔を知らず、母セシリアの妹であったセリエという樹木の精に育てられた。妖精界で育った、人間の時間に換算して約八十年もの年月、センルは不幸というものを知らず、まったく幸福であった。にも関わらず、何故その時になつて人間界へ身を墮とされることになったのか、本当の理由については、センルは今もよくわかっていない気がする。

ハーフェルフの子は、人間として成人したとっていい年齢に達するまでは、ティルナ・ノーグへの滞在を許されるが、それ以降は人間界へ落とされるといふ神によって定められたく掟があるのだという。

そのことを知った時、センルはどれほどそのく掟の神を恨んだことだろう……セリエが当時のカーディル王立魔術院の院長の夢に現われ、そのハーフェルフの子を預かって欲しいと頼んだ時、彼女は夢でのお告げのとおり、学院の裏庭にある檜の樹の根元で、センルの姿を発見した。

彼女は名前をナディアといい、以来センルの人間界における母親にも近い存在となった。浅葱色の髪に、水色の深い瞳をしたナディアは、その生涯を魔法教育に捧げたといつていい人物で、家族もなければ子もなく、また結婚した経験も持たない女性だった。

ナディアはセンルのことを鼻屑することなく厳しく育て上げ、結局のところ闇の魔導士狩りのエグい汚れ仕事をセンルが何故九年も続けたかといえは、それは一重に、血の繋がらぬ義理の母を喜ばせたかったからに他ならない。

実際センルは、もしナディアの望みが自分がカルディナル王国の引いては聖五王国の頂点に立つともいえるブリंकになることであつたとすれば、その地位に就いても良いとすら思っていた一時期があつた。だが、ナディアはとても賢い女性であつたので、「私はおまを愛しているから言うんだよ。ブリंकになどなりなさるな。あの地位は自由なおまへの心を縛ってズタズタにし、苦しめるだけだろうからね」と……。

だが、人間の女性としてセンルが一番愛したともいえるナディアが亡くなると、センルは闇の狩人という部隊にしがみついている理由を失つたのである。以来、聖五王国をあちこち旅し、そのことに飽きた頃、センルはロンディーガ王国の第五十七代目の王の妃である、リエラ王妃と恋に落ちた。

彼女は若くして、政略結婚によりミツテルレガント王国から年老いた王の元へ嫁がされることになった、薄幸な女性だった。本国で美姫と歌われただけあつて、第五十七代目の王が崩御すると、第五十八代目のトライゼル王が、彼女を妃にと求めたほどであつた。とはいえ、リエラ王妃はこのふたりのうち、どちらも本当の意味で愛しはしなかつた。彼女は王宮の中庭で出会つた容姿端麗なハーフェルフの若者と激しい恋に落ち、王の目を盗んで十数年にも渡り、愛人関係を持つていたのだから……。

だが、リエラ王妃は美しいだけでなく、気高い女性でもあつたので、センル自身は決して歳をとらぬのに、自分の容色だけが衰えて

いくのを嘆き 四十歳の誕生日を迎える前に、セシルとの関係をはっきり断つたのである。しかしながらそれと同時に、彼女はとても酷な約束をセシルにさせた。彼の命がある限り、自分の王子とその子孫とを陰日なたなく見守り続けて欲しいと言っているのである。

「王妃よ、百年年のことは誰にもわかりませぬ」と、セシルはその時リエラに対してそう告げた。「長い年月の間には、ロンディーガ王国にも賢い王とそうでない王とが誕生しましょう。ですがいずれにしても、王妃の子である王子と、その子孫の三代目までについては、必ずその約束を果たすとお約束しましょう」

そして今、三代目どころでなく、その後の行く末までも見守っているセシルがここにいるわけだが、リエラ王妃に対する愛が今もそうさせているのかといえ、セシルはそのように思うことは今ではほとんどない。

そもそも、リエラ王妃と激しい恋に落ちていた十数年の間さえ……彼女を真実本当に愛していたかと問われれば、それは二百年も昔のある一時期、そのようなこともあったという、それは幻か霞のように思われる幸せで苦しい記憶でしかセシルにはない。

そして、いつか真実本当に人を愛することが出来れば、自分の母親が命を捨ててまで自分を生んだ気持ちができるだろうかとセシルは想像していたが やはり、その理由についてはわからぬままだった。にも関わらず、人間の世界へやって来て二百二十数年も過ぎようかという今になって、セシルは突然濁っていた目が明るく開けたかのように、母セシリアの気持ちがわかりかけていたのである。

『セシル、あなたのお父さんはね、人間よりもわたしたち精霊に近いような、とても心の澄んだ美しい人だったの……だからセシルのお母さんは、彼と恋に落ちたのよ』

そうセリエに言われても、セシルにはやはりティルナ・ノーグのような素晴らしい世界を捨てて、死を選ぶような母の気持ちは理解できなかった。だが、『わたしたち精霊に近い、心の澄んだ美しい人間』というのがどういう人間なのか セシルには、ミュシアと

出会って初めてわかった気がしたのだ。

セルル自身はミュシアに対して、リエラ王妃に対するような激しい気持ちは持ち合わせがないが（この点は断言できる、と彼は思っている）、彼女のことをリエラ王妃とはまったく別の意味でも愛しいと感じるし、王妃のためならば命を捨ててもいいと思っていたのと同じ気持ちで、ミュシアのために出来る限りのことをしてやりたいように思うのだった。

（まあ、これをセルルおじさんのお節介というのか、セルルおじいちゃんの酔狂と呼ぶのかはわからないにしても）と、シンクノアが昨夜口にした言葉を思い出しつつ、セルルは糸杉に挟まれた森の小道を、馬に乗ってゆっくり歩いていった。

（わたしがこんなにも誰かひとりの人間に執着心を持てるのは、滅多にないことだからな。シンクノアという男も面白い奴だし、今暫くの間は楽しませてもらうとするか！）

セルルは馬の速度を上げて、湖のほとりの道を一気に駆けてゆくと、カーディル王立魔術院の門衛がふたり、槍を掲げている手前で立ち止まった。

「カルディナル王国のプリンクであらせられる、エリメレク殿は公邸におられるか？ ロンディーガ王国の永久顧問宮廷魔導士セルルがお目通り願いたく参ったと伝えられよ。もし、第五十四代目のプリンク、アビメレクの遺言とやらが今も生きているのだとしても

この火急の用をお聞きになられぬのであれば、カルディナル王国及びカーディル王立魔術院も地に落ちたものと、我が国でおおいに笑わせてもらうぞ！」

門衛の任に当たっている魔導士は、襟章から見て第十級、エディナ（茶）の魔導士であるらしかった。彼らは今自分たちが目の前にしているのが、まことに本人であるかどうかとあやしむかのように

馬上のセルルのことをぼんやり見上げている。

「あ、あのう……少々お待ちくださいませ」

セルルはこのふたりに対し、本に齧りついてばかりいるタイプの、

るくに魔術の使えぬ草食系タイプの魔導士であると、一目で見てとった。炎を操れるにしても、十級であればせいぜいが自分の家の台所で茶をわかせるといった程度だろう。

そのくらい、魔術の習得というのは難しく、才能にも差が出やすいもののだが、王立魔術院の門衛の仕事といえば賃金が良いだけでなく、名誉ある仕事だというのは確かであつたに違いない。

「あ、あのう。本当にあなたさまはあの……金銀の魔導士センルさまでいらっしゃるので？」

「いかにも。王立魔術院の床下には確か、真実と嘘を見抜く小人たちが住んでいたはず。なんだつたら彼らに、わたしを判定させるがいい。第一、魔導士の階級には金も銀もないはずだが、人が私をそう呼ぶのは髪の色がこれだからなのだよ。その目で見てわからぬか？」

まだ三十にもならぬであろう、若い門衛は、陽の光にずっと金色に輝いているように見えたセンルの髪がよく見ると金とも銀ともつかぬ色に光るのを見て、一瞬「あっ！」と言って息を飲んだ。

「た、確かにそのとおりでございます。ですが、二百年経つても本当にお変わりないとは、人間の私にはまったく、不思議な限りと申しますか、なんと言つたらいいやら……」

センルの目にはその時、彼が自分の心情としてはセンルのことをすぐにも通したいと思つてゐることがわかつた。とはいえ、下手なことをすればせつかくの職を失うか、あるいは罰として減俸されるであろうから、彼としても自分の相棒が戻ってくるのを待つしかなかつたのであろう。

やがて、冑を脱いで脇に抱えたもうひとりの門衛が、小走りに戻つてきた。彼の顔は笑顔を浮かべており、センルは『良い知らせを持つ者は鹿よりも速く駆ける』との言葉を思いだし、彼が吉報を持つてきたのだらうと信じて疑わなかつた。

「ど、どうぞ、お通りくださいませ、センルさま。エリメレクさまであれば、公邸内でご勤務中であらせられます。ですが、喜んで是

非お会いしたいとのことでございました。アビメレクさまのご遺言につきましては、そのう……二百年も昔の故人の寝言にはつきあいきれぬと、そう申されておいで……」

「さようか。どうやらエリメレク殿は、なかなか話のわかる御仁であらせられるようだな」

馬の手綱を引き、案内しようとする門衛のひとりに、セシルは「道ならばわかるので、案内はよい」と告げた。

「何しろ私は、二百年前にはここに住んでおったのだからな」

セシルはそう言い、馬に乗ったまま道を進んでいった。マロニエの並木道を通り過ぎると、初等部の学舎のほうが見えてくる。中等部も高等部も大学院のほうもみなそうなのだが、学舎の建物というのはすべて、魔法の切り石を積み上げて出来ている。一見そう見えないのだが、近づいてよく見ると、ダイヤモンドのような細かい鉱石の粒が凝縮しており、これが闇に属する魔法を弾くので、悪しきものはカーディル魔導士学院に足を踏み入れぬことさえ叶わぬと言われていた。

その淡い白色をした切り石は、日光を浴びたからといってそれがダイヤモンドの如き輝きを放つわけではなかったにせよ、セシルが最後に見た約二百年前の頃より、少しも色褪せていなければ汚れてもいないというのは確かであった。

セシルは初等部から中等部へと続く道はとらず、初等部の建物の裏にある林、白樺林に囲まれた池の前を通り、そこにかかっている太鼓橋を渡って魔導教員たちの寮がある先の建物を目指した。かつてセシルの義母にあたるナディアも暮らしていた代々の学長が住む屋敷の隣に、ブリंकが執務を行う公邸があったからである。

彼は言うなれば、聖五王国魔導士会の総理事ともいえる存在であり、そこで普段は決済すべき書類に目を通し、それ以外の時間は瞑想しているか、寸暇を惜しんでさらなる魔導の探求に励んでいると信じられている。また、宮廷魔導士として王の顧問を勤めたり、また王府の仕事を司る役人たちの政治的な相談役としても忙しい人物

であった。おそらくこのうち、前者の比重が一割か二割としたら、後者の比重のほうが八割か九割くらいの割合でブリンクの双肩にはのしかかってくるはずである。

そのような人物の公邸が何故王府にあらず、王立魔術院の学長の屋敷の隣にあるのかといえば、それだけ魔術院と聖五王国魔導界の最高権力者とは結びつきが深いからだと言えただろう。それもそのはずで、カルディナル王国の後のブリンクは、絶対的にいっていいほど、このカーディル王立魔術院の卒業生なのである。

また、一般には面立って知られていない闇の魔導士狩りの他にも魔術院の優秀な卒業生たちは、ある時は問者として聖五王国それぞれに、またそれ以外の国々にも抜かりなく放たれている。そうしたことをすべてをまとめ上げるのに、ここカーディル魔術院の敷地内はどうってつけの場所はなかったと言えたに違いない。

なににせよ、この時セシルは、水の精霊ウンディーネの住む湖の河畔にある、公邸というよりはブリンク自身の私邸といっても差し支えない建物の前で馬を下りると、彼を好きなように庭で遊ばせておくことにした。

魔術院の生徒たちが初等部か中等部で習う魔法に、動物と話をすることの出来るものがあるが、セシルにはエルフとして生来そのような性質が備わっていたので、この貸し馬車屋で借りた白馬もまた、セシルが指笛を吹けばすぐ彼の元まで戻ってくるはずであった。

あら、セシリアとセリエの息子のセシル。随分久しぶりに戻って来たのに、わたしには挨拶もないのかしら？

湖の中から、上半身裸の、透明な水で出来た女性が顔をだし、そう彼に話しかけた。魔術院で何かつらいことがあった時、ウンディーネには随分慰めてもらった記憶がある。その他、マロニエの樹の精にも白樺の樹の精にも、校庭に生える樹々の一本一本に……そういう意味ではここは、魔法の宿る力の強い、本当に特別な土地であるとセシルは感じる。他のどんな場所であれ、精霊というのは必ずその地に根づいて生きられるとは限らないからだ。

君は二百年経った今も、相も変わらず美しいな」と、セシルはエルフ語で話しかけた。それと、最後に会ってから二百年も経つのに、それを久しぶりで片付けてくれるウンディーネのことが、私は好きだ。何故と云って、人間が相手ではこうはいかないからね

そりゃそうでしょうよ　ウンディーネが鈴を転がしたように笑うと、大気の精が共鳴したように、快く震えた。ここの湖を潜つたら、そこはティルナ・ノーグと繋がってるんですもの。向こうへ行ってセリエに会ったらこう伝えておかなくちゃね。「久しぶり」にあなたの息子のセシルに会ったってね……あら、ブリンク大先生が公邸から出ていらつしやったわ

ウンディーネの言葉に、セシルが後ろを振り返ると、そこには鉄灰色の長い髭を蓄えた、灰色の厳しい眼差しをした鬚髯たる老人が立っていた。彼の着ている白いローブは純白で、何かの魔法の力によって磨かれているように微かに眩しかった。

初めまして、セシル殿　と、エリメルクもまた、エルフ語でそう言った。あなたのお噂はかねがね、色々と聞いておりますぞ。そして間近にこうして相まみえた幸運を、精霊たちに感謝しなくてはなりませんまいな。特にそちらの美しいウンディーネに

まっ、ブリンク大先生つたら、お上手なのね

そう云って、ウンディーネは再び湖の中に静かに姿を消した

彼女には、セシルとエリメルクの間に何か大切な話があるらしい、とわかっていたのである。

「さて、と。むさくるしい政務室などでなしに……わたしの妻の学長の住む屋敷へ参りませぬか？　かつて、あなたの義理の母上であった、ナディア殿とあなたが暮らしていた部屋ですよ。お懐かしがるうと思うのですが、おそらくあなたがお暮らしになっていた頃も今も、そう大して変わつとりやせんのではないかと思いますぞ」

「ええ、出来れば是非」

セシルは、ブリンクとなった者だけが持つことを許される光魔石の嵌まった彼のイチイの杖を見て、何故だかとても懐かしいような、

不思議な気持ちになった。アビメレクがブリンクになる先々代ということは、第五十二代目のブリンクということになるが、その彼がやはりよく学長であるナディアの屋敷へ来て、セシルに色々なことを話してくれたものだった。

そして今日の前にいるカルディナル王国最高位の魔導士は、その時のブリンクであつたエブヤタルにとてもよく似ており、セシルは何故だか時間の螺子が魔法で戻ってしまったかのような、不思議な錯覚を覚えてしまう。

学長の屋敷のほうも、まるで時間が止まったように何も変わつたところがなく、生えている草や花もまるですべて同じようだった。たとえば、今は花など咲いてなくて何も見えなくても、薔薇の花のためのトレリスだけは屋敷の前面を飾るように残っていたり、ナディアがお気に入りだつた藤棚の下には、変わらずにベンチが置かれている……屋敷の角には毎年カノコソウが生えるし、屋敷自体がびっしりと一面蔭に覆われているところも、何も変わっていなかった。

「毎年この屋敷は、秋になると鮮やかな紅葉のドレスを身に纏うのですよ」

エリメレクはまるで、無論ご存知でしょうな、とでも言うように、しきりに鉄灰色の顎鬚をすごいていた。

「まあ、なんにしても自分のご自宅と思つて上つてくだされ。何しろあなたさまは魔術の才覚ということに関しては、第五十四代目のブリンクに選ばれていて当然の方だったので、そうなればわたしなど、今も闇の魔導士狩りをして東奔西走しておつたことでしょうか」

「いえ、ご存知かどうかはわかりませんが」と、セシルは遠くにニシキギの赤が燃えるのを眺め、満足の溜息を洩らした。あまりに何もかもが変わっていないので、二百年もの時が過ぎたなどとは俄かに信じ難いにしても……エリメレクは少なくとも自分より、二百三十歳は年下なのだ。そのことを忘れず、年代的なことをよく考えて

話をしなくてはならない。「私の義理の母のナディアも、当時のプリンクのエブヤタルも、私がプリンクになることには反対していません。私自身も結局、権力的なことにはまるで興味がありませんでしたし……何より、闇の魔導士狩りが私の心に及ぼした影響力も大きかった。あんなものを三十年以上もやった後でプリンクになったアビメレクには、ある意味賞讃の念を覚えますよ。これは皮肉などではなく、本当に心からの賛辞です」

「あなたのおっしゃりたいことは、よくわかります」

エリメレクに室内へ案内されると、そこは香草の匂いで満ちていた。ナディアとセンルと一緒に暮らしていた頃とまったく同じように……居間は小ぢんまりとした作りだが、とても居心地がよく、室内のあちこちにアップルゼラニウムやレモンバーム、月桂樹や薄荷ミント、ローズマリーといった芳香性のある植物が配され、不思議な香りで満ちている。

エリメレクは奥の書斎や寝室、屋根裏なども見たければどうぞ、と薦めてくれたが、センルは首を振った。今は過去の思い出に耽っている時ではなく、自分はとても大切なことを話したにきたのだと、そう訴えかける眼差しでエリメレクのほうをしつかりと見返す。

エリメレクがちよつとした合図サインのよびなせを与えると、暖炉には炎が燃え、その上に飾られた騎士の剣の二振り、一瞬輝いたようであった。壁には他にもカルディナル王国の紋章の描かれた盾などがあり、センルはそれらの装飾品の位置もまるで変化ないのが、なんだか不思議な気がした。まさか、学長の部屋は代々模様替えしてはならぬ、という規則があるわけでもなからうと、そう思うのだが……。

「今、お茶をお淹れしますよ」と、台所ストーブに薪を入れ、そこに鉄瓶を置きながらエリメレクが言った。「お菓子はいつも、この戸棚の中に、と。おお、ありましたぞありませんぞ、レモンジェリーのタルトが。わたしはこれに目がなくてのう。こいつが全部なくなつたとわかつたら、妻のレティシアはさぞ怒るに違いないが、まあ、お客があつたといえはその怒りも忘れてくれるに違いない。なんに

しても、遠慮なくどうぞ」

そう言われ差し出されたレモンジェリーのタルトに手をつけ、繊細なレース模様のテーブルクロスの上に、紅茶が出される頃　セシルはすっかり人心地ついたような気持ちになって、エリメレクに本題について切り出した。

「私は、一応ロンディーガ王国で永久顧問宮廷魔導士という地位にある者です。ですがまあ、そのせいでロンディーガ王国のブリンクに任命される者は代々大変かもしれません。何故かというところ、お目付け役の小姑のような存在が、いつも先にいるわけですからね……そのようなわけで私は、今こうしているように王宮内へ籠もらず、外へ旅に出ていることのほうが多いのです。私は権勢といったものには興味ありませんし、反りの合わない王が即位したり、あるいは相性の悪いブリンクなどが王宮内で幅を利かせる時には　まあ、大体自分から身を引くことにしているのですよ。もちろん、必要とされる時にはいくらかの助言は与えるにしても……そして私は現在ロンディーガ王国に勤めるブリンクのアヒトフェルと、あまり相性がいいとは言えません。そこでまあ、また少しの間国を留守にしようかとも思ったのですが　そこへ、例の前代未聞の事件が持ち上がったわけですよ。正直いって私は今ごろ、アヒトフェルが泡を食って王宮内を右往左往しておればいいと思う……なんにしても、よやも聖都が陥落することがあるうちは、誰も夢にすら思ったことのない事態です。聖五王国のすべての国が、このことの解決策を求めているというのは、誰もが知るところなわけですが、私は仮にもロンディーガの宮廷魔導士として、国を守る責務は放棄したくないと思っています。そこで、まずはカルディナル王国と手を組むべく、今日ここへあなたにお会いしに来たというわけなのです」

「なるほど」と、エリメレクは、優しい中にも油断のない光を瞳の中に宿らせて、何度も頷いた。「よろしいでしょう。お互いに利害が一致しているのですから、それを妨げるものは特にこれといって何もありません……カルディナルの国王が例の飛空艇を追い落とす妙

案を思いついた者には百万デナリオンの報奨金を出すと言ったとおり　わたしにはそのような戦に勝てる策がひとつも思い浮かばなかったのですよ。かといって何もせずに手をこまねいているというわけにもいかず、そこで各国に放っていた間者の意見をまずは総合的にまとめるということにしました。まずは、聖都ルシアスが陥落するというまさにその時、その場に居合わせたマキルの位の魔導士は、襲ってきた連中がどんな奴らだったのか、また彼らが何を言い、何をしたのかを、直接わたしの目の前で説明しました。奴らの首領はく地の崖ての国>の王アシュランスと言い、飛空艇の大きさ、それに人がどの程度乗っていたのか、また襲ってきたという竜は全部で何頭いたのか……セシル殿、あなたもおそらくご存知でしょうが、巷間に流布している噂話には実に尾ひれのついたものが多くて、実際には奴らは実に少数精鋭で襲ってきたのですな。また、飛空艇といたったものも、人が口で噂しているほどには、馬鹿のように大きいということもない。いや、大きいには大きいのですが、まあこの点についてはあとでまた詳しく説明しましょう。やって来た飛空艇は全部で七隻、その一隻ずつに竜を一頭乗せていた。つまり、合計で七頭ですな。これを人は何十隻もの軍艦とか、何十頭もの竜といったように噂しています。また、飛空艇自体に何か魔法の力によって地上を攻撃できる装備があるのかどうかといったことは不明であり、これがどうやって空に浮かんでいるのかも、我々にはわかっていない……ですが、く地の崖ての国>などという、御伽の国のような名前を聞いて、何か思い当たることはありませんか、セシル殿？」

「く地の崖ての国>といえば、この地上の果てにあると言われている国ですよ。正確には、そこに天国へ通じる門があつて、人々の魂はそこから天へ昇つていくんですけどっけね」

「さよう」と言つて、模範解答を返した生徒を見るような目で、エリメレクは優しく笑つた。「普通はまあ、こう考えますね。我々は聖五王国という世界の中心の民であることを誇りに思つておるわけですが　北のイツファロ王国の白竜山脈を越えれば、そこにはユ

ーディン帝国の領地がありますし、ミツテルレガントの西にはナーガ・ラージャ王国との国境であるタハリール山脈、別名呪われ山脈とか血塗られ峠と呼ばれる場所があり（というのも、そこで両国が何度となく激しい戦闘を繰り返して来たからですが）、その向こうの国々を一般にわたしたちは世界の中心から外れた辺境王国と呼んでおるわけですね。ですがまあ、セシル殿には説明するまでもなく、辺境王国のほうが我々の住む聖五王国より、国の数も多いだけでなく、その領土もとても広いわけです。普通に考えたとしたらば

そのうちの国のひとつか同盟を結んだ数か国が、辺境から世界の中心と言われる聖都ルシアスを襲い、その栄光を貶めた……と考えるのがまともでしょうな。＜地の崖て国＞など、我々は聞いたこともないし、いや、聞いたことはあるにはあるのですが、それは遙かな昔の、伝承によってだけなのです。そこでこのわたし、能無しの役立たずであるこのプリנקメは、考えに考えましたぞ、セシル殿。

わたしが間者を放っているのは何も、聖五王国のみではありませんからな……そして辺境王国すべての間者の意見もまとめてみた結果として、おそらく奴らは確かに＜地の崖て国＞からやって来たのです。このことをわたしは、気が狂ったと思われぬために、まだ王には当然のことながら、信頼できる側近たちにさえ、洩らしてはおりませぬ。何故と行って、奴らが＜地の崖て国＞から我々を襲いにやって来るのだとして、それがなんだというのです？王が欲しいのは奴らを撃退せしめる方法なのですし、奴らが真に何者なのかについて、わたしは何も知り得ていないのですよ。なのに、そんなことを申し上げて一体何になりますか？そこでわたしはさらに熟考を重ね、古い文献という文献を調べ……もしや、意外に事実は単純なことなのではないかという可能性に気づきました。セシルさんは、今は失われた箱舟民族、ゼロラの民についてご存知ですか？」

「ええ、まあ、一応は。といっても、それだっただけの伝承ですがね……今から千年以上も昔の」

「さよう。聖竜ルシアスは、人間となってルーシュという名の妻を

娶りました。そうして人間たちは、竜の血脈を引く者とそうでない者とに分かれていったわけですが、竜の血が人間の間で濃かった黄金時代というのは、そう長く続かなかつたわけですな。竜の血が薄まるにつれて、人々は互いに醜い争いを繰り返すようになり、その度に神の怒りが地上に下つては、かつてはひとつだった大地が割れ、地震や大津波が起き、たくさんの人々が亡くなりました。ところが、それでも彼らの間で争いはやむことがなかった……そこで、神が<地の崖で>と呼んでいた場所へ追いやつていた暗黒竜が底知れぬところの穴からやつて来ると、この世界は暗黒に包まれました。さて、聖竜ルシアスはこの世にすでに存在していません。何故といって彼は人間の娘に恋をして、その永遠といえる寿命を自ら捨てたのですし、その代わりに自分の竜としての力を、七つの秘宝に託したからですよ。この世界にはまだ、心の正しい人間、正しいまっつき良心を持つ人間が、少ないながらも残っていました。また、そのことを神はご存知であつたので、彼らが協力しあい、聖竜ルシアスの力を持つて暗黒竜の力を彼ら自身の手で退けることを望んだのです。ですが、地上がますますひどい状況になる間、地上に残る心正しき人間たちを神は哀れに思つたのですな……地上にいたゼロラと呼ばれる民に神の知恵を授けて、彼らが救われるための箱舟を作らせ、多くの人をそこに乗せたのです。まあ、伝承によれば心の正しき人たちだけが救われたということになっていますが、どうやってそれを決めたのかといったことは、よくわかりません。なんにしても、選ばれた勇者たちが聖竜の力が封印された七つの秘宝を集めて、暗黒竜と戦わんとする間、心正しき人々は箱舟の中で聖竜の復活とその勝利を信じ祈り続けたと言われています。そして最後の最後、もはや希望もなく滅びるしかないと思われた人類は、ぎりぎりのところで救われたのですよ……聖竜が再び復活し、暗黒の竜を底知れぬ地の底へ追いやつたことによつて。

さて、どう思われますかな、セシル殿。これらを馬鹿馬鹿しい神話の時代の絵空事として片付けてしまうのか、それとも

「待ってください」と、センルは、どこか狂信者じみた瞳の色をエリメレクが浮かべている気がして、慌てたように彼を制止した。「その、私もエリメレク殿のお話には感じるところがありますが、私にもう少し現実的な人間なですよ。こんなことを言えば、笑われるかもしれないというのを承知の上で……私はあなたが話の出来そうな人物なら、こう聞こうと思っていましたのです。聖都ルシアスを襲った人間は、箱舟民族と呼ばれるゼロラの子孫か何かなのかもしれない、と。それで、ある日遺跡の中かどこかから、箱舟の建造の仕方を発掘したとしたらどうでしょうか？もつと言うならわたしは、カルディナル王国最高の魔導士であるブリンクしか閲覧の許されない禁書の中に、その秘密が隠されているかもしれないとすら思っていたのです。つまり、<箱舟の作り方はわかってるが、それを仮に建造したにしても、動かし方がわからない>といったようなことです。たとえば、重力魔法を使えば、ちよつとした小船程度なら、私にも宙に浮かせることは出来る。だが、竜をのせるほど積載量のあるものを長時間高い位置にまで自由自在に飛ばし続けるというのは不可能です。あるいは数人の魔導隊が一組になって、力を合わせてそのような行為を試みるにしても……やはり限界があると思うのです。少なくとも、この大陸を越え、海を越えていくなどということとは……」

そこまで考えた時、センルの頭の中で何かが閃いた。何より、エリメレクがたった少し前に話してくれた言葉が、彼にとつて答えを導くためのヒントとなり、今輪となつてぐるぐると回転をはじめていた。

（事実には意外に単純　ゼロラの民　神話・伝承　箱舟民族
聖都ルシアスの七つの秘宝……そして暗黒の竜……）

センルがガタリと椅子から立ち上がった時、そこにはエリメレクが先ほど彼に見せたのと同じ、ある種の狂信者の持つ奇妙な輝きが、その瞳の中には宿っていた。いや、センルの場合瞳の中だけでなく、顔全体にまでその影響力が広がっていたといえるだろうか。

「そうか！わかったぞ！！事実は意外に単純なのだ！！私は、人間界へ来て以来、あまりに合理的に考える癖がつきすぎてしまったのかもしれない　妖精界など存在しないと考える人間を、いかに愚かかと昔は嘲笑ったものだったのに……今度はわたし自身がその罠に捕われていたのだ。＜地の崖ての国＞など存在しない……いや、たった今エリメレク殿が言ったとおり、それは存在するのだ、おそらくは。さあ、錆びついた記憶を呼び起こせ。聖書に関する私の知識は、かなりあやしいものになっているが　ああ、そうだ。ホテルに戻り次第、ルークの手からそれを貸してもらえばいいのだ……そうとも。ロシアス王家が興つたのは今から一体千何百年、いや千百何十年前の昔だ？私はそもそもそれをいつの頃からかあやしむようにさえなっていた。本当は聖竜の血を引く末裔などすでに存在しないにも関わらず、時の権力者が適当に伝説をでっち上げた可能性があるのではないかとさえ、思うようになっていたのだ。ルーク

あの子はもしかしたら、私より賢いのかもしれぬ。何故といって本当に起きたかどうかわからぬ聖書の中の話すべて、一言一句変わらず信じているのだから。ゼロラ……そうか、ゼロラ。あいつらは、ゼロラの民の末裔なのだ。かつての世界の心正しき民である彼ら自身が、海を越えてこちらの世界とは関わりを持ちたくないと願ったから　神は彼らのその願いを聞き入れたのだと、聖書には書いてある。ああ、センルよ！おまえは神が本当にいるなどと、いまさらながらに告白するつもりではあるまいな……いや、魔導士というものは常に、仮定としての神を必要とするのだ。神が本当に存在するのか、実在するのかというのは、また別の話として……それにしても聖竜の秘宝とは！あまりに馬鹿らしくて本気で信じる気にもなれなかったが、よく考えれば一番ありえそうな話ではないか。そうだぞ、聖竜の秘宝はひとつは槍、ひとつは剣、ひとつは盾、ひとつは……ああ、もうそんなことはどうでもいい！！問題はそのうちの何をあの子が持っているのかだ……！」

センルは暖炉の前をせわしなく独り言を呟きながら歩くのをやめ、

突然革のブーツの踵で床の上を叩いた。そして、その段に至つてようやく、セシルはエリメレクが自分を見つめる眼差し　　気遣いを見つめるような眼差し　　にハツと気づいたのである。

「す、すみません。つい興奮して……少し、頭を冷やしに外へ出てきます。自分の考えをまとめたいので」

だが、この時そう言うか言わずかのところで、セシルの口からはまたも気狂いじみた独り言が次々と流れ出ていた。

セシルは中等部の中庭にある魔法の日時計（その日時計は正午近くを指していた）を眺め、高等部の校舎脇にあるガラス張りの温室で世界中の植物が栽培されているのを見、それから大学の敷地内で飼われている動物の檻の前を歩いていった。

そこにはライオンや象や孔雀、豹やオウムなど、珍しい生き物がいたが、セシルはそちらのほうにはちらとも目をくれず、とにかくカーディル王立魔術院の広い建物をぐるっと一巡してから、ようやく再びエリメレクのいる学長の屋敷まで戻ってきたのである。

だがセシルは、彼の姿を見ると「まだいるとは思わなかった」というような顔をし、さらには自分から用向きがあつて訪ねてきたことも忘れ、「今日はこれで失礼します」と、まるで独り言のよう呟いて、さっさとその場を辞去してしまった。

帰り道、ウンディーネがセシルに別れの挨拶をしに再び姿を現したが、彼は気もそぞろな感じて、乗ってきた馬のことも頭になく、そのまま歩いていこうとしたくらいである。

ちよつと！あんだ馬に乗ってきたんじゃないやなかったの、セシル？もしあのまま放つておいたらあの子、大学院の連中にも、魔導生態学の材料に使われちゃうわよ

「ああ、忘れていた」と、エルフの言葉ではなく、聖五王国の共通語であるルーシス語で答え、セシルはピユイト、指笛を鳴らした。

すると、すぐそばの柳の木陰から白馬が姿を現し、鼻面をセシルの顔にぴたりとくっつけてくる。

「おお、よしよし。そうか、ずっとここにいたいか……貸し馬車屋

の主人は馬使いが荒すぎる？気持ちわかるがな、私にもそれはどうにも出来ないことなのだよ。許しておくれ」

そう言っただけでセンルは馬に飛び乗り、学長の屋敷から出てきたエリメレクに会釈ひとつ、目礼ひとつするでもなく、そのまま何も言わず、真つ直ぐに駆け去ってしまったのである。

どうしちゃったのかしらね、あの子。昔からちよつと変わったおかしな子だとは思ってたけど

おそらく、真実を探りあてられたのだらうよ」と、エリメレクはウンディーネの、魚の鰓のような耳を見上げて言った。あの方は賢いお方だ……そして賢いがゆえに、一の事実で十の真実、いや、十の事実で百の真実を見抜いてしまわれたのかもしれない。いずれにせよ、次にあの方がここへやって来られた時、何を申されるのか、わたしは今からそれが楽しみでならんよ

あら、あの子、またここへ来る予定があるの？

またそう、日を置かずして参られるであらうよ。おそらくその時には、誰か他の、旅の仲間の方でもお連れになることだろう

もしかして、恋人かしらね？あの子の母親も、大体あの子くらいの歳で人間の男と駆け落ちしちゃったのよ。わたしなら、永遠の命よりも恋のほうを選ぶだなんて、考えられもしないけど、結局あの子は人間とエルフのハーフだから、わたしたちにはよくわからないところがあるのかもしれないわね

そうさのう。なんにしてもわたしはあの方が羨ましいよ。眩しいほどの若さと美しさと賢さに満ちておられるところが、特にな。本人はもしかしたらそのことに、お気づきでないかもしれないが……

この時、エリメレクがウンディーネにエルフ語で語っていたとおり、センルは少なくとも自分が若いとは感じていなかった。確かに伊達に三百年生きていないだけあって、普通の人間よりは多少賢かるうとは思つものの、カーデルの城下町へ戻るまでの道々、センルは珍しくも自分のことをなんとという愚か者よと、繰り返し罵倒してさえたのである。

（そうだ。エリメレク殿が言っていたとおり、おそらく事実はおもしかしたら意外に単純かもしれないのだ。わたしはずっと、聖書に書かれている言葉や神話や伝承の類といったものは……ある部分は寓話だろうと思うようになっていた。だが、もしその解釈も考慮に入れつつ、また同時に書かれていることや言われていること、伝えられていることが事実であり真実であるというふうにあるまま受け容れて考えるとしたら？）

糸杉に挟まれた小径のところ、常歩でゆっくり馬を進めながら、センルは馬上で自分の考えをまとめていた。何故といって、城下町の大通りの喧騒に巻きこまれてしまっただけで、ここまで集中して何かを考えるとすることは不可能に近いからだ。

（ゼロラの民は、絶えず争いごとを繰り返す中央世界の人間たちが嫌になり、彼らと分離することを神に願ったという。だから彼らの住むく地の崖で>という場所には、天国へ続く扉があると、一般に人々は信じている……が、これは正確に言うとしたら、聖書の中にはない記述なのだ。ただ我々はゼロラの民が心正しく神に選ばれた民であったことから、そこにはそのようなものがあるであろうと、民間伝承として信じているというそれだけだ。ここでエリメレク殿の言ったとおり、仮にく地の崖で>という場所が本当であって、聖都ルシアスを攻めたのがゼロラの民の子孫であったとしたらどうだろう？世界を囲む七海　エルヴァルト海、セスアラシア海、デュークセヴァリア海、サンエマルト海、カイスヴィリーフ海、ノヴァールスヴァルト海、ミドルネシア海　は、神自身が境を設けて海獣が棲むことにより、く地の崖で>との行き来を禁じたと言われるが、このことも私は本当にそうなのだとは、想像してみたこともなかった。ああ、だが、テガシエルパの民……奴らは船を自国の領土として世界を旅しているのだから、もしかしたら何か知っているかもしれないな。しかしながら、私も一度会ったことがあるが、あいつらはやたら口が堅い。金などいくら積み重ねようと、掟を破ってよそ者にべらべら余計なことをしゃべったりはすまい……それにして

も、ここまでの仮定をもし正しいとしてみた場合、よりによって奴らは何故「今」攻めて来たんだ？何度考えても、そこがわからぬ。中央世界の人間どもは道徳的に墮落しているから攻撃せよ、との神からの命でも受け、制裁を加えにきたというわけでもあるまい。だが、奴らはそうすることで何か己に利するところが……)

ここでまたさらに、セシルは新たに目が見開かれる思いがした。
(そうか！私はてっきり奴らが　　姫巫女の御身を手に入れることで、全世界の覇権を掌中にしようとしているのかとばかり思っていたが、そうではなく、奴らが欲しかったのは、聖竜の秘宝なんだ！
！ひとつは剣、ひとつは槍、ひとつは盾……ああ、私の聖書に関する記憶は相当錆びついているな。ホテルへ戻り次第、ミュシアに聖書を読ませてもらわないと……)

この時、セシルの脳裏にふと、カーディル王立魔術院の門衛ふたりの姿が思い浮かんだ。彼らが胄と鎧を身に着けていたことを思いだし、(まったく、私はなんとという大馬鹿者だ！)と、ここでもまたセシルは己を叱咤した。

(ひとつは剣、ひとつは槍、ひとつは盾、ひとつは鎧、ひとつは胄……残りはおとふたつだ。確か、そうだ　　確か、ひとつは指輪、ひとつは杯ではなかったか！？これらは別名<七つの聖鍵>とも呼ばれているものだ。そうか、だから<鍵>だとあの邪霊どもは言ったんだ。聖なる秘宝のその名すら口にしたいくないというわけだ。ミュシア、あの子の体に入るとしたら、指輪か杯ということになるな。もちろん、魔術を使えば、体内に剣を隠すことも出来るには出来るが……剣も槍も盾も鎧も胄も、基本的には男が身に着けるものだ。それに対し、指輪は聖竜ルシアスが愛する妻ルーシユに愛の証として贈ったもの、また杯はそこに聖竜が血を流し、またそれをルーシユが洗って薬草エレクシエルを浸したものだと言われる。もしこのふたつのうち、ミュシアが所有しているとしたら、指輪よりは杯のほうが可能性として高いことになる。あるいは、そのふたつともということもありうるのだろうか？巫女や神官といった聖職にある

者は、装身具を一切身に着けてはならぬという決まりがあるから、指輪を見えるところに飾るのはまずいという事情はあるにしても……いや、そのことはまたあとでミュシア本人にも聞いてみよう。なんにしても、<地の崖で>の王のアシユランスの目的はおそらく、聖竜の秘宝をすべて集めることなのだろう。だが、ここからはさらに私の想像の領域を出ないことなのだが　ルシア神殿に杯と指輪の一方が眠っていたとして、ルシア神殿には何も無いということがありうるだろうか？<地の崖で>の蛮族どもは、両方の神殿を踏み穢していったという。ということは、だ。どこかに目当てのものがないかどうかと、その財宝の在処を探し回っていったということなのではないか？もし仮にルシア神殿で守られていたものが剣でも槍でも盾でも鎧でも、そう考えた場合向こうの手に渡ってしまっただという可能性は高い)

そこまで考えると、セシルは嘆息した。正直なところをいって、流石にもう頭がパンクしそうだった。与えられている確かな情報は少ないのに、もしかしたらこうではないかああではないかと、危惧する要素ばかりが増えていく……それというのも、すべてはミュシアのせいだと、セシルはそう感じずにはおれない。

貸し馬車屋に白馬を返した時、セシルは馬が自分と離れがたく感じていたのを知っていた。それで、もしこの町から出ていく時に馬が必要になったら、必ず迎えに来るといふ約束をエルフ語で囁いてしまったが、同時に内心では(そんな約束をしてなんになる)とも思わずにはいらなかった。

それで<ヤースヤナ・ホテル>へ戻る道々、セシルは軽い自己嫌悪にすら陥っていたかもしれない。貸し馬車屋の白い馬に対してではなく、自分がミュシアと約束した「出来る範囲内のことなんてもしてやる」といふ言葉など、空文も同然ではないのか、という気がしてきたからだ。

(私が一体、あの子のために何をしてやれる？そうだ。もしもう一度奴らが聖五王国のうちどこかへ攻めこんできて　生き逃れた

であろう、<聖竜の姫巫女>がどこかに隠れているのはわかって
いる、彼女を差し出さぬ国は順に滅ぼしてゆくぞと脅していったと
したら？おそらくあの子のことだから、真っ先に自分から名乗りを上
げて、そのアシュランスとかいう男に投降してしまうだろう。考え
るだにまったくぞつとするが、私が一番嫌なのは、その時に自分が
そばにいながら何もしてやれないかもしれないことだ……そうだな
危険とかなんとか、そんなことはもはや言っておられぬ。例の禁術
を、エリメレク殿に協力してもらってなるべく早く完成させよう。
いや、私はその相談のためにこそ、彼の公邸を訪ねたというのに、
まったく何をしているのだ。エリメレク殿が私のことを無礼な頭の
おかしい奴と思っていないといいのだが……)

セシルが<ヤースヤナ・ホテル>のロダールの間に戻った時、ド
アを開けた脇、コンソールの置かれた下に、新品の編み上げ靴が置
いてあるのがわかった。靴を新調してすっかり上機嫌になったのか
どうか、シンクノアがソファの上でフンフンと鼻歌を歌っているの
が聞こえる。

「あ、おつかえり〜 どうだった？エリメレクどんとの会合は？」
「カルディナル王国最高位の魔導士に対して、エリメレクどんはや
める。それより、ミュシアはどうしてる？」

シンクノアは通りの屋台で買ったらしい、サンドイッチを口いっ
ぱいに頬張っている。ハムや鶏肉、野菜を挟んだものなど、テーブ
ルの上に並んでいるもののひとつを、セシルは遠慮なくつまんだ。

「コーヒーでもお入れしやしようかね、旦那？ミュシアちゃんなら、
寝室にこもってお祈りするとか言っていましたよ。なんていうんでし
ょうなあ、世俗における穢れにもう、ほーんのちよっぴし触れたっ
てだけなのに、罪悪感を感じるのかもしれないなあ。今ごろ『神
よ、お許してください』とでも言っつて、懺悔してたらどーしましょ」

「まさかとは思つが貴様、ミュシアを変なところに連れていったり
しなかったらうな？城下町にはかなり大きい賭博場があるが、神
官というのは当然、賭け事は禁じられているんだぞ。そんな場所に

ちょっとだけとか言って……」

「ちーがいますって！！誤解しなさんな、旦那」シンクノアは暖炉の火にかけていたやかんの湯でコーヒー豆をこしながら、センルのカップにそれを注いだ。こうしたのもすべて、金物屋や雑貨店で買ってきたものだった。

「ま、ミュシアちゃんが出てきたら旦那にもわかりますだよ。きししし」

おかしな笑い方をしているシンクノアのことは無視し、センルはとりあえず軽く食事をした。そしてミュシアの分のサンドイッチを残しておこうと思い、センルがそれにハンカチをかけようとした時不意に、続き部屋のドアがかちやりと鳴り、ミュシアがそこから出てきた。

それと同時に、センルにもようやくわかったのだ。シンクノアが何故あんなに上機嫌で、しかも鼻歌まで歌い、さらには意味ありげな笑い方をしていたのかが……。

「あの、わたし、変じゃないですか？こんな服、わたし今まで一度も着たことがないものだから……」

「いや、そんなことはない」

センルはソファから立ち上がると、ミュシアがどきまぎするくらい、色々な方向から彼女のことをかなり真剣に眺めた。

「仕立て屋に頼んでも、最低一週間以上はかかると思っていたがよくこんななにびったりした服を見つけたものだな」

「それがですねえ、センルの旦那」と、シンクノアが茶々を入れるように言った。「どこぞの貴族のお姫さんだが、気に入らないと行って、ドレスをつき返してきたんですと。来月の第十三の月って、城下町で謝肉祭カーニバルが行われる月らしいですな。んで、その時に着る衣装をってことだったらしいんですが、そいつをそのまま売るにしたらってなかなか派手目のドレスなので難しいじゃござんせんか。そこです、ね、パーツごとに全部ばらかして、また違う服に仕立て直したってわけで、それがたまたまこうミュシアちゃんにピタッと合っ

ちゃったってな具合なんですな、これが」

薄桃色のカシミアの生地が、ミュシアの白い喉元までをおおい、そのすぐ下にレースのリボン飾りがついていた。そしてそこからオパールボタンが細いウエストまで流れるように付き、スカートのはうは二段のフリルによって覆われている。袖飾りと裾飾りとして銀の三つ編み模様が縁取りされており、地味なようできてなかなか悪くないドレスだと、セシルはそんなふう思った。

「俺もさー、ちよっくら調子ぶっこいてセシル先生のお金でお洋服でも新調しよーかと思っただけど、なんか今、仕立て屋さんって忙しいらしいね？来月にあるカーニヴァルに向けて、おおわらわらしくって、昔からのおつきあいの方でもない限り、今は受け付けられませんとか言われちまってさ。もう、オーマイガーツ！！てな感じ？」

「確かに貴様も、その乞食のかかしみたいな格好はどうにかしなないと」

セシルは着古したシンクノアの革の胴着とウールのズボンを見て言った。

「といつても、私は貴様のために贅沢をさせたいわけではない。ルシアス神殿の神官殿が乞食のかかしと一緒にいたのでは沽券に關わるという意味で 武器防具屋にでもいって、何か適当に見繕ってくるのための金をやるう。好きに使うといい」

「いやん、セシル先生、そんなつ。ちよつと俺のこと甘やかすすぎじゃないっすか!？」

気味悪く体をくねらせているシンクノアのことは無視して、セシルはミュシアのために紅茶を淹れてやった。彼女はどこか恥かしそうに頬を上気させて、ちんまりとうさぎが草でも食むようにサンドイッチを食べている。

「よし、では私はエリメレク殿と話したことで 少し、色々と考えることがあるのでな。向こうの寝室で横にならせてもらう。もし私が出てこなかったら、これで」

セルルはそう言って、今朝銀行で下ろしてきたクラウン金貨を十数枚テーブルの上へ置いた。

「夕食を済ませて、出来れば私の分の食事も適当に買ってきておいてくれ。頼む」

「あ、あの……セルルさん」

ミュシアは、ソファから立ち上がったセルルのことを、いつもの気遣わしげな眼差しで見上げた。

「もしかして、どこかお加減が悪いんじゃないですか？気のせいかもしれないんですけど、エリメレクさんのところから戻ってきてから、少し顔色がお悪いような気がして……」

（そんなに顔に出ていたか）と思い、セルルは微かに笑うと、ミュシアの頭をぼんぼんと撫でた。

「おまえが心配するようなことじゃない。それよりもその服、似合ってると思うぞ。まあ、ミュシアも時々男の振りをすることなんか完全に忘れることだ。じゃないと、疲れて神経のほうが悪くなるかもしれないからな」

「えっと、でも……」

セルルは、ミュシアの瞳の中に複雑な感情の影が揺れているのを見てとった。だが、それ以上は特に何も言わず、隣の寝室へいくことにした。そして蓋付きの机を開け、羊皮紙に羽根ペンで色々なことを書きつけはじめた。ミュシアの聖書がそばにあったので、そこに書かれた世界の創世から聖竜と暗黒竜の戦いのこと、聖者たちの言行録についてまで読み耽り、色々と参考になることもあるにはあったにせよ、結局のところすべては推測に過ぎないという思いに、セルルは打ちのめされることになる。

（明日、再びエリメレク殿のところへ行ってみることにしよう。エリメレク殿はお忙しい身であるのに、偶然今日お会い出来たというのは、本当にラッキーなことだった。とりあえず、私の頭の中で大体のところ事はまとまった……が、これ以上のことは行き止まりなのだ。こうしたことのすべてをもしお話したら、エリメレク殿であ

ればおそらく、いい知恵をお貸しくださいさるだろう。しかしながら、あの方にもカルディナル王国のプリンクとして、お立場というものがおありだろうから、ミュシアのことについては、よくよく注意して情報を小出しにしないと……）」

セシルはインク壺の口を閉め、羽根ペンの口を吸取紙でふくと、机の蓋を閉じ、考えごとのすべてを頭の外へ一旦追い出すことにした。それから色々な国の言語で書かれた羊皮紙を、暖炉の火にくべてそのまま燃やしてしまう。

すでに夕闇が濃く迫る時刻となっており、セシルが隣の居間へ戻ると、シンクノアとミュシアがどこか深刻そうな顔をして、彼のほうを見返してきた。

「どうした？私がおし出て来なかったら、適当に夕食のほうは済ませておけと……」

そう言いかけて、テーブルの上に三人分の夕食らしきものが置いてあるらしいのを、セシルは見てとった。

「だってさー、あんたエリメレクどんのところから帰ってきた時、浮かない顔してたじゃん？たぶん何かあんまり良くないこと言われたんじゃないかって、ミュシアちゃんも心配してたから、そんなんで二人だけで飯食ったって、まずいだけだからな。ま、そーゆーこと」

ミュシアがナプキンを取ると、その下からは鶏の丸焼きやポテトパイ、カスタードソース添えのケーキなどが現れた。

「セシルさん、お金はセシルさんが出してくれたとしても……それ以外のことは全部、三人で分け合いますよ。もちろん、わたしやシンクノアに話しても、何も変わらないかもしれないけれど、でもそんなふうにはひとりだけで色々考えこまないでくださいっ！」

（まったく、この子は……）」

わかっているのか、わかっていないのかと思いつつ、セシルはとりあえず腹が減ったと思って食事をした。彼が色々隣の部屋で考えこむ間中、こちらではこそりとも音がしなかったので、てっきり

出かけているのだろうとばかり思っていたが、そんな気の遣われ方をされていようとは、思いもしなかったのである。

「まあ、吉報としては、エリメレク殿が話のわかる良い方だったということだな。それに、彼の話してくれたことの中から、私のほうで勝手に類推してわかったことも色々あった。つまり、私が浮かない顔をしていたように見えたのは、そのせいだ。ああかもしれないし、こうかもしれないと、まだ断定できない不確定要素を組み合わせて考えすぎてしまったのかもしれない。だがまあ、もう一度エリメレク殿に会って話をすれば、いい方向にせよ悪い方向にせよ、それもまた変わってくるだろう」

「そっか。てつきり俺、エリメレクどんに、ミュシアちゃんを渡せ！とかって脅されたのかと思っちまったよ。我々で守ったほうが安全だとかなんとかわれてさ」

どこかハツと息を飲むようにして、ミュシアがセールのほうを振り返った。その眼差しや顔つきは、貸し馬車屋で白い馬が見せたのとまったく同じものだったかもしれない。

「そんなところまで今日初めて会った相手に話すほど、私も馬鹿じゃないさ」

そう言っただけで、隣のミュシアのことを安心させた。

「ただ、事態はもしかしたら、私がひとり複雑に考えていただけで、案外単純なことなのかもしれない……まあ、なんにしてもエリメレク殿と次に話して色々なことがわかったら、シンクノアとミュシアにもそのことはいずれ話す。それと、暫くの間私の態度はほんやりして置いておかしかもしれないが、気にしないでくれ。考えごととに夢中になると、昔からこういうふうになるんだ」

「へいへい」

とシンクノアが答え、ミュシアもようやくほっとしたような顔を見せた。

それから三人は夕食を囲み、今日町であったことや出会った人についてなど、他愛のない話をして笑いあった。セールはその時にふ

と、胸に温かいものがこみあげてくるのを感じて、こんなふうに分が感じるのは、一体何年ぶり……何十年ぶりであったろうとふと思った。

（シンクノアとミュシアは、私が美味しいものをたらふく食べさせてくれたり衣服を新調させてくれるということ、やたら有り難がってくれるが）と、セシルは内心で微笑った。（本当はおまえたあのほうが、金で買えないものを私に与えてくれているのだとは夢にも想像してみないのだろうか）

セシルはこの時ふと、カーディル王立魔術院の学長の屋敷の庭で、ニシキギの赤く燃えるような葉を見たことを思いだした。まわりの花は枯れ、樹木の多くも葉を落とした中で、鮮やかな紅に燃えているようなニシキギの葉は、セシルに忘れていたものを思い出させ、再びそれを与えてくれたのだ。

その昔、王立魔術院で知識を吸収するの喜びとしていた青春時代のこと、ナディアが自分のことを自慢に思ってくれるためなら、なんだってしたいと思っていたこと、それから、もしいつかそんな日が訪れるのなら、心から誰かを愛してみたいと願った日のことを……。

ミュシアがバルコニーに続く窓から外を眺めていた時、セシルは彼女の脇に立って、ミュシアが見ているのと同じものを遠く眺めやっただ。

「あの、セシルさんっ」と、ミュシアは興奮したように顔を上気させて彼に聞いた。「王城や王立魔術院の建物が、まるで夢のお城か何かみたいにキラキラ輝きながら、幻みたいに光って見えるのは何故なんでしょうか？」

「ああ、あれか」

セシルは、海を背景にして、小高い山の上に立つ王城が、ぼんやりと青く全体を浮かび上がらせ、王立魔術院のほうは陽の光を反射したように輝いているだけでなく、その光の洪水が魔法のように湖に流れていく光景を、懐かしい思いで眺めていた。

「あれは、建物の石に魔法の切石を使っているそのせいだろうな。

昼間はどうっていうこともない普通の石なんだが、夜になるとこんなふうにして石に宿った魔法の力が輝きだすんだ。ミシユラルという名前の珍しい石で、大きいものはそうはなかなか取れないんだが

魔法の力で人工的に同じものが作れないかっていうことを研究して、とある高名な魔導士がある日その合成に成功したんだ。まあ、それでもひとつの石にあれだけの魔力をこめるといのは、第5級^{ワイセル}程度の魔導士にも、なかなか大変なことだろうよ」

「セルさんは本当に、色々なことをご存知で、すごいです」

その時セルは、自分を尊敬の眼差しで見上げるミュシアの瞳の中に、黒耀石のように輝く、何か美しいものが宿っている気がした。そう、魔法の石の輝きなどよりも、セルにとってはこちらのほうがよほど、滅多に手に入らぬかけがえない宝物であるような気がしたものだ。

（まったく、この私にそんなことを一瞬でも思わせる、おまえのほうかよほど凄いや）

ミュシアはそんなセルの心中を知ってか知らずか、まるで精霊の住みかでもあるような王立魔術院の方角と、魔法のようなお城とを交互に眺め　そして星屑のような民家の明かりの数々を見つめてこう願った。今自分がとても幸せであるように、この不思議な光景の中にあるすべての人が、心から幸福でありますように、と……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4576z/>

聖竜の姫巫女？

2011年12月20日01時47分発行